熊本県文化財調査報告第334集

弓削前畑遺跡
竹ノ後・芭蕉遺跡群

―白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（7）―

2019.3

熊本県教育委員会

弓削前畑遺跡　竹ノ後・芭蕉遺跡群

熊本県文化財調査報告　第三三四集

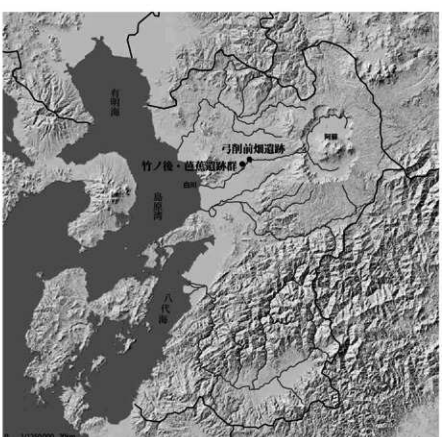
二〇一九　熊本県教育委員会

発行者　：　熊本県教育委員会
所　属　：　教育総務局文化課
発行年度　：　平成30年度

熊本県文化財調査報告第 334 集

弓削前畑遺跡
竹ノ後・芭蕉遺跡群

―白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（7）―



2019. 3

熊本県教育委員会

序　文

平成２４年７月１２日に発生し、気象庁が「これまでに経験したことのないような大雨」と発表した「平成２４年７月九州北部豪雨」は、県内各地で河川の氾濫や住宅の全半壊、床上浸水などの甚大な被害をもたらしました。

熊本県教育委員会では、災害復旧事業に伴い、平成２５年度から河川改修等の施工予定地内の発掘調査に着手し、平成２９年度に実施した竹ノ後・芭蕉遺跡群と弓削前畑遺跡の発掘調査をもって現地における発掘調査を無事に終了することができました。

発掘調査の結果、弓削前畑遺跡では弥生時代後期を中心とした竪穴建物や多くの遺物が見つかりました。また、竹ノ後・芭蕉遺跡群では縄文時代前期の土器群のほか、弥生時代の墓や古墳時代終末期の竪穴建物などが発見されました。

なお、今回は熊本広域大水害に伴う復旧事業での最終報告書となることから、これまでに実施した試掘・確認調査や工事立会などの結果についても併せて掲載することとしました。

本報告が、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助となるとともに、災害の記憶を次世代へと伝え、防災意識の醸成に少なからず寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を賜りました地元の皆さま、並びに関係機関、そして調査にあたって御指導、御助言をいただきました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

平成３１年３月３１日

熊本県教育長　宮尾　千加子

例　言

1　本書は、白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い、記録保存を目的として実施した、熊本県熊本市北区龍田町に所在する弓削前畑遺跡及び熊本県熊本市北区龍田７丁目に所在する竹ノ後・芭蕉遺跡群の発掘調査報告書である。

2　現地調査は、熊本県央広域本部熊本土木事務所の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。

3　弓削前畑遺跡の発掘調査は、古城史雄、坂井田端志郎が、竹ノ後・芭蕉遺跡群の発掘調査は後藤克弘、尾崎潔久が担当し、遺構実測及び写真撮影も各調査担当者が主に行った。

4　４級基準点及びメッシュ杭設置業務は、弓削前畑遺跡は八洲開発株式会社に、竹ノ後・芭蕉遺跡群は有限会社坂井設計コンサルタントに委託した。

5　整理・報告書作成は、平成 30 年度に熊本県文化財資料室で行った。

6　遺物の実測・製図は、中川治、島浦萌、古城が主に行い、戸田紀美子、坂本貴美子、藤本香織、宮本康代の協力を得た。弓削前畑遺跡の土器実測・製図の一部を株式会社アーキジオ熊本に委託した。

7　遺物写真撮影は、中川、島浦、古城が行った。図版１の空中写真は熊本市観光文化交流局文化振興課より提供を受けた。

8　本書の大扉の地図はカシミールで作成した。周辺遺跡分布図で使用した地図は、熊本県・市町村電子自治体共同運営協議会作成の地図を利用した。

9　本書の執筆は、古城が行った。

１０　本書の編集は、古城を中心に行い、中川、島浦が補助した。

１１　本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡　例

1　国土座標第Ⅱ系を基準とし、方位もそれに準じた。標高は東京湾平均海水面（Tokyo Peil［T.P.］）による。

2　報告書に掲載した実測図の縮尺は挿図ごとにスケールを示した。

3　須恵器については、断面を黒で塗色している。また土器は右に断面を、ついで内面を、左に外面を配置する。拓本の配置も同様であるが、拓本で内面だけを表示している場合は、下部に（内面）と表記している。

4　土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」（財団法人日本色彩研究所：2004）に準拠した。

5　写真の縮尺は任意である。

本文目次

序文
例言・凡例
目次

Ⅰ 弓削前畑遺跡
第１章　調査の経過
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査及び整理の組織 …… 1
　第３節　発掘作業の経過 …… 2
　第４節　整理作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果
　第１節　調査の方法 …… 7
　第２節　層序 …… 7
　第３節　調査の成果 …… 9
第４章　総括 …… 35
　参考文献 …… 38
　観察表 …… 39
　写真図版

Ⅱ 竹ノ後・芭蕉遺跡群
第１章　調査の経過 …… 71
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 73
第３章　調査の成果 …… 75
第４章　総括 …… 83
　参考文献 …… 84
　観察表 …… 85
　写真図版

Ⅲ 熊本広域大水害復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査について
第１章　施工箇所内の文化財の概要と予備調査について
　第１節　総括報告の目的 …… 93
　第２節　熊本広域大水害に伴う災害復旧工事個所について …… 93
　第３節　予備調査実施個所について …… 93
　第４節　試掘・確認調査の実施と概要について …… 99
第２章　文化財部局の取組
　第１節　発掘調査迅速化の取組 …… 125
　第２節　調査の経過 …… 126
第３章　未調査の埋蔵文化財個所の対応について
　第１節　工事立会とその結果について …… 129
　第２節　未調査個所の埋蔵文化財の今後の対応について …… 134
第４章　総括
　第１節　試掘・確認調査や工事立会の成果と課題 …… 135
　第２節　文化財部局の取組と課題 …… 135
　参考文献 …… 136
　写真図版

報告書抄録

弓削前畑遺跡挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（S=1/25000）…… 6
第２図　弓削前畑遺跡土層図（S=1/20）…… 7
第３図　弓削前畑遺跡グリッド図（S=1/800）…… 7
第４図　弓削前畑遺跡遺構配置図（S=1/400）…… 8
第５図　縄文時代出土遺物実測図 …… 9
第６図　１号竪穴建物遺構及び出土遺物実測図 …… 11
第７図　２号竪穴建物遺構及び出土遺物実測図 …… 12
第８図　３号竪穴建物遺構実測図 …… 13
第９図　３号竪穴建物出土遺物実測図 (1) …… 14
第10図　３号竪穴建物出土遺物実測図(2) …… 15
第11図　４号竪穴建物硬化面及び5号竪穴建物遺構実測図 …… 17
第12図　４号竪穴建物出土遺物及び5号竪穴建物出土遺物実測図 …… 18
第13図　６号竪穴建物遺構実測図 …… 19
第14図　６号竪穴建物出土遺物実測図 …… 20
第15図　７号竪穴建物遺構及び出土遺物実測図 …… 20
第16図　８号竪穴建物遺構実測図 …… 21
第17図　８号竪穴建物出土遺物実測図 …… 22
第18図　９号竪穴建物遺構及び出土遺物実測図(1) …… 23
第19図　９号竪穴建物出土遺物実測図(2) …… 24
第20図　１号土坑遺構及び出土遺物実測図 …… 25
第21図　２号土坑遺構及び出土遺物実測図 …… 27
第22図　３号土坑遺構及び出土遺物実測図 …… 27
第23図　４号土坑遺構及び出土遺物実測図 …… 27
第24図　５号・６号土坑遺構及び６号土坑出土遺物実測図 …… 28
第25図　１号円形周溝遺構及び出土遺物実測図 …… 28
第26図　１号不明遺構及び出土遺物実測図 …… 29
第27図　溝状遺構(旧SX10)出土遺物実測図 …… 31
第28図　包含層(旧SX01)出土遺物実測図(1) …… 32
第29図　包含層(旧SX01)出土遺物実測図(2) …… 33
第30図　その他包含層出土遺物実測図 …… 34
第31図　古代の出土遺物実測図 …… 34
第32図　弓削前畑遺跡と法王鶴遺跡調査区の位置図（S=1/5000）…… 36
第33図　弓削前畑遺跡と法王鶴遺跡熊本市第1次調査区（S=1/2000）…… 37

弓削前畑遺跡表目次

表１　周辺遺跡一覧表 …… 6
表２　土器類観察表 …… 39
表３　石器観察表 …… 47

表4　鉄製品観察表 …… 47

弓削前畑遺跡写真目次

図版1　法王鶴遺跡・弓削前畑遺跡空撮
調査区遠景　北西
図版2　1号竪穴建物 完掘状況　南
2号竪穴建物 完掘状況　北西
図版3　3号竪穴建物 出土状況　北
3号竪穴建物 完掘状況　北
5号竪穴建物 完掘状況　西
図版4　6号竪穴建物 完掘状況　東
8号竪穴建物 遺物出土及び完掘状況 北東
9号竪穴建物 完掘状況　南
図版5　1号土坑 完掘状況　北西
3号土坑 完掘状況　西
4号土坑 完掘状況　北
図版6　5号土坑 完掘状況　北
1号不明遺構 完掘状況　北
旧SX01 遺物 出土状況　北東
図版7　縄文時代出土遺物
縄文時代出土石器（写真のみ）
図版8　1号竪穴建物出土遺物
2号竪穴建物出土遺物
3号竪穴建物出土遺物
図版9　3号竪穴建物出土遺物
図版10　3号竪穴建物出土遺物
4号竪穴建物出土遺物
5号竪穴建物出土遺物
図版11　5号竪穴建物出土遺物
図版12　6号竪穴建物出土遺物
7号竪穴建物出土遺物
図版13　8号竪穴建物出土遺物
図版14　8号竪穴建物出土遺物
9号竪穴建物出土遺物
図版15　9号竪穴建物出土遺物
図版16　1号土坑出土遺物
2号土坑出土遺物
3号土坑出土遺物
4号土坑出土遺物
6号土坑出土遺物
1号円形周溝遺構出土遺物
1号不明遺構出土遺物
図版17　溝状遺構出土遺物
図版18　包含層(旧SX01)出土遺物(1)
図版19　包含層(旧SX01)出土遺物(2)
図版20　包含層(旧SX01)出土遺物(3)
その他の包含層出土遺物
古代の出土遺物

竹ノ後・芭蕉遺跡群挿図目次

第1図　竹ノ後・芭蕉遺跡群調査区位置図（S=1/5000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
第2図　土層観察用トレンチ南側壁土層図（S=1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第3図　竹ノ後・芭蕉遺跡群遺構配置図（S=1/500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第4図　竹ノ後・芭蕉遺跡群出土遺物分布図（S=1/600）及び出土遺物実測図 (1) ・・・・・・・・・・ 77
第5図　竹ノ後・芭蕉遺跡群出土遺物実測図 (2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
第6図　竹ノ後・芭蕉遺跡群土器棺遺構及び出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第7図　竹ノ後・芭蕉遺跡群竪穴建物遺構及び出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第8図　竹ノ後・芭蕉遺跡群不明土坑遺構及び出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82

竹ノ後・芭蕉遺跡群表目次

表1　土器類観察表 ・・ 85
表2　瓦観察表 ・・ 86

竹ノ後・芭蕉遺跡群写真目次

図版1　トレンチ土層断面　北
　　　　土器棺 検出状況　北
　　　　土器棺 出土状況　南東
図版2　SI01 竪穴建物 完掘状況　東
　　　　SK02 土坑 検出状況　東
　　　　SK02 土坑 検出状況　北
図版3　竹ノ後・芭蕉遺跡群出土遺物
図版4　竹ノ後・芭蕉遺跡群出土遺物

熊本広域大水害復旧・復興事業挿図目次

第１図　白川全体位置図（S=1/350,000）…… 94
第２図　熊本市工区試掘調査位置図（S=1/50000）…… 95
第３図　菊池工区試掘調査位置図（S=1/50000）…… 96
第４図　阿蘇工区試掘調査位置図（S=1/50000）…… 97
第５図　土層堆積例 …… 100
第６図　竜田口遺跡・新南部遺跡群（県11次）トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）101
第７図　新南部遺跡群（県10次）トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 102
第８図　新南部遺跡群（県12次）トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 103
第９図　竜田陣内遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 104
第10図　下南部遺跡トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 105
第11図　牧鶴遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 106
第12図　王田遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 107
第13図　竹ノ後・芭蕉遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 108
第14図　上南部遺跡トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 109
第15図　北上遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 110
第16図　吉原遺跡トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 111
第17図　中江遺跡トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 112
第18図　弓削前畑遺跡・法王鶴遺跡トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）…… 113
第19図　託麻弓削遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図1（S=1/50）…… 114
第20図　託麻弓削遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図2（S=1/50）…… 115
第21図　西鶴遺跡・居屋敷遺跡トレンチ位置図（S=1/3000）・土層断面図（S=1/50）…… 116
第22図　内牧Ｂ遺跡トレンチ位置図（S=1/3000）・土層断面図（S=1/50）…… 117
第23図　塔の本遺跡・丸ノ内遺跡トレンチ位置図（S=1/10000）・土層断面図（S=1/50）…… 118
第24図　阿蘇谷条里跡（手野遊水地）トレンチ位置図（S=1/12000）・土層断面図（S=1/50）…… 119
第25図　西小園前田遺跡トレンチ位置図（S=1/6000）・土層断面図（S=1/50）…… 120
第26図　下の原Ａ・Ｂ遺跡・甲賀遺跡(輪中提)トレンチ位置図（S=1/6000）・土層断面図（S=1/50）121
第27図　輪中堤③黒流地内トレンチ位置図（S=1/6000）・土層断面図（S=1/50）…… 122
第28図　手野遺跡トレンチ位置図（S=1/3000）・土層断面図（S=1/50）…… 123
第29図　近田遺跡トレンチ位置図（S=1/1500）・土層断面図（S=1/50）…… 124
第30図　吉原遺跡遺構配置及びグリッド図(S=1/500)…… 131
第31図　吉原遺跡５号甕棺墓実測図(S=1/20)…… 132
第32図　吉原遺跡６号甕棺墓実測図(S=1/20)…… 132
第33図　吉原遺跡５号・６号甕棺墓甕棺実測図(S=1/6)…… 133

熊本広域大水害復旧・復興事業表目次

表１　熊本広域大水害に伴う災害復旧工事個所一覧 …… 98
表２　吉原遺跡土器観察表 …… 134

熊本広域大水害復旧・復興事業写真目次

図版１　５号・６号甕棺墓 検出状況　南
５号甕棺墓 検出状況　北東
５号甕棺墓 出土状況　南
図版２　５号甕棺墓 完掘状況　南東
６号甕棺墓 検出状況　南
６号甕棺墓 完掘状況　南
図版３　５号甕棺墓甕棺 (1)
図版４　５号甕棺墓甕棺 (2)
６号甕棺墓甕棺

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

平成２４年７月１２日に発生した熊本広域大水害復興事業に伴う調査である。詳細な経緯は熊本県文化財調査報告書第３２０集『新南部遺跡群（第１０次・１１次）・吉原遺跡―白川河川激甚対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』を参照されたい。また本誌の「Ⅲ　熊本広域大水害復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査について」として記載している。今回報告する弓削前畑遺跡については、平成２９年９月２７日に確認調査を実施した。設定した４本のトレンチのうち１トレンチで弥生時代の遺物を、２～４トレンチで弥生時代の遺構と遺物を確認した。この調査結果について平成２９年１０月１８日付け教文第１６５０号で熊本県央広域本部熊本土木事務所に通知した。

すでに平成２９年８月１０日付け央土災一第９４－６号により熊本県知事名で文化財保護法９４条第１項の通知が熊本市教育委員会に提出され、平成２９年８月２３日付け文振発００１４２１号で熊本市教育長から熊本県教育長あてに進達されていたので、工事内容と確認調査の結果を照らし合わせた結果、発掘調査が必要と判断した。「発掘調査」の指示を平成２９年１０月２７日付け教文第１７４６号で熊本市教育長、熊本県知事あてに通知した。

第２節　調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

（１）　発掘調査の組織（平成２９年度）

調査責任者　岡村郷司（文化課長）
　　村﨑孝宏（課長補佐）
調査総括　岡本真也（主幹兼文化財調査第２係長）
調査事務局　左座　守（主幹兼総務文化係長）　稲本尚子・津田光生（参事）、竹馬牧子（主事）
調査担当　古城史雄（主幹）、坂井田端志郎（参事）
調査作業員　岡元美子、笠秀子、川上薫、木林忠司、桑名祐二、白石美智子、中村俊秀、早田咲百合、
　　堀部和憲、増村富貴子、三島多恵子、森本紀代子、山口泰明、吉住徹明

（２）　整理の組織（平成３０年度）

整理責任者　岡村郷司（文化課長）
　　村﨑孝宏（課長補佐）
整理総括　長谷部善一（主幹兼文化財調査班長）
整理事務局　一寶直也（主幹兼総務班長）、津田光生・松本哲郎（参事）、佐藤賢一（主任主事）、
　　竹馬牧子（主事）
整理担当　古城史雄（参事）、中川治・島浦萌・松永望宏（臨時整理補助員）

調査指導及び協力者（順不同・敬称略）

森先一貴（文化庁記念物課）、三好栄太郎（熊本市観光文化交流局文化振興課）
戸田紀美子、河津洋伶、木村ゆり子、近藤広子、坂口悦子、坂本貴美子、白木はる乃、東條博恵、
中村正子、西田法子、橋本由美子、藤本香織、松本直江、宮本康代

第３節　発掘作業の経過

調査は先行して平成２９年１１月１日（水）から７日（火）にかけ重機により表土剥ぎを行った。その後人力による作業を平成２９年１２月１３日（水）から開始し、平成３０年２月１６日（金）にすべての作業を終了した。

調査区周辺には空き地がなく、調査事務所や駐車場を近接地に確保することが出来なかったため、調査地点から５００ｍ程離れた熊本市所管の土地を駐車場として使用させてもらった。また調査地近くにあるこの工区の工事担当会社の現場事務所敷地内に車４台分のスペースを提供してもらい、毎朝５００ｍ程離れた熊本市所管の土地に一旦集合し、車４台に分乗し調査現場に向かうこととした。またトイレと器材倉庫分のスペースは工事用道路の隅になんとか確保してもらった。一方調査事務所は断念し、調査区内にテントを設営し休憩場所とした。同様に排土置き場も調査区の南、川までの間の狭いスペースしかなく、土量を賄いきれないことは明らかであった。そこで調査区内を分割し、まず下流側半分の調査を優先し終了させ、そこを廃土置き場にする方針で調査を開始した。結果的には下流側の調査個所１０ｍ程は攪乱が酷く遺構が存在しないことが調査開始の初日に確認できたので分割に調査することはなかった。

以下調査日誌に沿って記述する。

発掘調査日誌抄

（平成２９年）

１２月１３日　調査初日。作業員は総勢１４名だが、諸事情で１２月中は６名での調査となる。倉庫及びトイレの設置や器材搬入を開始。その後遺構検出のための清掃を始める。下流側１０ｍは攪乱が多く遺構は存在しないことが確認できた。川側の廃土置場がいっぱいになった時点でこの場所を排土置場とすることを決定。当面はこの個所にテントを設営し、上流側を重点的に調査を行うこととする。

１２月１４日　上流側において遺構と思われる個所を検出するが､明確ではないためトレンチを設定する（１Ｔ・２Ｔ）。トレンチを掘り下げると硬化面が確認でき、竪穴建物の可能性がでてきた。

１２月１５日　１・２トレンチの周辺を精査する。東側の遺構ラインが不明確ではあるが、ほぼ方形の輪郭となるため竪穴建物と判断した。

１２月１８日　調査区中央で遺構検出。予備調査時の試掘坑がかかっている。複数の遺構が重なっていると考えられるが先後関係が不明なので２本のトレンチを設定（３Ｔ・４Ｔ）する。またその西側にも焼土痕が存在するが清掃を行っても遺構らしきものは確認できないためここにもトレンチを設定（５Ｔ）。

１２月１９日　委託業者により４級基準点測量及びメッシュ杭設置作業が開始される。

１２月２０日　上流側より遺構番号を付け始める。先日設定した３・４トレンチで明確な硬化面を検出するものの遺構の切り合い関係は判然としない。複数の竪穴建物の切り合いと思われるが、便宜的にＳＩ０３とする。ＳＩ０３、ＳＩ０４の掘削を開始。
また年明けにテントを上流側に移動し下流側を廃土置き場にするため、上流側について再度精査を行い最上流側には遺構は存在しないことをあらためて確認する。

１２月２０日　ＳＩ０３の切り合いが依然として不明なため、３本目のトレンチを設定（６Ｔ）。

１２月２１日　本日は作業員３名のため、ＳＩ０４を集中して掘り下げる。

１２月２２日　ＳＩ０４の南側の土色がわずかに異なるためトレンチ（７Ｔ）を設定し掘削。

１２月２７日　ＳＩ０１、ＳＩ０２の掘削を行う。明日は人手が少なくなるので、本日中にテントを撤去。
１２月２８日　本年最終日。ＳＩ０４、ＳＫ０２土層断面図、７Ｔの遺物取上げを行う。岡本主幹来跡。
（平成３０年）
１月４日　調査を再開。年末に解体したテントを上流側に設営。下流側約１／３について掘削を行う。
１月９日　本日より調査作業員数が当初予定していた人数となり、作業がはかどり始める。
１月１２日　下流側について土が濁って見える個所はあるものの遺構の存在が確認出来ないため再度精査を行う。また必要に応じてトレンチを設定し始める（９Ｔ～１４Ｔ）。
１月１６日　ＳＩ０４の土層ベルトを取り外した後に床面の清掃を行う。
１月１９日　下流側に設けたトレンチ（９Ｔ～１４Ｔ）を掘削し、一部は拡張するものの遺構とは判断出来なかったが、否定することもできないため不明遺構としてＳＸをつけた。
１月２３日　調査も終盤にかかり、竪穴建物の土層図の作成およびベルトの撤去をすすめるなど実測作業が中心となる。
１月２５日　ＳＩ０３の切り合い関係が依然としてはっきりしないので、まず平面図を作成しそれを元に検討することとする。
１月３０日　ＳＩ０３について複数の切り合いと考えていたが、床のレベル差もほとんどないこと、鉤状の輪郭も樹根の影響も考えられることから一つの遺構と結論づける。
１月３１日　検出遺構の大半の実測、写真撮影が完了する。一方上流側で遺構の輪郭ははっきりしないが色調が若干異なる個所があるので、ＳＸ０５として検出を開始する。
２月１日　ＳＸ０５は竪穴建物であることが判明。また図化作業が遅れていたＳＩ０３は複数の遺構が重なっていると想定していたが、土層観察用のベルトからは複数の竪穴建物が重複するものではなく、単体の竪穴建物跡に幾つかの土坑が重なっているものと判断。
２月２日　ＳＸ０５の壁面と床面の検出作業を行う。その際にＳＸ０５と切りあっている土坑（ＳＫ０７）を確認。このＳＫ０７に遺物が集中する。
２月５日　検出した竪穴建物について図化及び写真撮影をほぼ完了。ただし竪穴建物に伴う柱を検出出来ていないものも多く、床面を掘り下げ、柱痕跡を確認する作業を開始する。
２月９日　竪穴建物以外の遺構の図化及び写真撮影がほぼ終了する。
２月１３日　遺構図面についての最終チェックを行う。また遺構のセクションポイントを遺構配置図にいれる作業を行う。
２月１４日　国道５７号（通称東バイパス）の橋梁から調査区の全景写真を撮影。
２月１６日　調査最終日。雨で１５日の作業を中止したため、ＳＸ１０の最終確認等一部の作業が本日まで残ってしまった。慌ただしい作業になってしまったものの、テント解体、遺物や器材の搬出トイレ及び器材倉庫の撤出を行い、すべての作業を完了させる。

第４節　整理作業の経過

調査地に現場事務所を設営できないこともあり、出土した遺物は毎週末に文化財資料室に持ち帰って、その都度洗浄と注記を行った。平成２９年度末には接合、選別までひととおり終えることができた。その際の遺物の取捨選択基準は、遺構から出土した遺物については図化可能なものはすべて選んだ。また遺構外出土の遺物は、各時代を反映している遺物で図化可能なものを選んだ。

遺物の検討結果から弓削前畑遺跡の遺構は竪穴建物跡が主で弥生時代中期から後期のものであること、遺

構外の遺物は縄文時代後・晩期の遺物および弥生時代中期から後期の遺物、またごく少量ではあるが古代の遺物も出土しているが主体は弥生時代であることがわかった。

平成３０年度当初に報告書に掲載する遺物の取捨選択を改めて行った。その基準はまず遺構については、甕、壺等セット関係を重視した。遺物が細片しか出土していない遺構の場合は細片でも選んでいる。一方、遺構外の遺物は、縄文時代及び古代についてはその時期を反映している代表的なものに限定して選択した。弥生時代の遺物は、周辺に他の遺構、例えば甕棺の存在をうかがわせる土器片や隣接する遺跡との関連を考えるうえで参考になる遺物などを選定した。

遺物実測は整理担当者で行ったが、一部は民間調査会社に委託した。委託期間は５月２５日から７月３１日までであった。遺構の製図については４月に図面の検討を行い、５月より製図を開始した。８月に遺構及び遺物の製図を完了させた。また、遺物写真の撮影も８月に行った。９月に遺物観察表や周辺地図などの作成作業を行い、図版のレイアウトを開始した。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

熊本平野は、東部に阿蘇外輪山から続く台地が拡がり、西部には白川などの河川によって形成された沖積地が大きく展開している。白川は西に向かって蛇行を繰り返し有明海へ注ぐが、中流域付近で大きく南西に向きを変え、その後小刻みに蛇行を繰り返す。この付近には縄文時代・弥生時代を中心とした遺跡が数多く存在する。弓削前畑遺跡はこの中流域右岸の河岸段丘上に位置する。地形分類では谷底平地にあたる。白川を挟んだ遺跡の対岸には託麻三山に数えられる神園山や小山山がそびえている。

本調査区は、遺跡の南東部分にあたり、国道５７号（通称東バイパス）と白川が交差する地点で、弓削大橋の橋脚から東側の範囲にあたる。

第２節　歴史的環境

弓削前畑遺跡周辺の歴史を、時代に沿いながら概観していく。

（１）旧石器時代

本遺跡群周辺では、旧石器時代の遺構・遺物が確認された遺跡が少数ながら存在している。白川左岸の小山山東麓に位置する石の本遺跡群では、後期旧石器時代の遺物が豊富に出土し、炭化物集中域や礫群が検出されている。県内を代表する後期旧石器時代の重要な遺跡である。

（２）縄文時代

本遺跡群周辺には縄文時代後・晩期の遺跡が数多く存在している。本遺跡も縄文時代後期・晩期の遺跡として報告されている。同じく白川右岸に立地する遺跡では、法王鶴遺跡で後期・晩期の遺物が、梅ノ木遺跡で早期から晩期の遺物、後期・晩期の集落跡が確認されている。白川左岸側に立地する遺跡では、託麻弓削遺跡群では、石組炉や土壙墓の他後期初頭から晩期までの遺物が、石の本遺跡群では早期の遺構、前期・中期の遺物、後期・晩期の集落跡が、中江遺跡では中期・晩期の遺物が、それぞれ確認されている。

（３）弥生時代

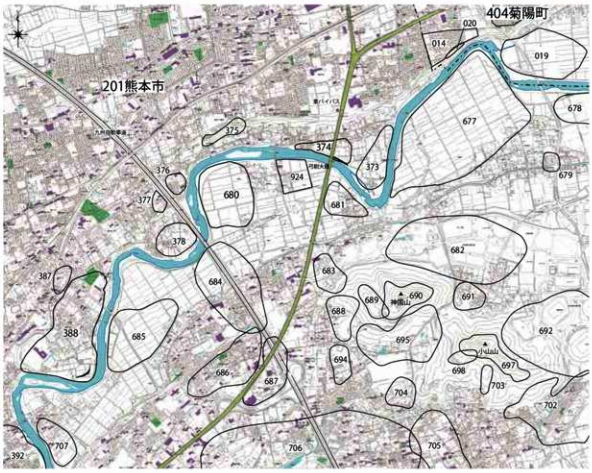
周辺では、弥生時代の遺跡も数多く確認されている。白川右岸では、隣接する法王鶴遺跡で、後期の竪穴建物が１９軒、環濠と考えられる溝を２条検出しており、後期の土器群が多量に出土している。また少し上流の梅ノ木遺跡では中期から後期の多くの竪穴建物による集落跡及び墓域が確認されている。一方左岸では、吉原遺跡で中期の竪穴建物、甕棺墓、土壙墓が、中江遺跡では中期の遺物がそれぞれ確認されている。託麻弓削遺跡群では、中期の甕棺墓、竪穴建物、後期の竪穴建物が検出されている。

（４）古墳時代

縄文時代、弥生時代の遺跡が数多く確認される一方、古墳時代の遺跡は数箇所確認されるのみである。吉原遺跡では後期から終末期の竪穴建物が７軒検出されており、その内６軒はカマドを持つ。石の本遺跡群では中期の集落跡が確認されている。白川右岸に位置する今石横穴群では９基の横穴が確認されているとされる。

（５）古代

神園山南麓に立地する神園山遺跡群や小山山南麓に立地する楤谷寺瓦窯跡からは、軒平瓦や丸瓦等が出土しており、渡鹿廃寺や国分寺に瓦を供給したことが明らかとなっている。神園田源屋敷遺跡では竪穴建物２軒、託麻弓削遺跡群では竪穴建物が検出している。右岸は、梅ノ木遺跡では竪穴建物６軒が検出されている。



第１図　周辺遺跡分布図（S=1/25000）

表１　周辺遺跡一覧表

熊本県（43）熊本市（201）

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別
373	法王鶴	北区龍田町	縄文・弥生	包蔵地
374	弓削前畑	北区龍田町弓削小坂屋敷	縄文～中世	包蔵地
375	弓削小坂横穴群	北区龍田町弓削小坂屋敷	古墳	古墳
376	弓削平ノ下Ａ	北区龍田町弓削平の下	縄文～中世	包蔵地
377	弓削平ノ下Ｂ	北区龍田町弓削平の下	縄文～中世	包蔵地
378	片彦瀬	北区龍田町弓削片彦瀬	縄文	包蔵地
387	吉ノ平	北区龍田町上立田	縄文～中世	包蔵地
388	竹ノ後・芭蕉遺跡群	北区龍田町上立田竹の後	縄文～平安	包蔵地
392	牧鶴遺跡群	北区龍田町上立田	古墳	包蔵地
677	託麻弓削遺跡群	東区弓削町	縄文	包蔵地
678	鹿帰瀬	東区鹿帰瀬町西原	縄文・弥生	包蔵地
679	弓削廃寺跡	東区龍田町弓削	中世	寺社
680	吉原	東区吉原町殿山	縄文～平安	包蔵地
681	石原町	東区石原町	縄文～中世	包蔵地
682	山尻遺跡群	東区龍田町弓削山尻	弥生	包蔵地
683	石原瀬々井	東区石原町瀬々井	縄文	包蔵地
684	北上遺跡群（供合塔ノ下遺跡）	東区上南部町、石原町	縄文・古代	包蔵地
685	上南部	東区上南部町村下	縄文	包蔵地
686	供合松ノ上	東区上南部町	縄文～中世	包蔵地
687	神園	東区長嶺町上西原	縄文～平安	包蔵地
688	神園桜井	東区長嶺町	縄文～中世	包蔵地
689	神岡山西麓	東区長嶺町下の山	古代	包蔵地
690	神岡山城跡	東区長嶺町下の山	中世	城
691	平山居屋敷	東区平山町	古代・中世	包蔵地
692	平山石ノ本	東区平山町	旧石器～縄文	集落
694	神岡山居屋敷	東区平山町、長嶺町	平安・中世	包蔵地
695	神岡山遺跡群	東区長嶺町、小山町	奈良・平安	包蔵地
697	小山城跡	東区小山町	中世	城
698	小山上の山	東区小山町	縄文～中世	包蔵地
702	小山上	小山町	弥生	包蔵地
703	榎谷寺瓦窯跡（小山瓦窯跡群）	東区小山町	奈良・平安	生産
704	中山	小山町	縄文～平安	包蔵地
705	小山山伏塚	小山町	弥生	墳墓
706	長嶺遺跡群	長嶺町	縄文～平安	包蔵地
924	中江	東区中江町	縄文～古代	包蔵地

熊本県（43）菊陽町（404）

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別
014	今石	津久礼、今石	縄文～中世	包蔵地
019	梅ノ木	津久礼、梅の木	弥生	包蔵地
020	今石横穴群	津久礼、今石	古墳	古墳

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

各調査区内に１辺１０ｍの正方形のグリッドを平面直角座標系に合わせて設定した。グリッドの中央から見て北東側杭のＸ軸Ｙ軸の数値を、Ｘ座標の百の位と十の位、続いてＹ座標の百の位と十の位を並べて表示しグリッド名とした。但し調査時は簡易化の為５ｍ単位で東西方向をアルファベットで、南北方向を算用数字で示す方法で行っており、遺物の取上げカードの調査地区名もこの表示方法で記入している（第４図）。

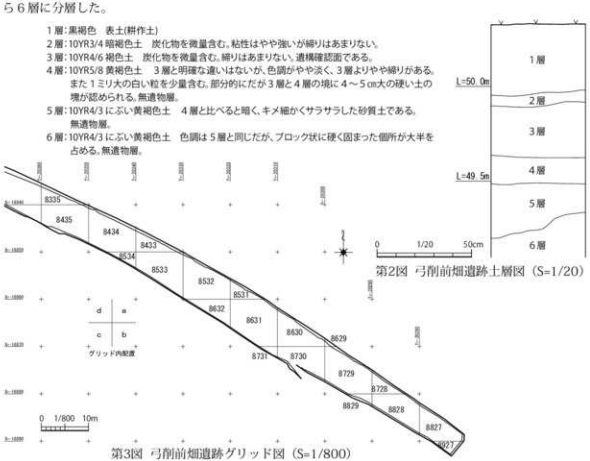
調査は重機により表土を剥ぎ、次いで人力による遺構確認のための清掃作業、遺構検出、遺構掘削という手順で調査を進めた。その後遺構配置図や土層断面図の作成、写真撮影を行った。

遺構の呼称は、調査面積が狭いことと併せて、遺構の性格も清掃段階である程度の推定ができたので、竪穴建物（ＳＩ）、土坑（ＳＫ）とし、遺構になりそうだがその性格が不明のものをその他遺構（ＳＸ）とし、それぞれ番号を振っていった。調査を進めるうちに、ＳＩとしていたが竪穴建物とは認定できないものは、本報告ではその他の遺構として扱っているため、遺構の説明は新しい遺構番号とともに旧遺構名を括弧書きにしている。またＳＸとしたものの、調査し始めると遺構ではないと最終的に判断したものは除外しているが、そこで出土した遺物は、遺跡の性格を考える上で必要と判断したもの、例えば甕棺片と考えられるものなどをその他の遺物として掲載した。

第２節　層序

東西と南側の壁はいずれも攪乱が酷いため、北側の壁で土層を確認した。北壁はそのまま白川の護岸となるため垂直に掘り下げることが出来ないため、表土から遺構確認面までの土層は８５３３グリッド杭の位置する北壁で観察したが、３層より下の土層については、４号竪穴建物内にある試掘坑の北壁で観察し、１層から６層に分層した。

1層：黒褐色　表土(耕作土)
2層：10YR3/4 暗褐色土　炭化物を微量含む。粘性はやや強いが締りはあまりない。
3層：10YR4/6 褐色土　炭化物を微量含む。締りはあまりない。遺構確認面である。
4層：10YR5/8 黄褐色土　3層と明確な違いはないが、色調がやや淡く、3層よりやや締りがある。
また１ミリ大の白い粒を少量含む。部分的にだが３層と４層の境に４～５cm大の硬い土の塊が認められる。無遺物層。
5層：10YR4/3 にぶい黄褐色土　4層と比べると暗く、キメ細かくサラサラした砂質土である。
無遺物層。
6層：10YR4/3 にぶい黄褐色土　色調は５層と同じだが、ブロック状に硬く固まった個所が大半を占める。無遺物層。



第3図　弓削前畑遺跡グリッド図（S=1/800）

第2図　弓削前畑遺跡土層図（S=1/20）

1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
1号掘立柱建物
1号竪穴
2号竪穴
3号竪穴
4号竪穴
5号竪穴
6号竪穴
7号竪穴
8号竪穴
9号竪穴
SX01
SX02
SX03
SX04
SX05
SX06
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5トレンチ
6トレンチ
7トレンチ
8トレンチ
9トレンチ
10トレンチ
11トレンチ
12トレンチ
13トレンチ
14トレンチ
15トレンチ
16トレンチ
17トレンチ
18トレンチ
19トレンチ
20トレンチ
21トレンチ
22トレンチ
23トレンチ
24トレンチ
25トレンチ
26トレンチ
27トレンチ
28トレンチ
29トレンチ
30トレンチ
31トレンチ
32トレンチ
33トレンチ
34トレンチ
35トレンチ
36トレンチ
37トレンチ
38トレンチ
39トレンチ
40トレンチ

第３節　調査の成果

時期不明の遺構を除けば検出された遺構はすべて弥生時代のものである。出土遺物の多くも弥生時代のもので、その他には縄文時代後期・晩期の遺物が少量だが出土している。古墳時代に属するものは皆無で、古代の土師器片も２点を確認しているのみである。

まず検出した遺構と遺物について時代の古い順から記述していく。

（１）縄文時代の遺物（第５図１～１３）

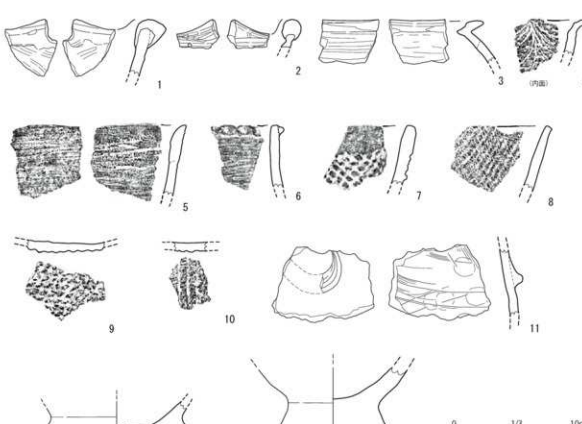
弓削前畑遺跡は、縄文時代の遺跡として遺跡地図に登録されているが、この地点では少量の出土にとどまる。表土剥ぎ前の地表面でも確認できたのは弥生土器のみであり、表土剥ぎ中でも認識しておらず、遺構を掘り下げる際に僅かに縄文土器片や石製品が混じる程度であった。

今回の調査区では、縄文時代晩期の土器が出土している。１～７、１０・１２は竪穴建物の埋土から出土している。

１～４は浅鉢の口縁部片で、１・２は波状口縁となる。４は口縁部内面の拓本を提示している。口縁部の注ぎ口状の部分で、数条の沈線が注ぎ口に向って刻まれている。

５～８は鉢或いは深鉢の口縁部片で、６は口縁端部に刻目突帯を巡らす。７・８は組織痕文土器の口縁部片である。９・１０は同じく組織痕文土器の胴部片である。１１は、渦巻き状に粘土紐を貼り付けるもので、天地は不明である。１２・１３は円盤貼り付け状の底部である。

その他写真のみの掲載で図化していないが、打製石鏃が５点出土しているが、いずれもどこか欠損がある。その他石錐、石匙、磨製石鏃各１点が出土している。



第5図 縄文時代出土遺物実測図

（2）弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴建物と土坑、円形周溝などである。遺物はおおまかには、弥生時代中期の土器と後期の土器が出土している。中期の土器は小片が多く、大きいものでも、反転復元で口径がわかる程度である。一方後期の土器は完形品はないもののある程度の器形がわかるものも一定量あり、出土点数も多い。

竪穴建物跡

竪穴建物跡９軒を検出した。この他に１軒（旧ＳＩ０７）を当初は竪穴建物としていたが、検討の結果除外しているものがある。この遺構は不明遺構として別項で記載している。

調査区の幅は最大で８m程しかないので、明確にはできないが、竪穴建物は川の反対の北側に位置し、唯一３号竪穴建物がやや川よりにあるのみである。調査区の川側である南側では３号竪穴建物以外明確な遺構は検出されていない。

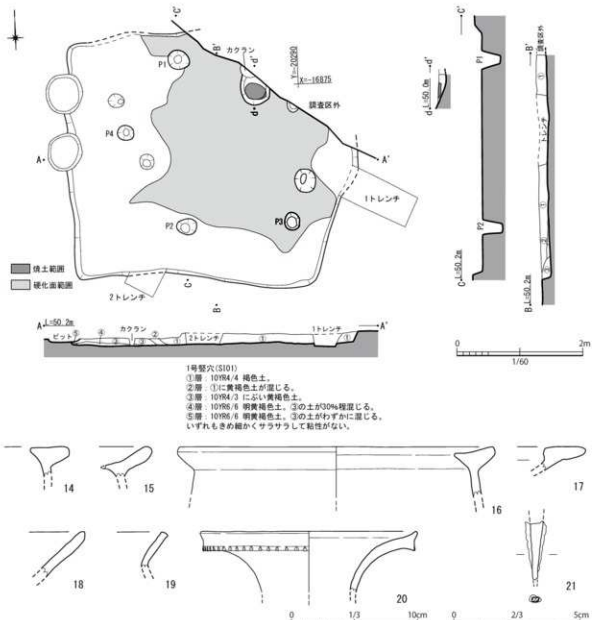
１号竪穴建物（旧ＳＩ０１、第６図）

調査区の上流、８７２９グリッドに位置し、遺構の北東側の一部は８７２８グリッドにかかる。また調査区外となる。遺構検出のために清掃を行った時点では、周囲と土色の違いはあるものの、平面プランを確定することが出来ていなかった。そこで２本のトレンチ（１トレンチ・２トレンチ）を設定し掘り下げた所、床面と想定される硬化面が確認できたので、再度清掃を行い、平面プランを確認したが、東側の輪郭が明確でなく、特に北東側ははっきりとしなかった。確定した平面形は北側に行くにつれ東西幅が広くなる。方形プランだが台形状になると思われるが、北側は調査区外となり未確定である。南北長は、西側で３．７４m程、東西長は南側で３．９m、中央で４．３m程である。深さは最大で１８㎝ほどで５層に分層できた。Ａ－Ａ'土層断面を見ると西側から埋まっていったようである。焼土が、建物の中心より北東側で検出された。精査すると、一部調査区外になってしまうが径４０～６０㎝の楕円形の掘り込みが確認できた。断ち割ると、焼土は、厚さ約５㎝で上位のみに存在し、下位は柔らかい砂質土となり、炭化物もなく赤変もしていない。このため炉と断定はできないが炉の可能性はあると判断した。硬化面は北東側に偏って広がる。柱穴は検出が難しく、硬化面を剥いで再度調査したが、建物に伴う可能性がある判断したものは４個だが、４本柱とするには配置は不自然であり、Ｐ１・Ｐ２の２本柱建物と判断した。

炉の位置や硬化面の偏りから、平面プランを誤認したのではと思い、再度精査したがこれ以上東側で遺構ラインは検出しないこと、当初から西側の遺構ラインは明確であったことから現在の平面プランが妥当と判断した。しかし本来は東側にベッド状遺構があり、既に削平を受けてしまったために平面プランを確認出来なかった可能性も考慮にいれておくべきかも知れない。

１号竪穴建物の出土遺物（第６図１４～２１）

甕、壷、高坏が埋土中より出土しているが量は少なく、また時期差が認められる。この他に縄文土器片も少量混じる。小片ばかりで、唯一２０は口径の半分弱の残存となる。１４～１６は甕の口縁部片で、１４の断面は丸みのある三角形状で内側にも小さく突出し、平坦な口唇部をもつ。１５は逆Ｌ字形でやはり内側に小さく突出するもので、所謂鍵形口縁と呼ばれているものである。１６の形状は１４に近いが、口唇部に傾斜が出てくる。１７は高坏で口縁部が厚く平坦面をもつ。１８・１９は甕か壷の口縁部片で、頸部で「く」の字状に屈曲すると思われる。２０は複合口縁の壷で、口縁下端に刻目を施す。２１は鉄製品である。全体形は二等辺三角形で、先端が尖っている。長さ２．７㎝、最大幅０．８㎜を測るが、用途は不明である。



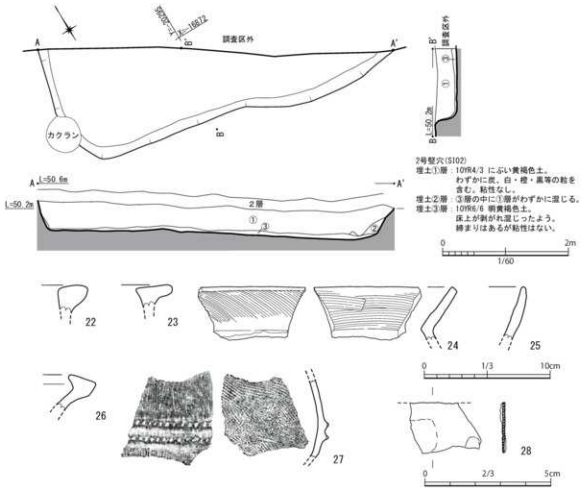
第6図　1号竪穴建物遺構及び出土遺物実測図

２号竪穴建物（旧ＳＩ０２、第７図）

同じく８７２９グリッド内に位置し、１号建物の北西に隣接する。南端部分の約１／４が調査区内にかかり、北側部分は調査区外となる。全形は明らかにできないが、１辺５ｍ強の方形プランになると推定される。深さは４０㎝程で３層に分層できた。現状では炉、硬化面、柱痕跡は確認していない。

２号竪穴建物の出土遺物（第７図２２～２８）

いずれも埋土中からの出土で、小片のみで縄文時代の土器片も少量ではあるが混在する。２２・２３は甕の口縁部片である。２２の断面は丸みのある三角形状で内側に張り出さない。２３も同様だが、内側にわずかに張り出す。２４も甕の、２５は壺の口縁部片で、いずれも頸部で「く」の字状に屈曲すると思われる。２６も壺の口縁部片で内側に肥厚し、袋状口縁となる。２７は壺の胴部片で二条の刻目突帯を巡らす。その他２８は厚さ１㎜以下の板状の鉄製品であるが小片で全体形がわからないが、摘鎌に類似する。

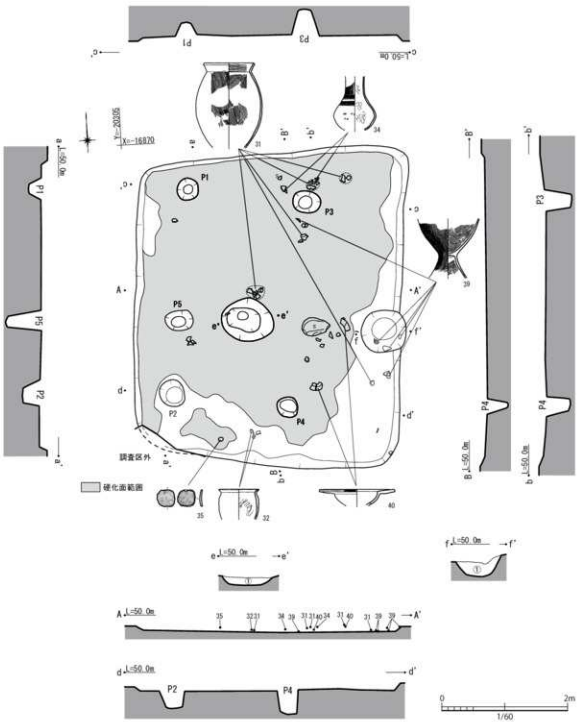


第7図　2号竪穴建物遺構及び出土遺物実測図

３号竪穴建物（旧ＳＸ０５、第８図）

８７３０グリッドに位置する。調査後半になって確認した遺構で、遺構ラインが不明確であったことから当初ＳＸ０５としていた遺構である。

南北長４．９８ｍ、東西長４．２ｍ程の方形プランで、東壁側が若干長くなっている。深さは１０㎝前後しかなく分層は出来なかった。建物のほぼ中央に８０×６０㎝程の楕円形の炉を有する。深さは１２㎝程度ですり鉢状の断面形である。埋土には炭化物や焼土粒をわずかに含むほか焼土ブロックもあるが、全体的には火を使用した痕跡は顕著ではない。硬化面は明確で南東隅を除き壁際まで広がる。柱痕跡も西側に偏っているものの４本柱が想定できる。その他東壁中央付近に土坑が存在する。床面付近で検出し、別の遺構としＳＫ０７とした土坑である。径６４～７０㎝でほぼ円形で現状の深さは約３４㎝である。その存在に気付かず竪穴建物と一緒に掘り下げてしまったと考えていたが、出土遺物の接合関係を見ると、遺物番号３９の土器は、３号竪穴建物出土床面出土の土器片と接合し（第８図）、土器片のレベルもほぼ同じで床面付近である。その他床面より若干浮いた状態で摘鎌が出土している。竪穴建物とは伴わない別の土坑とした場合、この土坑を造る際、掘り上げた土の中に３号竪穴建物に廃棄された土器片が混じり、その土で再度土坑を埋め戻したなら、有り得ないことはないが、すぐに埋め戻すと言うことは何かを埋納した可能性があるが、土坑の底にそれらしきものはないので、この土坑は３号竪穴建物に伴うものと考えた。

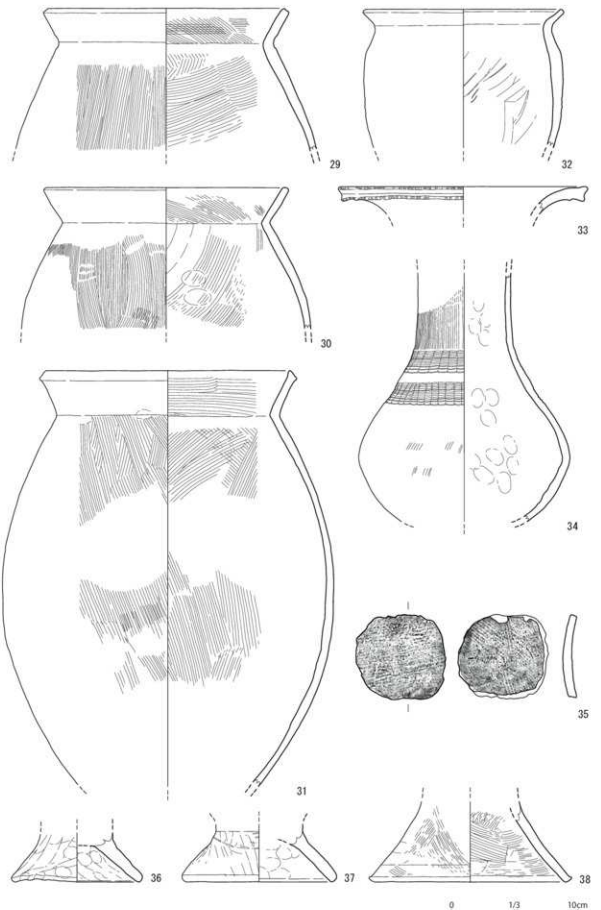


3号竪穴（SX05）
①層　10YR3/4 暗褐色土。焼土粒子・炭化物を微量含む。
　　粘性はやや弱い。締まりは強い。

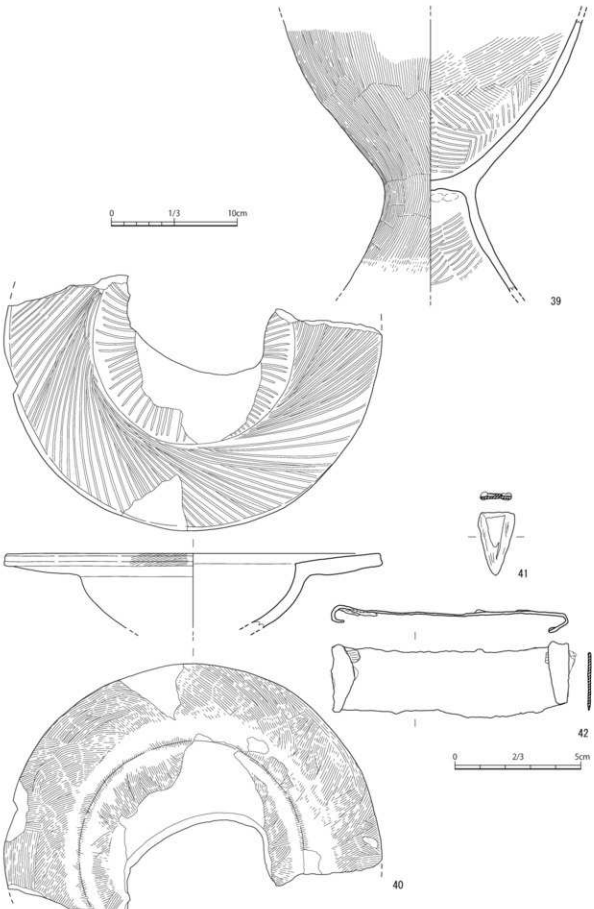
炉跡（e－e'）
①層　10YR2/3 黒褐色土。炭化物を微量含む。
　　焼土粒子を少量含む。部分的に焼土ブロックあり。
　　全面的に焼けた跡はない。焼土は偏在。
　　粘性は弱い。締まりはやや弱い。

土坑（f－f'）
①層　10YR3/4 暗褐色砂質土。3層のブロックを少量含む。
　　粘性は弱い。締まりは強い。

第8図　3号竪穴建物遺構実測図



第9図　3号竪穴建物出土遺物実測図(1)



第10図　3号竪穴建物出土遺物実測図(2) (41・42はS=2/3)

３号竪穴建物の出土遺物（第９・１０図２９～４２）

竪穴建物の中では一番多くの遺物が出土し、他に比べると残存状況も良い。しかしながら、床面より若干浮いた状態の出土で、比較的離れた土器片同士が接合する。

２９～３２は甕の口縁部片であるが、３２は壺としたほうが良いのかもしれない。いずれも頸部で「く」の字状に屈曲するが、３２は屈曲が緩やかである。また３１は最大径が胴部中位にくる。３３は複合口縁部片で、上端と下端に刻目を施す。３４は壺の胴部片で、肩部２段に波状の文様帯を施す。３５は円盤形土製品である。３６～３９は脚部片である。３９は胴部下半から脚部にかけて残存し、長脚である。４０は高坏で、口縁部がほぼ水平に外に延びる。内面に暗文が施されるが、彩色は認められない。４１は扁平な三角形の鉄製品である。一見すると板状の鉄片が重なっているように見えるが、単に錆びで孕んでいるだけかもしれない。木質が両面に残存することから木柄に装着されていた何らかの鉄製品と考えられるが不明である。４２は摘鎌で、幅９．４㎝を測る。

その他図化していないが床面に接して４１×３４㎝程で、厚さは９㎝程の大きな石が出土している。使用痕跡は顕著でないが、石皿として用いられた可能性がある。

４号竪穴建物（旧ＳＩ０３上層硬化面、第１１図）

調査区中央でもやや上流寄りの８６３１グリッドに位置する。５号竪穴建物の平面プランを確定するために清掃をしていた時に南西側で硬化面を検出した。更に精査すると硬化面の範囲は５号竪穴建物外形ラインより外に広がることが判明した。明確な硬化面であること、同じレベルで焼土も確認されたことから、既に削平された床面だけが残存している建物があったと判断した。厳密には竪穴建物とは断定できないが便宜的にこの頁に掲載した。遺物は、５号竪穴建物の遺物と区分できないが、硬化面隣接個所の遺物を４号竪穴建物出土とした。床面の標高は約４９．８ｍで、５号竪穴建物より１０㎝程高い。

４号竪穴建物の出土遺物（第１２図４３～４５）

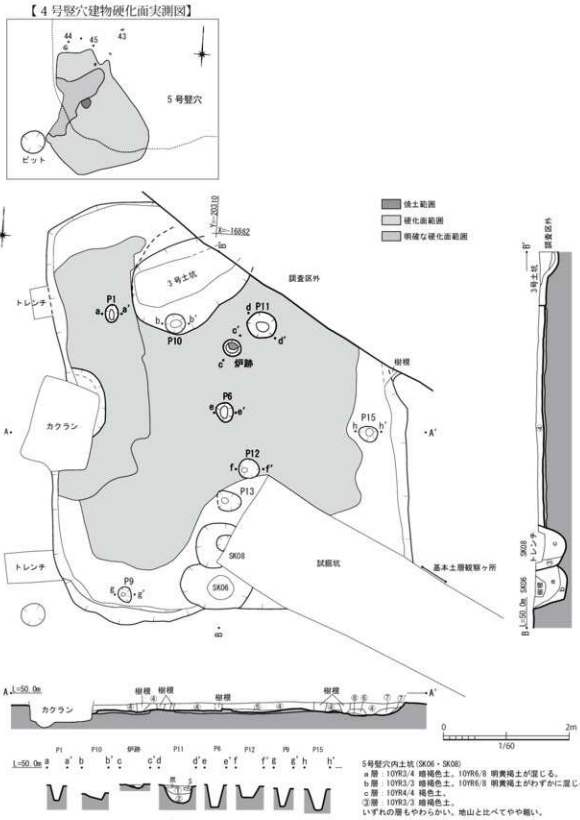
４３は甕の口縁部片で、４４は壺の底部で平底を呈する。４５は鉄製品で、形状は棒状を呈する。長さ３．７㎝を測る。錆びで膨らみ詳細は不明である。

５号竪穴建物（旧ＳＩ０３、第１１図）

８６３０、８６３１グリッドにまたがって位置し、建物の北東隅は調査区外となる。また南東側に試掘坑が存在する。南北長約６．６ｍ、東西長約５．６ｍの方形プランで、深さは１０㎝前後で分層が可能である。検出当初は規模が大きいこと、西側の外形ラインが攪乱個所を挟んだ所で不自然になることなどから複数の遺構が重なっている可能性を想定し、数本のトレンチを設定した。前述の４号竪穴建物や３号土坑との重なりはあるものの、５号竪穴建物の外形ラインを破壊するものはなかったこと、土層観察用ベルトにも切りあいを示す土層はなかったことから１つの遺構と結論付けた。

硬化面は明確で、建物の中央から拡がり西側は壁際まで硬化している。炉は中央より北側よりで検出されている。径約３０㎝の円形で深さは約５㎝である。北側寄りに焼土が堆積している。炭化物は周囲の床面や北東側にあるピット（Ｐ１１）で確認されている。その他貯蔵穴と想定される土坑が西壁中央で、また南壁中央の土坑（ＳＫ０６）も貯蔵穴の可能性を考える。一方で柱痕跡は、明確なものは検出出来なかった。硬化面を剥がし精査したが、可能性のあるものとしてＰ１・６・９・１０・１２・１５を認定したが断定できるものではない。

硬化面の厚さは場所により若干厚さが違っており、厚い所は６㎝前後で、他でも３㎝前後はある。硬化面が厚い西側や中央部は床面が若干高くなっており、特に西側は３㎝前後の高低差があり、そのラインを平面

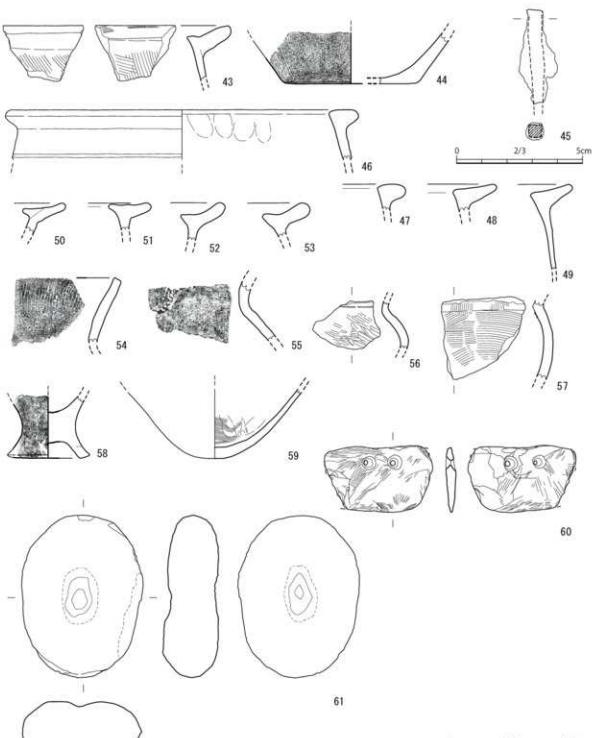


第11図 ４号竪穴建物硬化面及び５号竪穴建物遺構実測図

図に示しているが、ベッド状遺構と言えるほど明確ではなく、この要因は不明である。

５号竪穴建物の出土遺物（第１２図４６～６１）

埋土中から小片が出土したのみで、縄文土器も混在している。４６～５４は甕の口縁部片である。４６・４７は丸みのある三角形の断面で内側への張り出しはない。４８・４９は逆「L」字形の断面となり内側への突出は極わずかであるが、５０・５１になると明確になり、５２・５３になると口縁端部が外斜するようになる。５４は頸部で「く」の字形に屈曲する。５５～５７は壺の頸部から胴部の部分で、５５は鉤形突帯



第12図　4号竪穴建物出土遺物(43～45)及び5号竪穴建物出土遺物(46～61)実測図

をもち、刻目を施す。５８は甕の脚部、５９は壺の底部で丸底を呈す。その他石包丁（６０）、磨石（６１）も出土している。

６号竪穴建物（旧ＳＩ０４、第１３図）

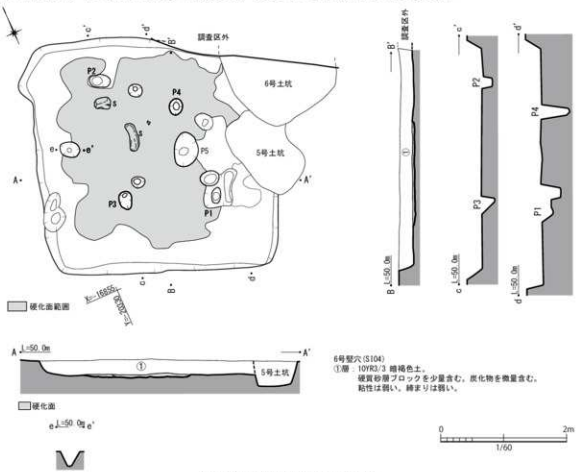
調査区中央よりやや下流側８５３２、８５３３グリッドにまたがった場所に位置する。南北長約３．７m、東西長約３．７mの方形プランで現状の深さ約２０㎝である。北東壁側を５号土坑（旧ＳＫ０３）・６号土坑（旧ＳＫ０２）により破壊されている。埋土は単層である。

硬化面は明瞭で、やや西に偏っているもののほぼ全域に拡がっているが、炉は確認できていない。当初中央よりやや東側のピット（Ｐ５）に隣接して炭化物があるので、このピットを炉と考えていたが、焼土や炭化物も認められず、深いことにより炉とは認定できなかった。また柱痕跡も明確ではない。硬化面を剥がして再度精査したが、柱痕跡の可能性があるものは、Ｐ１からＰ４であるが、Ｐ４は極端に深いことや並びが歪であることから、Ｐ４を除いたＰ１～Ｐ３までの３本と残りの１本は６号土坑内に位置し、既に破壊を受け消滅したと考え、４本柱を想定している。ただそれでも形状は歪で逆台形状になってしまう。

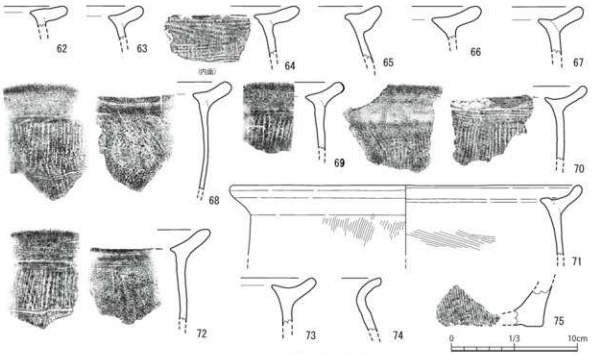
６号竪穴建物の出土遺物（第１４図６２～７５）

いずれも小片で、最大でも口縁部径の１／４程度の破片であり、縄文土器もわずかだが混在する。床面直上の遺物は小片で図化していないが、胴部に刻目突帯を巡らす胴部片や甕の口縁部片で、６７・７０に類似する。

６２～７３は甕の口縁部片で、断面は三角形或いは逆「Ｌ」字形を基本とするが、内部に張り出し、外方向にも傾斜しはじめ、口縁部の平坦面が消失し、６８・７２のように「く」の字形に近づいていく。７４は壺の口縁部片、７５も壺の底部で平底である。なお６４の拓本は内面のものである。



第13図　6号竪穴建物遺構実測図



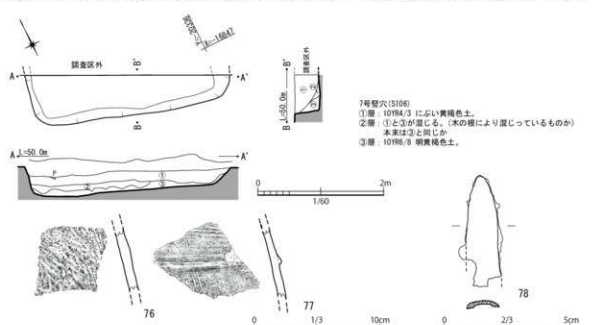
第14図　6号竪穴建物出土遺物実測図

7号竪穴建物（旧ＳＩ０６、第１５図）

８４３３グリッド内に位置する。そのほとんどが調査区外となる。東西長約３．２ｍで全形は不明である。硬化面もなく、柱痕跡も不明である。また土層断面図を見ると床が西に傾斜してしまうので竪穴建物とするのは躊躇された。しかし埋土を①層だけと考えるなら、床は比較的フラットで、掘りすぎてしまった可能性、或いは②③層は貼床であった可能性が考えられる。その両者を検討したが、決め手に欠けた。このことから、竪穴建物とは断定できないが、他の用途も考えにくいため竪穴建物として取り扱った。

7号竪穴建物の出土遺物（第１５図７６～７８）

出土遺物は少なく、胴部の土器片２点と鉄製品１点が出土している。７６の外面には、タタキの後ナデが施されている。また内外面とも表面に砂粒が多く見られる。７７は壺の胴部片で突帯を巡らす。７８はヤ



第15図　7号竪穴建物遺構及び出土遺物実測図

リガンナで先端部分４㎝程が残存している。

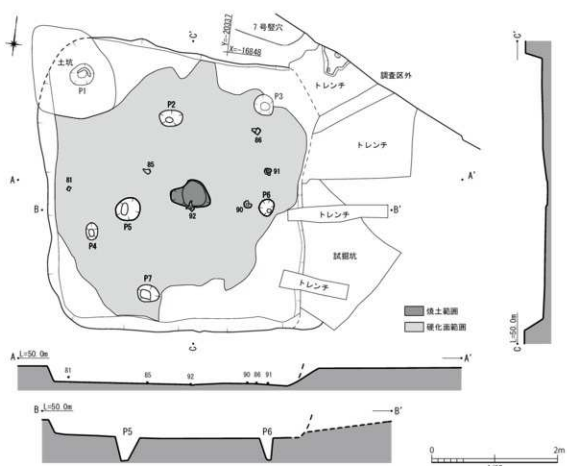
８号竪穴建物（旧ＳＩ０５、第１６図）

８４３３、８５３３グリッドにまたがって位置する。南北長約４．４m、東西長４．３mの方形プランで原状の深さは２０㎝前後で、埋土は単層である。北西隅が広くなりすぎているが、別の土坑が北西隅に位置し、この竪穴建物を破壊している可能性が考えられる。当初その外形ラインの歪さは認識していたが、他の遺構の存在には気づかず、床面検出時にその個所だけまだ掘り下げることが出来ることから、別の土坑があったと判断した。また東側の外形ラインは予備調査時のトレンチと重なっていることもあって、はっきりしなかった。そこで４本のトレンチを設定し掘り下げた。その結果、南側は植物の根が横に拡がっていることにより不明瞭になっていただけで、土層断面により壁の立ち上がりを確認できた。しかし北側についてはかろうじて立ち上がっていくのではないかと考えられる個所を認識したにとどまるので、外形の下端ラインを破線で示している。

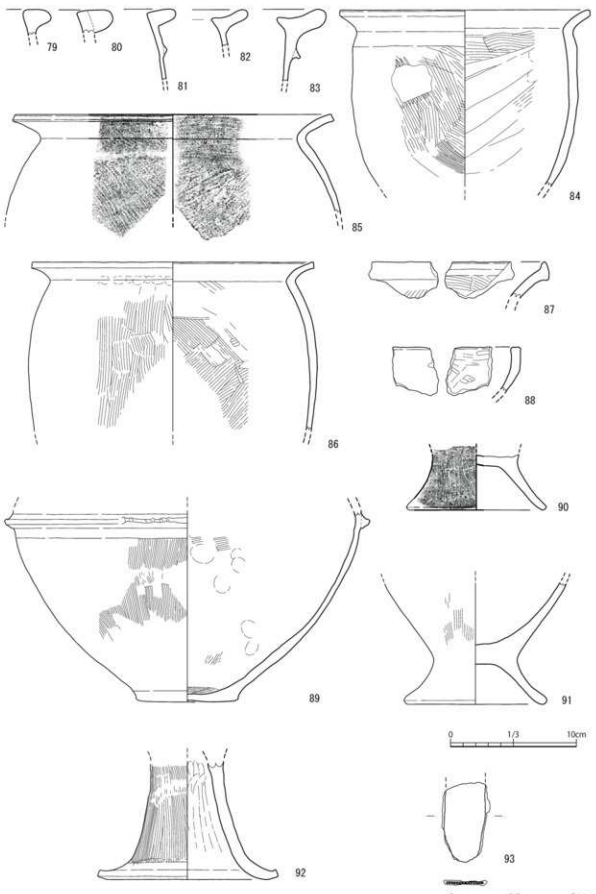
床面は硬化面が明瞭で中央に淡い色の焼土が認められ、炉と確認できる。しかし炉と言っても深さは６㎝程で、焼土の厚さは最大で２㎝程で、上面に薄く拡がるのみで炭化物は認められない。柱穴は他の建物と同様に硬化面を剥がしたが、Ｐ５・Ｐ６以外に明確な柱痕跡はなく２本柱を想定した。

８号竪穴建物の出土遺物（第１７図７９～９３）

縄文時代の遺物もわずかに混じるが、床面直上から８５・８６・９０～９２など比較的多くの遺物が出土しているが、小片が多い。



第16図　8号竪穴建物遺構実測図

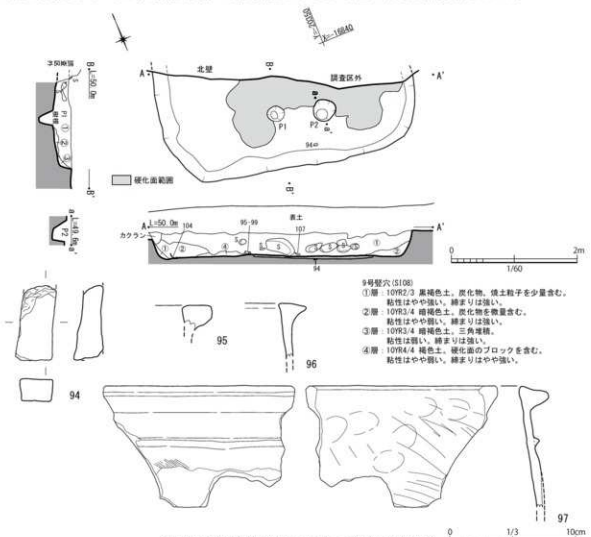


第17図 8号竪穴建物出土遺物実測図

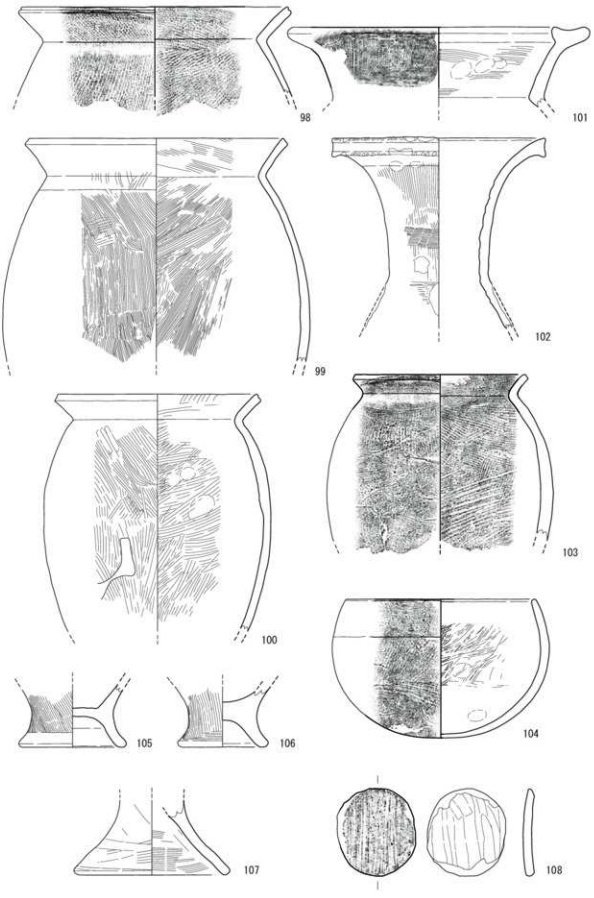
７９～８３は甕の口縁部片である。７９～８１は丸みを帯びた三角形の断面で、８１は口縁下部に突帯を巡らす。８２・８３は鋤先口縁で、８３は下部に突帯を巡らす。８４～８６は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、頸部で「く」の字形に屈曲する。８４・８５は、外面はハケメ調整が施されるが、タタキの痕跡がわずかに残る。８４には焼成破裂痕も認められる。両者とも内面もハケメ調整を施すが、８４はその後ナデによりハケメ痕跡の大部分が消されている。８６は内外面ともにハケメ調整が施されており、タタキの痕跡は認められない。８７は壺の複合口縁部片である。８８は鉢か高坏の口縁部片である。８９は壺で胴部から底部にかけて残存し胴部中位に刻目突帯を巡らす。底部は平底でわずかに突出する。９０・９１は甕の脚部片である。９２は高坏の脚部で、裾部で大きく外反する。９３は、鉄製品で一方の先端は丸みを帯びているが全体の形状は不明で、天地も不明であるが、裏面下部に木質が残存する。現状で幅２．１㎝、長さ３．１㎝を測り、厚さは１㎜以下である。

９号竪穴建物（旧ＳＩ０８、第１８図）

調査区の下流側８４３５グリッドに位置する。建物の北側２／３程は調査区外となる。東西長約４．１m、現状の深さ約４０㎝で分層が可能である。埋土①層中に拳大から人頭大の礫が多く含まれる。また土器片も比較的多く認められるが、床面直上の土器は９８のみで、他には砥石（９４）があるのみである。竪穴建物埋没中に礫や土器片が捨てられたような状況である。床面には明瞭な硬化面が認められる。柱穴はＰ２、１カ所が確認されているが、硬化面を剥いで再度精査してもそれ以上の柱穴は確認出来なかった。



第18図 ９号竪穴建物遺構及び出土遺物実測図(１)



第19図 9号竪穴建物出土遺物実測図(2)

９号竪穴建物の出土遺物（第１８・１９図９４～１０８）

９４は、砂岩製の砥石で床面直上からの出土である。中途で欠けており、現状で長さ５．９㎝、幅２．９㎝、厚さ１．７５㎝を測る。かなり使い込まれている。９５～９７は甕の口縁部片で、丸みのある厚ぼったい三角形状の断面で、９６は内側にわずかに突出し、９７は口縁下に突帯を巡らす。９８～１００は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、頸部で「く」の字に屈曲する。内外面ともにハケメ調整を施す。１００はわずかにタタキ痕跡が残る。１０１は壷の口縁部片で袋状口縁となる。１０２は壷の口縁部から頸部にかけての破片で、複合口縁の上端、下端それぞれに刻目を施す。１０３も壷の口縁部から胴部にかけての破片で、頸部で緩やかに屈曲する。１０４は鉢で、最大径は胴部中位にあり、内外面ともにハケメ調整を施す。１０５～１０７は甕の脚部片で、１０７は比較的脚部が長くなる。１０８は円盤形土製品である。

土坑

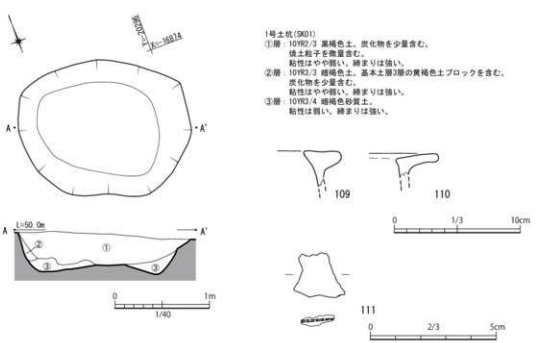
６基の土坑が検出されている。遺物を伴うものは少なく、出土しても埋土中からで、厳密にはすべてが弥生時代の土坑とは限らないが時期不明なものも便宜的にこの項に掲載した。

１号土坑（旧ＳＫ０１、第２０図）

１号竪穴建物の西、８７２９グリッド内に位置する。長軸約１．８ｍ、短軸約１．４ｍの楕円形を呈する。深さは４０㎝程である。埋土は３層に分層できる。

１号土坑の出土遺物（第２０図１０９～１１１）

１０９・１１０は甕の口縁部片で、１０９は厚ぼったい三角形の断面、１１０は逆「L」字形の断面となる。いずれもわずかに内側へも突出し始めている。１１１は、板状の鉄製品であるが、錆で膨れ、全体の形状や用途は不明である。



第20図　1号土坑遺構及び出土遺物実測図

２号土坑（旧ＳＫ０４、第２１図）

３号竪穴建物の北、８６３０グリッドに位置し、半分程は調査区外になる。東西軸長２．１４ｍ程で平面は楕円形になると思われる。深さ５６㎝程で埋土は４層に分層される。

２号土坑の出土遺物（第２１図１１２）

埋土中に土器小片が混じる中で図化に耐えうるもの１点を掲載した。甕の口縁部片で鋤先口縁となり始めている。

３号土坑（旧ＳＫ０５、第２２図）

８６３１グリッドに位置し、５号竪穴建物と重なりあい、５号竪穴建物埋没後に掘り込まれた土坑である。遺構の半分程は調査区外となるため全形は不明だが、隅丸長方形或いは楕円形のプランが想定される。幅約１．３ｍで、長さは現況で１．６ｍ程である。主軸に直交していないが断面をみると中央部が低くなる二段掘となる。このため木棺墓の可能性は無いかと精査したが、土層断面では、木棺等の痕跡は確認されなかった。

３号土坑の出土遺物（第２２図１１３）

遺物は埋土から土器小片が出土しており、図化可能な壺の底部と思われるもの１点を掲載した。

４号土坑（旧ＳＸ０９、第２３図）

８５３２、８６３２グリッドにまたがった個所に位置する。径６０㎝前後の円形の土坑で、深さは約５０㎝である。埋土はレンズ状に堆積し、３層に分層できる。

４号土坑の出土遺物（第２３図１１４）

出土遺物は細片ばかりで図化可能な甕または壺の口縁部片１点を掲載した。埋土②層からの出土で、頸部で「く」の字形に屈曲する。内外面にハケメ調整が認められる。

５号土坑（旧ＳＫ０３、第２４図）

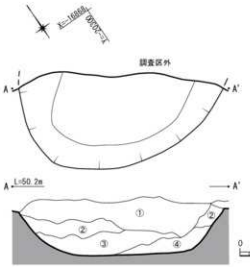
８５３２グリッド内で６号竪穴建物の北東部に重なって存在するが、６号竪穴建物の床面清掃時まで存在に気付かなかった。６号竪穴建物埋没後に掘り込まれた土坑であり、更に６号土坑により北東隅が削られている。長軸約１．４ｍ、短軸約０．８ｍを測る。形状は隅丸方形で現状の深さは５０㎝程である。遺物は出土していない。

６号土坑（旧ＳＫ０２、第２４図）

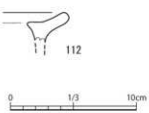
同じく８５３２グリッド内で６号竪穴建物の北東部と重なって存在する。６号竪穴建物及び５号土坑埋没後に掘り込まれた土坑である。遺構の半分は調査区外になり、全形は不明である。短軸長は推定１．６ｍ程で、現況の深さは５０㎝程で３層に分層できる。出土遺物は小片ではあるが、他の土坑に比べると多く出土している。

６号土坑の出土遺物（第２４図１１５～１１８）

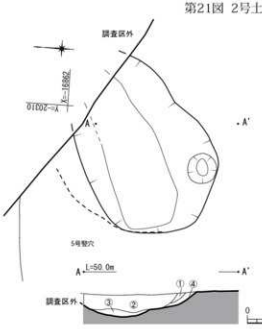
１１５・１１６は甕の口縁部片である。１１５は逆「Ｌ」字形だが、内側への突出が始まっている。口縁下に突帯を巡らす。１１６は１１５に比べると口縁端部が外方向に高く張り出す。１１７は壺の胴部片で、刻目突帯を巡らす。１１８は甕の脚部片である。１１８のみが③層出土、他は①層出土である。



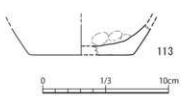
2号土坑(SK04)
①層　10YR3/3 暗褐色土。炭化物を微量含む。
　　粘性はやや弱い。締まりはやや弱い。
②層　10YR3/4 暗褐色土。黄褐色土ブロックを含む。
　　粘性はやや弱い。締まりはやや弱い。
③層　10YR4/4 褐色土。
　　粘性は弱い。締まりはやや強い。
④層　10YR4/4 褐色土。硬質砂層ブロックを少量含む。
　　粘性はやや弱い。締まりはやや強い。



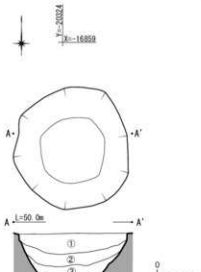
第21図　2号土坑遺構及び出土遺物実測図



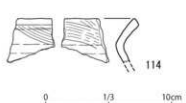
3号土坑(SK05)
①層　10YR3/4 暗褐色土。明黄褐色土の粒を少量含む。
　　きめ細かくサラサラしている(砂地)。
②層　ベースは10YR3/4 暗褐色土に5/8 黄橙1cm大のブロックや2～3mmの粒を少量含む。
　　きめ細かくサラサラしている。
③層　10YR5/4 にぶい黄褐色土。黒い粒、黄橙1cm大のブロックを含む。
　　きめ細かくサラサラしている。
④層　ベースは10YR7/6 明黄褐色土。褐色の土が混じる。
　　埋土ではないかもしれない。



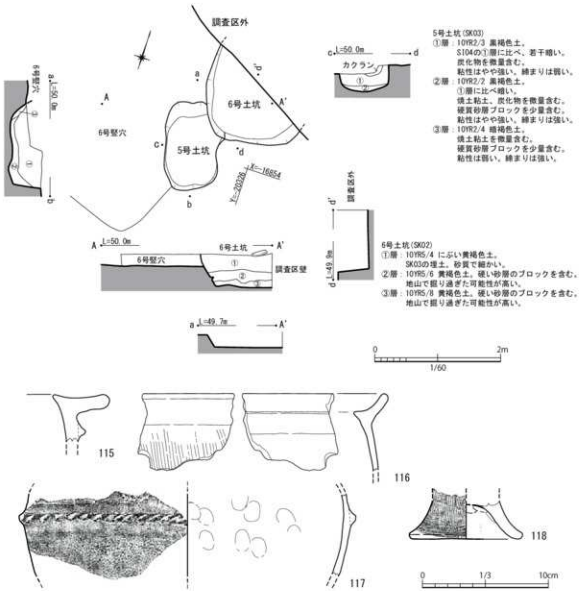
第22図　3号土坑遺構及び出土遺物実測図



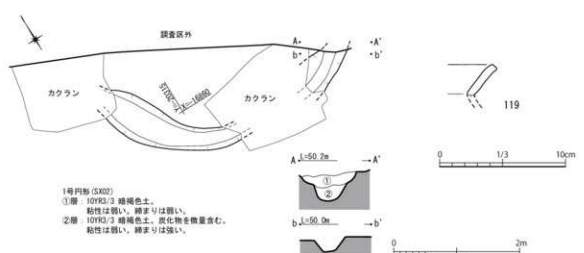
4号土坑(SK09)
①層　10YR3/4 暗褐色砂質土。硬質砂層ブロックを少量含む。
　　炭化物を少量含む。
　　粘性はやや強い。締まりは強い。
②層　10YR3/3 暗褐色砂質土。硬質砂層ブロックを少量含む。
　　炭化物を微量含む。
　　粘性はやや強い。締まりはやや強い。
③層　10YR2/3 黒褐色砂質土。硬質砂層ブロックを少量含む。
　　炭化物を少量含む。
　　粘性はやや強い。締まりはやや強い。



第23図　4号土坑遺構及び出土遺物実測図



第24図　5号・6号土坑遺構及び6号土坑出土遺物実測図



第25図　1号円形周溝遺構及び出土遺物実測図

その他の遺構

１号円形周溝遺構（旧ＳＸ０２、第２５図）

８５３１、８６３１グリッドにまたがって位置する遺構である。遺構の２/３程は調査区外となり全形は不明で、遺構の性格も不明だが、この時期に検出例が多い円形周溝遺構と考えられる。溝の幅は上端の狭い所で約３５㎝、広い所では６０㎝程となる。下端は、狭い個所で２０㎝、広い個所で４０㎝である。深さは５０㎝程だが、場所により違いがみられ、溝の底面レベルは低い所は標高４９．５０４m、高い個所で４９．７８７mである。東側は下端の幅が小さくなるが、溝の幅と深さには相関関係は認められない。周溝内側に掘り込み等の遺構は確認できなかった。なお調査区北壁A—A'の土層を観察すると本来の掘り込みは２段であったことがわかる。

１号円形周溝遺構の出土遺物（第２５図１１９）

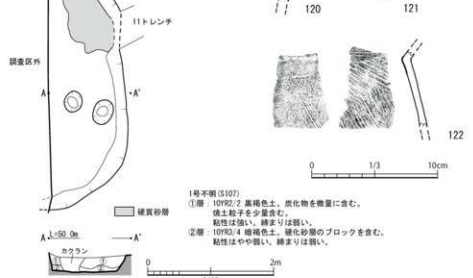
出土遺物は、細片が少量出土している中で、図化可能なもの１点を掲載している。甕か壺の口縁部片で、頸部で「く」の字形に屈曲する。①層からの出土である。

１号不明遺構（旧ＳＩ０７、第２６図）

８５３４グリッド内に位置し、南側は調査区外となる。北西側の外形ラインが不明瞭ではあったが当初は竪穴建物と認識していた遺構である。掘り下げても明確な硬化面はなく、柱穴や炉もない。北側に設定していた１１トレンチを延長し、その関係を観察した。トレンチでは、竪穴建物と想定される範囲外でも硬化している面があり、それが竪穴建物と想定した遺構内の硬化に続いた。この硬化は、硬質化した砂で、更に川側に傾斜していくようであったことから竪穴建物ではないと判断した。ただし東側のラインは明確であったので何らかの遺構の可能性はあるとして不明遺構としたがその性格は不明である。

１号不明遺構の出土遺物（第２６図１２０～１２２）

１２０～１２１は甕か壺の口縁部片である。１２２は甕の頸部片である。いずれも頸部で「く」の字形に屈曲するものである。



第26図　1号不明遺構及び出土遺物実測図

溝状遺構（旧ＳＸ１０、第４図遺構配置図）

旧ＳＸ１０は、９号竪穴建物の南東側、８４３４グリッドのａ区ｂ区にまたがって位置する。当初９号竪穴建物の東隣も他と土色が違っていたので壁際を掘り下げた所、白川側に延びる溝状の遺構が確認されたが、出土遺物から後世のものと判断した。更に南側の地点、ここも土色が周囲と異なることから再度精査を行い検出したものがＳＸ１０である。多くの遺物を含むが、北側の溝状遺構につながるので、後世に造られた白川に排水するための溝の可能性を考えている。弥生時代の遺構ではないが、この溝中に弥生時代の遺物が多く含まれるので、出土遺物の紹介を兼ねてこの頁に記載した。

溝状遺構の出土遺物（第２７図１２３～１３２）

１２３～１２７は、甕の口縁部で、１２３の断面は丸みを帯びた三角形であり、１２４は口縁の内側に張り出しが認められる。１２５は「Ｔ」字形口縁で、他の口縁に比べ巨大で褒棺として使用された可能性がある。１２６・１２７は頸部で「く」の字形に屈曲する。１２８は甕の脚部である。１２９・１３０は壺の口縁部で頸部から口縁部に向って強く外反する。１２９の口縁内面には暗文が施され、赤く彩色される。外面の頸部部分にも赤彩が一部残る。１３０は外面に暗文が施されるが彩色は確認できない。１３１は壺の胴部で二条の突帯を巡らす。突帯端部が磨滅して明確ではないが刻目が施されていたと思われる。１３２は壺の底部で小さい平底である。

包含層等出土の遺物

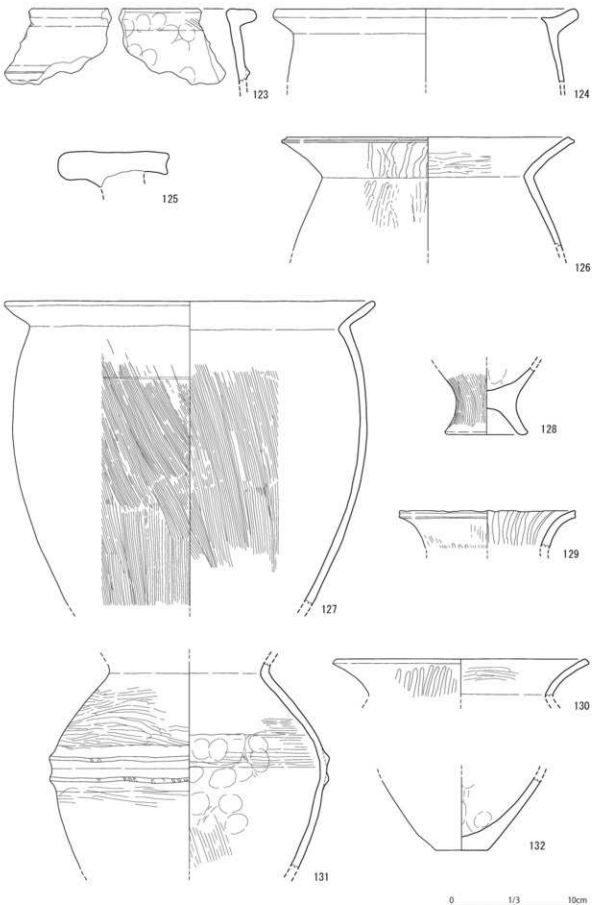
その他遺構ではないと判断し、位置だけを抑えている旧ＳＸ０１がある。調査区の下流側に位置し、器形のわかる比較的大きな土器片も出土している。遺物の説明を兼ねて旧ＳＸ０１の概要についても記述する。

旧ＳＸ０１（第４図遺構配置図）

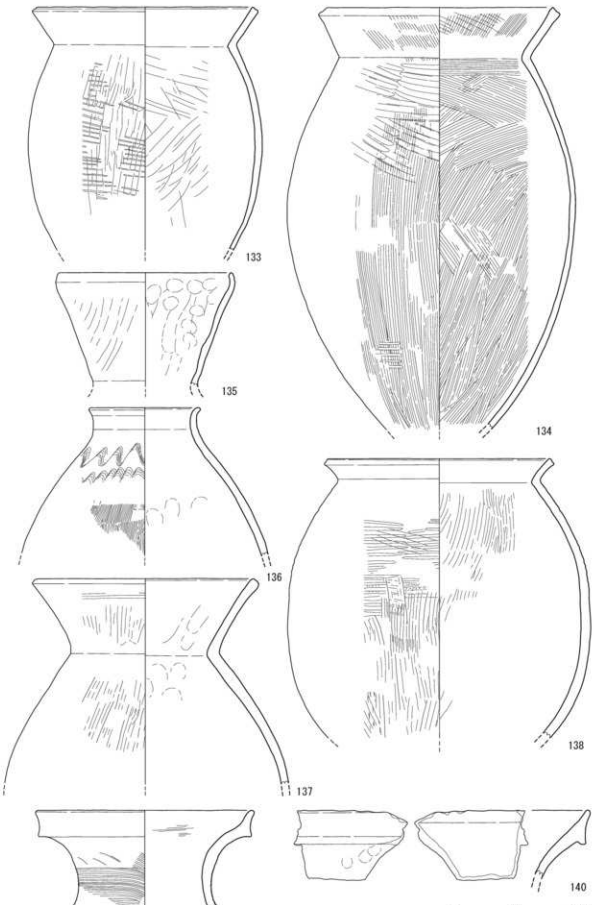
旧ＳＸ０１は、９号竪穴建物の南西８４３５グリッドａｂ区に位置する。形状は整然としないが周囲の土色と違いがあり、多数の出土遺物があることから竪穴建物の可能性を考えていたものである。トレンチ（１３・１４Ｔ）を入れ、土層断面を観察した。１３トレンチでは床面の可能性のある面が検出されたが、１４トレンチでは硬質砂層が出現した。その後各トレンチを拡張した。周囲と色調は違うものの、不定形で円形や方形にはならない。また遺物も多数出土するものの、西から東へ流れ込んだように見えることから竪穴建物等の遺構ではないと結論づけた。窪地がありそこに土器が廃棄された可能性などを考えている。

出土遺物（第２８・２９図１３３～１５１）

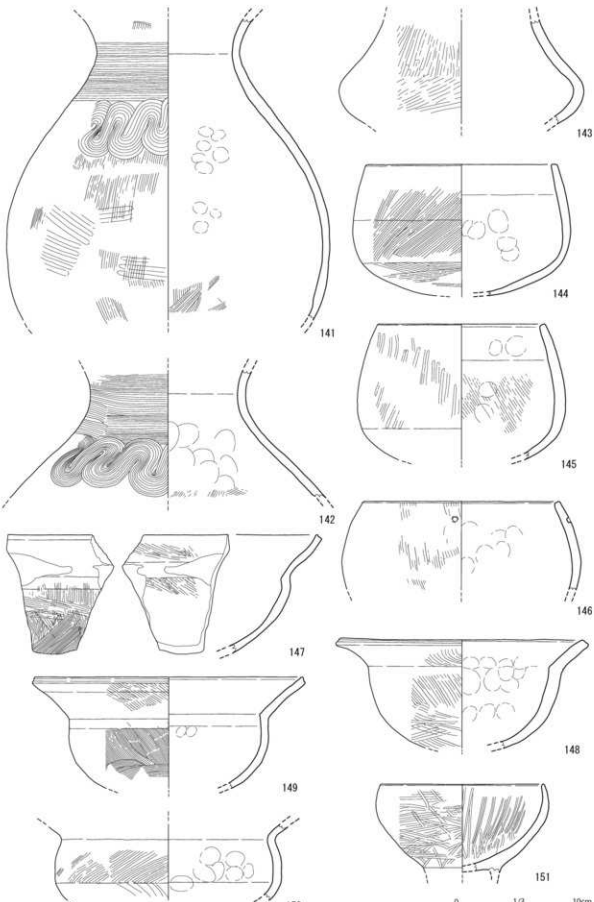
多くの遺物が出土し、残存状況も良好である。１３３・１３４は甕で、頸部で「く」の字形に屈曲する。最大径は胴部中位にある。タタキの後ナデ調整されているがタタキ痕跡が残る。１３５～１４３は壺で、１３５は口縁部が外に向かって開くが、端部で一旦外に膨らんだ後に内斜する。口縁端部の３㎜程を外に折り曲げたようになりその部分が肥厚しているが均等ではない。１３６は口縁が短く直立気味に立ち上がる。また頸部のくびれも緩やかで、肩部に波状文を２段に描く。１３７は頸部で「く」の字形に屈曲し口縁部に向かって直線的に開く。１３８も１３７同様であるが口縁が短い。胴部上半にタタキの痕跡がはっきりと残る。１３９・１４０は複合口縁を有する。１４１は頸部から胴部にかけて残存し、頸部に横線を描き、肩部には波状文を描く。一部タタキの痕跡が残る。１４２は頸部から肩部にかけて残存するが文様構成は１４１と同様である。１４３は小型の壺の胴部片である。１４４～１５１は鉢で、１４４～１４６は胴部に最大径をもち、口縁部にかけてややすぼまっていく。１４７～１５０は球形の胴部をもつもので、頸部で屈曲した後、口縁部に向かって外に開く。１５１は、形態は１４４等に類似するが、脚台が付く。



第27図　溝状遺構(旧SX10)出土遺物実測図



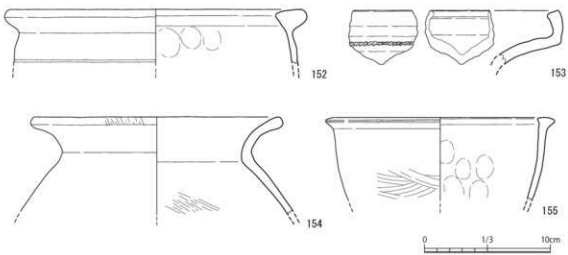
第28図　包含層(旧SX01)出土遺物実測図(1)



第29図　包含層(IHSX01)出土遺物実測図(２)

その他包含層出土の遺物（第３０図１５２～１５５）

１５２は甕の口縁部片で、丸みを帯びた三角形の断面を呈する。１５３は複合口縁壺の口縁部片と考えるが、高坏或いは縄文晩期頃の土器の可能性もある。口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、下部に刻目を施す。１５４は壺で、頸部ですぼまり、口縁に向って緩やかに外反する。１５５は鉢で、口縁部は丸みを帯びた三角形の断面となる。



第30図 その他包含層出土遺物実測図

（３）古代の遺物（第３１図１５６）

古代の遺構は検出されておらず、遺物も古代の土器と判別できたのは２点のみでそのうち１点を掲載した。高台付の椀で、高台部分が剥がれているものである。

第31図 古代の出土遺物実測図

第４章　総括

第３章調査の成果で述べたことを再度整理すると、遺跡は、白川中流域の右岸に位置し、上流側に隣接して法王鶴遺跡があり、対岸に中江遺跡がある。弓削前畑遺跡は、今回が初めての発掘調査で、主な出土遺物は弥生時代中期から後期の土器であるが、量的には後期の土器が多い。検出された遺構は竪穴建物９軒と６基の土坑の他、円形周溝などがある。竪穴建物出土の遺物は、多くが埋土中からで床面直上のものはほとんどなく、時期幅もあるので、年代決定が困難である。以上であるが、いくつかの点について少し詳しく掘り下げてみたい。

まず遺跡は、白川の蛇行により形成された舌状地形に位置する。その中央から東側に法王鶴遺跡が、西側に弓削前畑遺跡が立地し、間隔は約６０ｍで一連の遺跡として捉えたほうが良いと考えるが、後述する。

次に遺跡の性格であるが、弓削前畑遺跡は、縄文時代後晩期の遺跡として遺跡地図には記載されている。しかし調査では少量の縄文土器は出土するものの、主体は弥生時代である。これは、今回の調査区は遺跡の南東端であることが大きいのかも知れない。九州電力弓削変電所の変電設備建て替えに伴い熊本市により発掘調査がおこなわれた法王鶴遺跡（以下熊本市１次調査と呼称）でも、縄文時代の遺物は少量しか出土していないことと併せると、縄文時代の遺構は今回の調査区の北西側に拡がっていると考える。

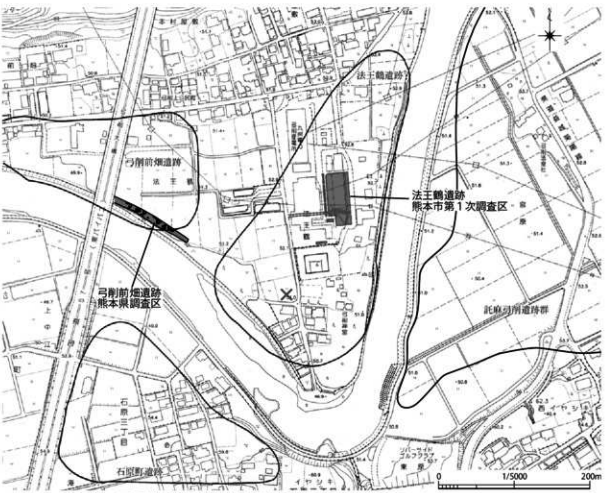
調査の主体は弥生時代で中期から後期であるとしたが、もう少し詳しく出土遺物と検出遺構の関係について見ていきたい。まず出土遺物について概観する。出土した弥生土器でも形態変化の大きい甕を見ると、①口縁部断面形は、三角形の角が丸みを帯び、アルファベットの「P」のような形態で内側への張り出しが認められないもの（第７図２２）、②同じく「P」のような口縁形態で内側への張り出しが認められるもの（第７図２３）。③内側への張り出しが認められ所謂鋤先形口縁と呼ばれるもので、口縁上端が平坦なもの（第１２図５１）、④同じく鋤先口縁でも、口縁端部が斜め上方向に延びるもの（第１２図５２）。⑤明確な頸部が認められ、頸部で「く」の字形に屈曲するようになるもの（第９図２９）など、同じ遺構中でほぼ型式変化を追うことができる。量的には⑤が多くそれ以外は大差ない。既往の研究では、甕の口縁部が「く」の字形に屈曲し脚台部が付いているものを弥生時代後期としており、⑤が該当する。弥生時代後期の熊本平野の土器については原田範昭氏がⅠ期からⅣ期に細分している。今回の調査では全体形のわかるものが少なく、断片的な部分で判断するしかないが、甕の脚部だけをみると短いものが多いものの、長脚も存在する。器面調整にはタタキ痕跡が明確に残るものもある。壺は複合口縁で波状文を施すものが一定量存在するなど、ほぼ後期の全期間を通じて存在し、新しい時期のものはＳＸ０１とした地点からの出土が多い。

一方検出された遺構は竪穴建物９軒と６基の土坑が主なものである。竪穴建物同士の重複は一例のみで、調査区中央で若干間隔があくが、ほぼ一定間隔で位置し、建物が密集するような状態ではない。竪穴建物には共通する特徴が認められる。床は硬化面がはっきりしている。炉は赤変しているものもあるが、断面観察では、焼土は薄く、地表面だけが赤くなっているだけで、炭化物がないものが多い。また柱痕跡の検出が難しいことも共通する。床面を剥がして再度精査しても不明で、まず間違いないと言えるのは３号竪穴建物だけである。この傾向は弓削前畑遺跡に限ったことではなく、法王鶴遺跡や上南部遺跡でも同様であった。掘り込まず硬化面の上に直接柱を建てる可能性なども検討すべきなのかも知れない。その他すべての竪穴建物にベッド状遺構が伴わないことも挙げられる。しかし隣接する法王鶴遺跡の熊本市１次調査では、内容のわかる１７軒の竪穴建物のうち１０軒にベッド状遺構が伴い、残りのベッド状遺構が伴わない７軒は部分的調査のためで、高い確率でベッド状遺構が伴っている可能性がある。一方今回の調査で全掘しているのは３号・８号竪穴建物だけで、ほぼ全掘に近いものは他に３軒（１・５・６号竪穴建物）がある。この中で１号・８号竪穴建物は、一方の壁の立ち上がりの検出が難しかった。また３号竪穴建物は柱位置が西に偏っている。

５号竪穴建物については、複数の竪穴建物の重なりを想定していたものである。１・３・５・６・８号竪穴建物の深さは最大で２０cm程でかなり削平を受けており、ベッド状遺構があったとしても削平されていて、一方の壁の立ち上がりの検出が困難だった可能性もある。ベッド状遺構出現時期とも関連し、また調査時にそこまで問題意識がなかったためこれ以上の言及は出来ないが、ベッド状遺構が全く伴わなかったとは断言できない。

竪穴建物出土の遺物は少なく、ほとんど埋土中からである。それぞれの竪穴建物からの出土量の差はあっても①～⑤までほぼまんべんなく出土している。その中で６号竪穴建物は、中期の土器④が主体であるが、出土量が少ないことも影響しているかも知れない。一方で３号竪穴建物は後期の遺物のみで、原田編年のⅢ、Ⅳ期のものが主体であるが、脚台は脚が短いものなども存在し、時期幅が認められる。このような状況なので竪穴建物の時期を決めることは出来ないが、６号竪穴建物を除けば必ず後期の土器が含まれていること、出土量は後期の土器が多く、中期の土器は小片ばかりで、ほとんど接合出来ないことから、弥生時代中期の遺物を含んだ層を掘り込んで後期に属する竪穴建物が造られた可能性が考えられる。つまり大まかには弥生時代後期を中心とした時期を想定する。ただし後期の中での細分は、土器全体形がわかるものがないので、これ以上の言及は出来ない。また土坑になると、数点の土器片が出土するだけで、流れ込みの可能性が高く、時期決定はより困難である。

前述したように、調査範囲は白川沿いの１３００㎡程の狭い範囲で遺跡の端部に過ぎず、集落は更に拡がることは明らかである。摘鎌等の鉄製品も出土しており[注]、ある程度の規模の集落と考えられる。舌状の地形から考えると北側や東側に拡がることが考えられる。今回の調査区より東へ２００m程離れた個所に位置



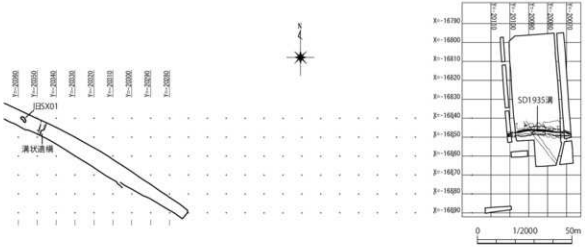
第32図　弓削前畑遺跡と法王鶴遺跡調査区の位置図（S=1/5000）（原図：熊本市）

する法王鶴遺跡熊本市第一次調査では、調査面積は２０００㎡足らずであるが、１９軒程の竪穴建物と２本の溝が検出されている。出土土器は原田編年のⅢ期を中心にⅡ～Ⅳ期の時期幅におさまると言う。擬鎌やヤリガンナや用途不明の鉄製品なども出土している。調査担当者の三好氏は、遺跡は北側をＳＤ１９３５溝で、東・西・南を白川によって区画されることを想定している（三好２０１４）。

特にＳＤ１９３５溝は東西に延び、このまま西に延びるとするなら今回の調査区８４３４グリッド、８４３５グリッド付近に達する。ここには当初ＳＸ０１とし最終的には遺構ではなく、窪地に土器が廃棄された個所としたものや溝状遺構が存在し、比較的残りの良い土器が多く出土する。特に旧ＳＸ０１の出土土器は、法王鶴遺跡のＳＤ１９３５溝出土土器とほぼ同時期である。勿論溝が真っ直ぐ延びるとは限らないし、今回検出した溝状遺構は後世のものであり、ＳＸ０１とした窪地も溝とは考え難く、今回の調査では弥生時代の溝は検出されていない。しかしこの個所に遺物が破棄されたような形で集中して出土することは、この地点が集落の西端であった可能性を示すものではなかろうか。つまり法王鶴遺跡と今回の弓削前畑遺跡で検出された遺構は同一の集落であると考える。その他第３２図×印地点の畑には弥生時代の土器片が散布していることから、南側は白川近くまで拡がっていたことが想定できる。つまり三好氏が想定したよう、北側はＳＤ１９３５溝及びそこから西に延びた溝で区画され、それより以南の東西幅約３００ｍの舌状地一帯が弥生時代後期の集落であった可能性が高い。

しかし時期は、若干の相違がある。弥生時代中期の遺物は法王鶴遺跡熊本市１次調査では出土していないが、弓削前畑遺跡では、一定量の出土がある。また弓削前畑遺跡出土の土器は全体形がわからず、時期区分に迷うものも多いが、竪穴建物からは、原田編年のⅠ期・Ⅱ期の土器の出土の方が多い。このことからは、西側の弓削前畑遺跡側に若干古い様相がみられることになる。その他、溝状遺構からは甕棺の口縁部片と思われる土器が出土していることから、周辺に甕棺墓があり、弥生時代中期の集落もあったであろうことも推察される。

以上から、弥生時代後期の集落として、法王鶴遺跡熊本市１次調査個所と今回調査を行った弓削前畑遺跡は一連のものである可能性はかなり高いと考える。一方で弥生時代中期の集落の場所については現在のところ全く手がかりはない。また弓削前畑遺跡は縄文時代の遺跡とされているが今回の調査では希薄である。今回の調査は弓削前畑遺跡の南東端であり、今後北西側についてより詳細な調査により、各時代の遺構の拡がりを把握する必要があるだろう。



第33図　弓削前畑遺跡と法王鶴遺跡熊本市第１次調査区（S=1/2000）

注）摘鎌は、１９８５年以前に熊本市石原亀の甲遺跡、和水町諏訪原遺跡、山鹿市方保田東原遺跡、大津町西弥護免遺跡で確認され、多くが拠点的大集落であり、鍛冶が行われている遺跡が多いことが指摘されている（寺沢１９８５）。その後出土例も増え、阿蘇地域では、下山西遺跡、狩尾遺跡群（湯の口遺跡・方無田遺跡・池田遺跡）、小野原遺跡群（下扇原遺跡）、宮山遺跡、南鍋遺跡、幅・津留遺跡があり、県北地域では、木船西遺跡、大原遺跡、稲佐津留遺跡、山田松尾平遺跡、うてな遺跡、蒲生・上の原遺跡、石川遺跡があり、熊本平野では江津湖遺跡群、神水遺跡群、千原台遺跡群や二本木遺跡群、石の本遺跡、法王鍋遺跡、梅ノ木遺跡が、緑川流域では二子塚遺跡や塔平遺跡、宮地遺跡群（新御堂遺跡）がある。宇土半島基部周辺では、古保山打越遺跡で摘鎌の可能性のある鉄製品が出土しているが、それより南での出土例は知られていない。拠点的大集落以外の遺跡からも出土しており、中には石の本遺跡のように包含層からの出土で、弥生時代の竪穴建物は１軒しかない例もあるが、他はある程度の規模をもつ遺跡からの出土が多い。

【参考文献】

谷史記　２００５『千原台遺跡群』熊本市教育委員会

尾崎潔久　２０１７『上南部遺跡』熊本県文化財調査報告　第３２６集　熊本県教育委員会

亀田学　２００１『梅ノ木遺跡』熊本県文化財調査報告　第１９９集　熊本県教育委員会

亀田学他　２０１４『山田松尾平遺跡』熊本県文化財調査報告　第３０４集　熊本県教育委員会

木﨑康弘他　１９９３『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告　第１３１集　熊本県教育委員会

木﨑康弘　１９９６『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告　第１５８集　熊本県教育委員会

清田純一　２００３『宮地遺跡群』城南町文化財調査報告　第１３集　城南町教育委員会

坂井田端志郎他　２０１８『託麻弓削遺跡群２』熊本県文化財調査報告　第３３１集　熊本県教育委員会

高谷和生他　１９８７『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告　第８８集　熊本県教育委員会

寺沢知子　１９８５「１０．鉄製穂摘具」『弥生時代の研究』５　雄山閣

中原幹彦他　２００２『石川遺跡』植木町文化財調査報告　第１４集　植木町教育委員会

中村幸弘　１９９９『石の本遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告　第１７７集　熊本県教育委員会

中村安宏　２０１７『木船西遺跡』玉名市文化財調査報告　第３４集　玉名市教育委員会

西住欣一郎　１９９２『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告　第１２１集　熊本県教育委員会

長谷部善一他　２０１０『稲佐津留遺跡・西安寺遺跡』熊本県文化財調査報告　第２６３集　熊本県教育委員会

長谷部善一他　２０１３『二本木遺跡群７』熊本県文化財調査報告　第２８０集　熊本県教育委員会

原田範昭　１９９９「中九州における弥生時代後期土器の編年」『先史学・考古学論究Ⅲ』龍田考古学会

原田範昭他　２００６『江津湖遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会

林田和人他　２００３『神水遺跡Ⅵ』熊本市教育委員会

水上公誠他　２０１３『塔平遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告　第２８５集　熊本県教育委員会

宮崎敬士・村上恭通他　１９９２『二子塚』熊本県文化財調査報告　第１１７集　熊本県教育委員会

宮崎敬士他　２０１０『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告　第２５７集　熊本県教育委員会

宮本利那　２０１１『宮山遺跡Ⅱ』阿蘇市文化財調査報告　第２集　阿蘇市教育委員会

三好栄太郎　２０１４『法王鍋遺跡Ⅰ』熊本市の文化財　第３３集　熊本市教育委員会

村井眞輝他　１９８７『古保山打越遺跡』熊本県文化財調査報告　第９３集　熊本県教育委員会

笠　健　２００２『南鍋遺跡』白水村文化財調査報告　第１集　白水村教育委員会

吉田正一　１９９４『池田遺跡』熊本県文化財調査報告　第１４０集　熊本県教育委員会

表2　土器類観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※(　)は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
5	1	縄文土器	浅鉢	(SI05)	A①層	—	—	—	4.5	ナデ、ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4	石英、長石、角閃石	波状口縁。内面と外面に煤付着。	7
	2	縄文土器	浅鉢	(SI01)	D床面下	—	—	—	2.2	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	黒褐 10YR3/2	にぶい黄褐 10YR5/4	石英、角閃石	波状口縁。	
	3	縄文土器	浅鉢	(SI02)	B①層下	—	—	—	3.4	ミガキ	ミガキ	黄灰 2.5Y4/1	暗灰黄 2.5Y5/2、浅黄 2.5Y7/4	長石、石英	内面に摩滅、口唇付近が欠損。	
	4	縄文土器	浅鉢	(SI02)	B①層上	—	—	—	2.8	ナデ後ミガキ	—	黄褐 2.5Y5/3	オリーブ褐 2.5Y4/3	石英、角閃石	沈線文。	
	5	縄文土器	鉢か深鉢	(SI03)	A	—	—	—	5.7	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	暗灰黄 2.5Y4/2	浅黄 2.5Y7/4、黒 N1.5/	石英、長石、角閃石、雲母	内面に黒斑あり。	
	6	縄文土器	鉢か深鉢	(SI03)	B①層	—	—	—	4.8	ミガキ	ミガキ	黒 5Y2/1	にぶい橙 7.5YR6/4	石英、長石	刻目突帯。外面に煤付着。	
	7	縄文土器	鉢か深鉢	(SI05)	A①層	—	—	—	4.8	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	黒褐 10YR3/1	石英、長石、角閃石	組織痕文土器。内面に黒斑あり。	
	8	縄文土器	鉢か深鉢	—	E-11G、14T②層	—	—	—	5.2	ナデ	ヨコナデ	灰黄褐 10YR5/2	にぶい褐 7.5YR5/4	角閃石	白色砂粒、黒色砂粒、石英、雲母、組織痕文土器。	
	9	縄文土器	不明	—	P-5G③層	—	—	—	6.2	—	粗いナデ	黄褐 2.5Y5/3、黒褐 2.5Y3/1	にぶい黄 2.5Y6/4	白色砂粒、雲母、石英	組織痕文土器。	
	10	縄文土器	不明	(SI04)	D①層	—	—	—	2.8	—	ナデ	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3	石英、長石、角閃石	組織痕文土器。	
	11	縄文土器	不明	—	G-11G②層	—	—	—	5.1	ヨコナデ、ナデ	ハケメ後ナデ、指頭圧痕	橙 7.5YR6/6、黒褐 7.5YR3/1	にぶい黄橙 10YR5/4	雲母、黒色砂粒、	粘土紐貼付。外面に煤付着。	
	12	縄文土器	鉢	(SI04)	D床面	No.4	—	(11.2)	2.9	ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄 2.5Y6/3	石英、長石、角閃石、輝石	円盤貼付状底部。	
	13	縄文土器	鉢	(SI05)	—	No.1	—	(8.6)	5.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3、褐灰 10YR4/1	黒褐 10YR3/1	雲母、角閃石、白色砂粒、赤褐色砂粒	円盤貼付状底部。	
6	14	弥生土器	甕	SI01	D	—	—	—	2.4	ナデ	ナデ	浅黄 2.5Y7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	長石、石英、雲母	口唇部に煤付着。	8
	15	弥生土器	甕	SI01	A・Dベルト①層	—	—	—	2.4	ナデ	ナデ	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/4	長石、石英、雲母		
	16	弥生土器	甕	SI01	2トレンチ	—	(24.8)	—	4.0	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐 10YR3/2	にぶい黄橙 10YR6/3	白色砂粒、黒色砂粒、石英、雲母		
	17	弥生土器	高坏	SI01	PitB埋土①層	—	—	—	1.5	ナデ	ナデ	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石、石英	全体に赤彩あり。口唇部に煤付着。	
	18	弥生土器	甕か壺	SI01	C①層上	—	—	—	3.5	ナデ、ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄 2.5Y6/4	長石	煤付着。	
	19	弥生土器	甕か壺	SI01	A・Dベルト①層	—	—	—	2.7	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR6/2	長石	外面に煤付着。	
	20	弥生土器	壺	SI01	b・cベルト①層	—	(17.0)	—	4.8	ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR6/6	石英、長石	刻目突帯。	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※（ ）は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
7	22	弥生土器	甕	SI02	B①層	—	—	—	2.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、石英、角閃石、雲母		8
	23	弥生土器	甕	SI02	B①層上	—	—	—	1.8	ナデ	ナデ	浅黄 5Y7/4	浅黄 2.5Y7/4	長石、石英、角閃石、雲母		
	24	弥生土器	甕	SI02	B①層下	—	—	—	4.2	ナデ、ナデ後ハケメ	ナデ後ハケメ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英、長石、角閃石		
	25	弥生土器	壺	SI02	B①層ベルト	—	—	—	4.3	ナデ後丁寧なナデ	ナデ後丁寧なナデ	黄褐 2.5Y5/3	黄褐 2.5Y5/3	石英、長石、角閃石		
	26	弥生土器	壺	SI02	C①層	—	—	—	3.0	ナデ	ナデ	にぶい黄 2.5Y6/4	黒 2.5Y2/1	石英、長石		
	27	弥生土器	壺	SI02	B①層	—	—	—	6.2	縦方向の丁寧なナデ、ナデ	ハケメ	明褐 7.5YR5/6、暗灰 N3/	にぶい橙 7.5YR6/4	長石、石英	2条の刻目突帯。外面に黒斑あり。	
9	29	弥生土器	甕	SX05	P3①層、D①層	—	(18.8)	—	11.3	ヨコナデ、ハケメ	ハケメ後ヨコナデ、ハケメ	にぶい褐 7.5YR5/4、黒褐 7.5YR3/1	橙 7.5YR6/6	白色砂粒、赤色砂粒、角閃石		9
	30	弥生土器	甕	SX05	D④層、P3③層	—	(19.0)	—	11.2	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ、ハケメ後ヨコナデ、指頭圧痕	にぶい橙 7.5YR6/4、黒褐 7.5YR3/1	橙 7.5YR6/6	雲母、角閃石、黒色砂粒、赤褐色砂粒		
	31	弥生土器	甕	SX05	P3層、P3①層、B③層、A①層、D③層	No.9、No.15、No.2、No.12、No.17	(19.5)	—	33.0	ヨコナデ、ナデ、ハケメ、ハケメ後ナデ、タタキがかすかに残る	ヨコナデ、ナデ、ハケメ、ハケメ後ナデ	灰黄褐 10YR4/2、橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4、黒褐 10YR3/2	白色砂粒、黒色砂粒、赤色砂粒	胴部は全面ハケメ。	
	32	弥生土器	甕か壺	SX05	①層、B③層、P-4 3 層	No 5	(15.4)	—	11.0	ヨコナデ、潰滅により調整不明	ヨコナデ、ナデ、荒い工具痕	黒褐 10YR3/1	にぶい黄褐 10YR7/4、灰黄褐 10YR5/2	白色砂粒、雲母、角閃石	外面に黒斑あり。	
	33	弥生土器	壺	SX05	C③層、D①層	—	(19.6)	—	2.2	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	白色砂粒、黒色砂粒、石英、角閃石	複合口縁。上下端に刻目。	
	34	弥生土器	壺	SX05	B③層、床面、D①層	No 9、No 7、No 11、No 14	—	—	19.7	ナデ、ハケメ後ナデ	ナデ、指頭圧痕	暗赤褐 2.5YR3/2、赤黒 2.5YR2/1	にぶい黄橙 10YR7/3	黒色砂粒、雲母	直線文、波状文。	
	35	弥生土器	円盤形土製品	SX05	—	No 6	長 7.1	幅 6.6	厚 0.7	ハケメ	ハケメ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR4/1	白色砂粒、雲母		9
	36	弥生土器	台付甕	SX05	B③層、床面	—	—	10.0	3.9	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	黒色砂粒、石英、角閃石		
	37	弥生土器	台付甕	SX05	C③層、P-5G 3 層	—	—	(11.4)	4.6	ヨコナデ、工具痕	ナデ、ヨコナデ、指頭圧痕	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	白色砂粒、黒色砂粒、角閃石		
	38	弥生土器	台付甕	SX05	P3①層、P-5G 3 層	—	—	(15.0)	6.4	タタキ後ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ	にぶい橙 7.5YR6/4、灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR5/2、褐灰 7.5YR4/1	雲母、白色砂粒、黒色砂粒		
10	39	弥生土器	台付甕	SX05	①層、C③層、A③層、D③層、P-5G 2 層	No 24、No 1、No 1、SK07 No 1・No 2・No 3・No 4	—	—	21.6	ハケメ、ハケメ後ナデ	タタキ後ハケメ、タタキ 脚内：ナデ、タタキ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4、黒褐 10YR3/1	にぶい黄橙 10YR7/4、黒褐 10YR3/1	赤褐色砂粒、石英、雲母	外面に黒斑あり。	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※（ ）は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
10	40	弥生土器	高坏	SX05	—	No.22、No.27	29.5	—	5.9	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ハケメ	ヨコナデ、ヨコナデ後暗文	明黄褐 10YR7/6、褐灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR7/4、灰褐 10YR5/1	白色砂粒、石英、雲母	暗文。	
12	43	弥生土器	甕	SI03	P7	—	—	—	4.4	ハケメ	ハケメ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英、長石、角閃石		10
	44	弥生土器	壺	SI03	P2	—	—	(10.2)	4.1	ナデ、ハケメ	ナデ	浅黄 2.5Y7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英、長石		
	46	弥生土器	甕	SI03	3トレンチ	—	(27.0)	—	4.0	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	褐灰 10YR4/1	にぶい黄褐 10YR5/3	白色砂粒、雲母、角閃石	沈線。外面に煤付着。	
	47	弥生土器	甕	SI03	A①層	—	—	—	2.1	ナデ	ナデ	浅黄 2.5Y7/4、褐灰 10YR4/1	浅黄 2.5Y7/4	石英、長石、雲母、角閃石		
	48	弥生土器	甕	SI03	D①層	—	—	—	2.2	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄 2.5YR6/4	長石、石英、雲母		
	49	弥生土器	甕	SI03	A①層	—	—	—	6.6	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/4	石英、長石、雲母		
	50	弥生土器	甕	SI03	B床下	—	—	—	3.0	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	石英、長石、角閃石、雲母		
	51	弥生土器	甕	SI03	B2	—	—	—	2.1	ナデ	ナデ	明黄褐 2.5YR6/6	明黄褐 2.5YR7/6	石英、長石		
	52	弥生土器	甕	SI03	C①層	—	—	—	3.0	ナデ	ナデ	明黄褐 10YR7/6	灰黄 2.5Y6/2	長石、石英		
	53	弥生土器	甕	SI03	P4	—	—	—	2.7	ナデ	強いナデ	にぶい黄橙 10YR7/4、灰黄褐 10YR5/2	浅黄橙 10YR8/4	石英、長石、雲母		11
	54	弥生土器	甕	SI03	4トレンチ	—	—	—	5.1	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	白色砂粒、赤色砂粒、雲母、角閃石		10
	55	弥生土器	壺	SI03	B①層	—	—	—	4.7	ナデ	ケズリ後ナデ	浅黄 2.5Y7/4	黄灰 2.5Y5/1	石英、長石、角閃石、雲母	鶴部に鈎形突帯。刻目。	
	56	弥生土器	壺	SI03	D	—	—	—	3.6	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	石英、長石、角閃石		
	57	弥生土器	壺	SI03	C・Dベルト	—	—	—	6.3	ナデ後ハケメ	ナデ	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	長石、角閃石		
	58	弥生土器	甕	SI03	A①層	—	—	6.5	4.9	ナデ、ハケメ	ナデ	にぶい黄 2.5YR6/4	暗灰黄 2.5Y4/2	長石、石英	粘土積上痕。	11
	59	弥生土器	壺	SI03	4トレンチ	—	—	1.6	5.5	磨滅により調整不明	ナデ、ハケメ、指頭圧痕	にぶい橙 7.5YR6/4	灰褐 7.5YR5/2	白色砂粒、赤色砂粒、黒色砂粒、雲母、角閃石		
14	62	弥生土器	甕	SI04	B①層	—	—	—	1.7	ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英、長石、雲母		12
	63	弥生土器	甕	SI04	D①層	—	—	—	2.7	ナデ	ナデ	黄褐 2.5Y5/3	黄褐 2.5Y5/3	石英、長石、雲母		
	64	弥生土器	甕	SI04	D1①層	—	—	—	4.1	ナデ	ナデ後ハケメ	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 5YR6/6	石英、長石、角閃石		

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※（ ）は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
14	65	弥生土器	甕	SI04	C ①層	—	—	—	4.6	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄 2.5YR6/4	石英、長石	外面に煤付着。	
	66	弥生土器	甕	SI04	ad ベルト	—	—	—	2.7	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	石英、長石、角閃石、雲母		
	67	弥生土器	甕	SI04	D ③層	—	—	—	3.8	ナデ	ナデ	黒 7.5YR2/1	にぶい橙 7.5YR6/4	石英、長石、角閃石	外面に煤付着。	
	68	弥生土器	甕	SI04	D1 ①層	—	—	—	8.5	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄褐 10YR5/3	石英、長石、角閃石	内面と外面に煤付着。	
	69	弥生土器	甕	SI04	D1 ①層	—	—	—	5.5	ナデ	ナデ、ハケメ後ナデ	黒 10YR2/1	にぶい黄褐 10YR5/4	石英、長石、角閃石		
	70	弥生土器	甕	SI04	D1 ①層	—	—	—	5.8	ハケメ後ナデ	ハケメ	黒 N2/	浅黄 2.5Y7/4、黄灰 2.5Y4/1	長石、石英	外面と内面口縁一部に煤付着。	
	71	弥生土器	甕	SI04	D ①層	—	(27.4)	—	5.5	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ナデ、ハケメ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	石英、長石、角閃石	口縁内面に黒斑あり。	12
	72	弥生土器	甕	SI04	D ①層	—	—	—	7.3	ナデ	ハケメ後ナデ	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	石英、長石、角閃石、雲母	沈線文。	
	73	弥生土器	甕	SI04	D1 ①層	—	—	—	3.8	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3	石英、長石、角閃石		
	74	弥生土器	壺	SI04	B ①層	—	—	—	4.2	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	石英、長石、角閃石、雲母	外面に煤付着。	
	75	弥生土器	壺	SI04	D ベルト	—	—	—	3.2	ナデ、ハケメ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/3	長石、石英		
15	76	弥生土器	甕	SX01 (SI06)	C	—	—	—	5.0	タタキ後ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR5/2	角閃石、石英、長石、砂粒		
	77	弥生土器	壺	SX01 (SI06)	清掃	—	—	—	5.7	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ	ナデ	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/4	石英、長石、金雲母	貼付突帯。	
17	79	弥生土器	甕	SI05	B ①層	—	—	—	2.1	ナデ	ナデ	橙 5YR6/6、にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	石英、長石、輝石		
	80	弥生土器	甕	SI05	A ①層	—	—	—	1.8	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	石英、長石、角閃石、雲母		
	81	弥生土器	甕	SI05	—	No.13	—	—	5.5	ナデ	ナデ	黒 5Y2/1	灰オリーブ .5Y5/2	長石、石英、雲母	貼付突帯。外面に煤付着。	
	82	弥生土器	甕	SI05	C2 2 層	—	—	—	3.0	ナデ	ナデ	灰黄褐 10Y5/2、浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	石英、長石、角閃石		13
	83	弥生土器	甕	SI05	P5	—	—	—	5.2	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、石英、角閃石、雲母	貼付突帯。内面に黒斑あり。	
	84	弥生土器	甕	SI05	C ③層、B ①層、C 2	—	(19.6)	—	14.0	ヨコナデ、ハケメ、タタキ後ハケメ	ヨコナデ、ハケメ、ハケメ後工具ナデ	にぶい橙 5YR7/4、褐灰 5YR4/1	にぶい橙 7.5YR7/3、褐灰 7.5YR4/1	角閃石、雲母	外面に焼成破裂痕あり。	
	85	弥生土器	甕	SI05	—	No.10	(25.0)	—	7.9	ナデ、ナデ後ハケメ、ハケメ	ナデ後ハケメ、ハケメ	橙 7.5YR6/6、明赤褐 5YR5/8	橙 5YR6/6、にぶい褐 7.5YR5/4	雲母、石英、白色砂粒		

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※（ ）は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
17	86	弥生土器	甕	SI05	D 埋土、I-10G 12T	№6	(22.2)	—	13.4	ナデ、ヨコナデ、ハケメ、指頭圧痕	ナデ、ヨコナデ、ハケメ	褐灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR7/4、褐灰 10YR4/1	白色砂粒、石英、雲母、角閃石	外面に煤付着。	13
	87	弥生土器	壺	SI05	A①層	—	—	—	2.9	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 10YR6/4、褐灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石、石英、雲母、白色砂粒、黒色砂粒	外面に煤付着。	
	88	弥生土器	鉢か高坏	SI05	B 埋土	—	—	—	3.7	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ミガキ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英、雲母、角閃石		
	89	弥生土器	壺	SI05	D ①層、D 埋土、I-10G 12T	—	—	(8.1)	15.2	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、工具ナデ	ハケメ後ナデ、指頭圧痕、ハケメ	にぶい褐 7.5YR5/4、黒 10YR2/1	にぶい褐 7.5YR5/4	白色砂粒、石英、雲母	刻目突帯。外面に黒斑あり。	
	90	弥生土器	甕	SI05	—	№8	—	(10.6)	4.4	ハケメ、ナデ	ナデ	にぶい黄 2.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	金雲母、長石、角閃石	底部に砂付着。	
	91	弥生土器	甕	SI05	—	№7	—	(10.8)	9.6	ハケメ、ナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/4	金雲母、黒雲母、角閃石	内面に煤、底部に砂僅かに付着。	
	92	弥生土器	高坏	SI05	A-B ベルト	№9	—	13.0	9.4	ハケメ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	橙 2.5YR6/6、にぶい橙 5YR6/4	橙 5YR6/6、褐灰 5YR4/1	雲母、石英、白色砂粒、黒色砂粒		
18	95	弥生土器	甕	SI08	—	№2	—	—	2.0	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4、褐灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR6/4	白色砂粒、雲母、角閃石		14
	96	弥生土器	甕	SI08	B①層	—	—	—	4.4	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	橙 5YR7/6、褐灰 5YR5/1	にぶい黄橙 10YR7/4、橙 7.5YR6/6	角閃石、雲母、白色砂粒		
	97	弥生土器	甕	SI08	C①層	—	—	—	9.3	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、指頭圧痕	にぶい赤褐 5YR5/4、にぶい黄褐 10YR5/3、黒褐 5YR3/1	にぶい黄褐 10YR7/4、褐灰 10YR4/1	角閃石、雲母、白色砂粒	貼付突帯。外面に煤付着。	
19	98	弥生土器	甕	SI08	B①層	—	(21.0)	—	7.1	ナデ、ハケメ	ハケメ	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	白色砂粒、黒色砂粒、赤色砂粒、雲母、石英		
	99	弥生土器	甕	SI08	B①層、B 床面下	№2	(20.0)	—	17.7	ナデ、ハケメ、ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 10YR7/4、黒 N2/	にぶい黄橙 10YR6/4	白色砂粒、黒色砂粒、石英、角閃石		15
	100	弥生土器	甕	SI08	C①層、G11 ②層	—	(15.7)	—	18.8	タタキ後ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ハケメ後ナデ、指頭圧痕	黒 N2/	灰黄褐 10YR5/2	白色砂粒、黒色砂粒、角閃石		
	101	弥生土器	壺	SI08	B 1ST ①層	—	(23.1)	—	6.3	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	白色砂粒、石英、雲母		14
	102	弥生土器	壺	SI08	B①層、B 1ST ①層、①層、C①層	—	(16.7)	—	15.1	ヨコナデ、ハケメ、ナデ、指頭圧痕	ヨコナデ	灰白 2.5YR8/1、暗灰 N3/	にぶい橙 5YR7/4、灰 N4/	白色砂粒、石英、角閃石	刻目突帯。外面に黒斑あり。内面は磨滅（剥落）。	15
	103	弥生土器	甕	SI08	C①層	—	(13.4)	—	13.2	タタキ後ナデ、ヨコナデ、ハケメ	ハケメ後ナデ、ハケメ	黒褐 7.5YR3/2	明褐 7.5YR5/6	白色砂粒、石英、雲母、角閃石		

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※（ ）は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
19	104	弥生土器	鉢	SI08	—	No.1	(15.0)	—	11.0	ヨコナデ、手持ちヘラ削り後ハケメ後ナデ、ハケメ後ナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	白色砂粒、赤色砂粒、角閃石	外面口縁部に一部黒斑あり。	15
	105	弥生土器	台付甕	SI08	C ①層	—	—	(8.0)	5.0	ハケメ、ヨコナデ	ナデ	明黄褐 10YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	石英、雲母、角閃石		
	106	弥生土器	台付甕	SI08	C ①層	—	—	(6.6)	4.8	ハケメ、ヨコナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	石英、角閃石		
	107	弥生土器	台付甕	SI08	—	No.5	—	(9.8)	5.9	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	石英、長石、角閃石、輝石		
	108	弥生土器	円盤形土製品	SI08	B ①層	—	長 6.2	幅 6.9	厚 0.7	ハケメ	ナデ	にぶい黄橙 10YR5/3、黒褐 10YR3/1	にぶい黄 2.5Y6/4、黄灰 2.5Y4/1	白色砂粒、雲母、角閃石		
20	109	弥生土器	甕	SK01	①層	—	—	—	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英、雲母、角閃石		16
	110	弥生土器	甕	SK01	①層	—	—	—	1.9	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/4	白色砂粒		
21	112	弥生土器	甕	SK04	①層	—	—	—	2.3	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 7.5YR6/6、橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	白色砂粒、長石、角閃石		
22	113	弥生土器	壺	SK05	—	—	—	(8.0)	2.4	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	にぶい黄 2.5Y6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	白色砂粒、黒色砂粒、赤色砂粒、石英、角閃石		
23	114	弥生土器	甕	SX09	②層	—	—	—	3.5	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母		
24	115	弥生土器	甕	SK02	D1-2 ベルト ①層	—	—	—	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄 2.5YR7/3、黄灰 2.5Y4/1	灰白 2.5Y8/2	角閃石、雲母、白色砂粒	貼付突帯。	
	116	弥生土器	甕	SK02	D1-2 ベルト ①層	—	—	—	6.1	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	白色砂粒、角閃石		
	117	弥生土器	壺	SK02	D1-2 ベルト ①層	—	—	—	6.5	ナデ、ヨコナデ	ナデ、指頭圧痕	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄橙 10YR7/4	白色砂粒、赤褐色砂粒、石英、雲母	刻目突帯。	
	118	弥生土器	台付甕	SK02	D1D2 ベルト ③層	—	—	(8.4)	3.0	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	白色砂粒、黒色砂粒、雲母、角閃石		
25	119	弥生土器	甕か壺	SX02	①層	—	—	—	2.6	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐 10YR4/2、黒褐 10YR2/2	にぶい黄橙 10YR6/4	雲母、角閃石、黒色砂粒	外面に煤付着。	
26	120	弥生土器	甕か壺	SI07	D ①層	—	—	—	5.4	ヨコナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄褐 10YR6/4	橙 7.5YR6/6	石英、長石、角閃石		
	121	弥生土器	甕か壺	SI07	①層	—	—	—	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐 7.5YR6/3	橙 5YR6/6	石英、長石、雲母		
	122	弥生土器	甕	SI07	D ①層	—	—	—	6.1	ナデ後ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	石英、長石	外面に黒斑あり。	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※（ ）は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
27	123	弥生土器	甕	SX10	—	—	—	—	6.0	ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	明赤褐 5YR5/6、橙 7.5YR6/6、褐灰 7.5YR4/1	橙 7.5YR6/6	雲母、白色砂粒	貼付突帯。外面に煤付着。	17
	124	弥生土器	甕	SX10	①層	—	(23.6)	—	5.8	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR7/6	白色砂粒、黒色砂粒、石英、雲母		
	125	弥生土器	甕（壁相）	SX10	①層	—	—	—	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐 5YR5/6、褐灰 5YR4/1	明赤褐 5YR5/6、橙 7.5YR7/6	雲母、石英、白色砂粒	煤付着。	
	126	弥生土器	甕	SX10	①層、G-10G ①層	—	(22.3)	—	9.0	ハケメ後ヨコナデ、炕いミガキ	ハケメ後ヨコナデ、ミガキ、ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	白色砂粒、雲母、角閃石	外面に暗文。	
	127	弥生土器	甕	SX10	①層、G-10G ②層	—	(29.2)	—	24.2	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ハケメ、工具端痕	ヨコナデ、ナデ、ハケメ、ハケメ後ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	白色砂粒、雲母		
	128	弥生土器	台付甕	SX10	—	—	—	6.1	5.3	ハケメ、ハケメ後ナデ、ナデ	ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4、黒褐 10YR3/1	白色砂粒、黒色砂粒、赤色砂粒、雲母、角閃石		
	129	弥生土器	壺	SX10	①層、G-10G ②層、S05 C ②層	—	(13.8)	—	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4、暗灰：明赤褐 5YR5/8	白色砂粒、黒色砂粒、石英、雲母、角閃石	外面・内面に暗文。外面に彩色の一部が残る。	
	130	弥生土器	壺	SX10	①層	—	(19.7)	—	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	にぶい赤褐 5YR5/4	橙 5YR6/6	白色砂粒、石英、雲母	外面に暗文。	
	131	弥生土器	壺	SX10	—	—	—	—	16.5	ミガキ、上端下端は摩滅していて不明	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ、ナデ、ハケメ後ナデ、指頭圧痕	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	白色砂粒、雲母、角閃石	刻目突帯。	
	132	弥生土器	壺	SX10	①層	—	—	4.2	5.8	ハケメ後ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	白色砂粒、黒色砂粒、雲母、石英、角閃石		
28	133	弥生土器	甕	SX01	A ①層、E-11G 2層、E-1 2G 2層	—	(17.0)	—	19.3	ナデ、ヨコナデ、タタキ後ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	黒褐 10YR3/1	にぶい黄褐 10YR5/4	白色砂粒、黒色砂粒、雲母、角閃石		18
	134	弥生土器	甕	SX01	①層、13T 2層、E-1 2G 2層	—	(18.0)	—	33.4	ヨコナデ、タタキ後ハケメ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	黒褐 10YR3/1、にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/4、にぶい黄褐 10YR4/3	白色砂粒、黒色砂粒	上部はタタキ痕跡がはっきり残る。外面に煤付着。外面一部表面剥離。	
	135	弥生土器	壺	SX01	A ①層、13T 2層	—	(13.6)	—	9.0	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	白色砂粒、石英、角閃石	外面口縁部に粘土付着。	
	136	弥生土器	壺	SX01	A ①層、E-12G 2層	—	8.6	—	11.7	ナデ、ヨコナデ、波状紋後ナデ、ナデ後ハケメ	ナデ、指頭圧痕	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	石英、角閃石、雲母、黒色砂粒	外面の波状紋は本来は 5 ～ 8 条の波紋だがその後の調整により消えている箇所あり。	
	137	弥生土器	壺	SX01	A ①層	—	17.2	—	16.3	ナデ、ハケメ後ヨコナデ、ハケメ後ナデ	ナデ、ハケメ後ナデ、指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR6/3、灰黄褐 10YR4/2	にぶい橙 7.5YR6/4	白色砂粒、黒色砂粒、雲母		

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※（ ）は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
28	138	弥生土器	壺	SX01	2層、B①層、C①層	—	(17.6)	—	22.1	ナデ、タタキ後ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい橙7.5YR6/4	白色砂粒、黒色砂粒、褐色砂粒	胴部上半タタキ痕が残ったまま雑なハケメ調整。	18
	139	弥生土器	壺	SX01	A①層、B①層	—	(17.0)	—	7.9	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ、ハケメ（直線文）	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ、ナデ	浅黄橙10YR8/3、にぶい黄褐10YR5/3、褐灰10YR5/1	にぶい黄橙10YR7/4	赤色砂粒、雲母	外面に煤付着。	
	140	弥生土器	壺	SX01	B①層	—	—	—	5.4	ヨコナデ、指頭圧痕	ヨコナデ、磨滅により調整不明	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	白色砂粒、石英		
29	141	弥生土器	壺	SX01	A①層、B①層、C①層、2層	—	—	—	23.9	ハケメ、ヨコナデ、ハケメ後ナデ、タタキ	ナデ、ヨコナデ、ハケメ後ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙10YR7/3、黒褐10YR3/1	にぶい黄橙10YR6/3、褐灰10YR4/1	赤褐色砂粒、角閃石	波状文。直線文。	19
	142	弥生土器	壺	SX01	B①層	—	—	—	10.2	ハケメ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ハケメ後ナデ、指頭圧痕	にぶい橙5YR6/4、褐灰5YR5/1	にぶい橙5YR6/3	雲母、角閃石	波状文。	
	143	弥生土器	壺	SX01	B①層	—	—	—	8.3	ミガキ、ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ナデ	ナデ	明黄褐10YR7/6	明黄褐10YR6/6	雲母、角閃石		
	144	弥生土器	鉢	SX01	D③層、I-11G、E-12G 2層	—	(15.0)	—	10.4	ヨコナデ、タタキ後ハケメ後ナデ、ハケメ	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	赤色砂粒、雲母		
	145	弥生土器	鉢	SX01	A①層、E-12G 2層	—	(13.2)	—	10.8	ヨコナデ、ミガキ（暗文か）磨滅）、ナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、指頭圧痕	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR6/4	雲母		
	146	弥生土器	鉢	SX01	①層、E-11-F11G 13T 2層	No.11	(15.4)	—	7.0	ナデ後ハケメ、工具圧痕	ナデ、ヨコナデ、指頭圧痕	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい褐7.5YR6/3	白色砂粒、黒色砂粒	外面に黒斑あり。	
	147	弥生土器	鉢	SX01	C③層、①層、2層	—	—	—	9.4	ヨコナデ、ナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ナデ	にぶい橙5YR6/4	橙5YR6/6	白色砂粒、赤色砂粒、角閃石		
	148	弥生土器	鉢	SX01	2層、B①層、C①層	—	(19.1)	—	8.6	ナデ、タタキ後ハケメ後ナデ	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	石英、長石、黒色砂粒、褐色砂粒		
	149	弥生土器	鉢	SX01	①層、2層	—	(21.2)	—	8.8	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ハケメ	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	にぶい橙7.5YR6/4	橙7.5YR6/6	石英、雲母、角閃石		
	150	弥生土器	鉢	SX01	①層、E-11 13T 2層	—	—	—	6.0	ヨコナデ、タタキ後ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	にぶい橙7.5YR6/4	黒褐7.5YR3/1	赤褐色砂粒、雲母	外面に黒斑あり。	
	151	弥生土器	鉢	SX01	C①層	—	(12.8)	—	7.3	ミガキ	—	褐灰5YR4/1	にぶい褐7.5YR6/1	長石、黒色砂粒	脚台付。内面に暗文。	20
30	152	弥生土器	甕	—	B トレンチ	—	(23.0)	—	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	黄褐2.5Y5/3、黒褐2.5Y3/1	にぶい黄2.5Y6/3	白色砂粒、黒色砂粒、雲母、角閃石	外面に沈線。	
	153	弥生土器	磨か高坏	—	G-11G② 層	—	—	—	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ	橙5YR6/6、にぶい黄橙10YR6/4、黒褐10YR3/1	にぶい黄橙10YR6/4、黒褐10YR3/1	黒色砂粒、雲母	刻目突帯。内面と外面に煤付着。	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) ※（ ）は復元値 ※器高は残存値			調整		色調		胎土	備考	図版番号
				遺構名	グリッド・層位	点上げ番号	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
30	154	弥生土器	壺	—	7トレンチ 2層 P2、8G 7'①層	—	(19.4)	—	7.8	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR6/6	白色砂粒、黒色砂粒、雲母、角閃石		20
	155	弥生土器	鉢	—	8トレンチ	—	(17.0)	—	6.6	ヨコナデ、磨滅により調整不明、ミガキ	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	白色砂粒、黒色砂粒、石英、雲母、角閃石	赤彩。	
31	156	土師器	椀	—	D-12G 2層	—	—	—	1.8	回転ナデ	不定方向ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄 2.5Y6/3	白色粒	高台部欠損。	

表3　石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土地点		法量(cm・g)				石材	備考	図版番号
			遺構名	グリッド・層位	長さ	幅	厚さ	重さ			
12	60	石包丁	SI03	B・C ベルト①層	4.25	8.6	8.0	47.6	安山岩	表裏共に剥離あり。	11
	61	磨石	SI03	P14	12.8	9.6	4.4	780.0	安山岩	表裏両面に使用痕あり。	
18	94	砥石	SI08	№ 7	5.9	2.9	1.75	52.0	砂岩（天草砂岩）	欠損あり。裏面に溝1条あり。4面とも使い込まれている。	14

表4　鉄製品観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土地点		法量(cm・g)				備考	図版番号
			遺構名	グリッド・層位	長さ	幅	厚さ	重さ		
6	21	不明鉄製品	SI01	1トレンチ	2.7	0.8	—	0.7	二等辺三角形。用途不明。	8
7	28	摘鎌	SI02	B、埋土①層取上げ下	—	—	0.1 以下	2.3	板状。	
10	41	不明鉄製品	SX05	C 床面	—	—	—	1.0	扁平な三角形。両面に木質残存。	10
	42	摘鎌（手鎌）	SX05（SK07）	C	9.4	2.3	—	15.4		
12	45	不明鉄製品	SI03	P4	3.7	—	—	5.1	棒状。錆膨れ。	
15	78	槍鉋（ヤリガンナ）	SI06	C	4.4	1.3	0.15	4.6	先端部分。	12
17	93	不明鉄製品	SI05	B	3.1	2.1	0.1 以下	4.0	形状、天地不明。裏面下部に木質残存。	14
20	111	不明鉄製品	SK01	埋土①層	—	—	—	2.6	板状鉄製品。錆膨れ。	16

法王鶴遺跡・弓削前畑遺跡空撮（上が北）（写真：熊本市提供）

調査区遠景（北西から）

1 号竪穴建物完掘状況（南から）

2 号竪穴建物完掘状況（北西から）

3 号竪穴建物出土状況
（北から）

3 号竪穴建物完掘状況
（北から）

5 号竪穴建物完掘状況
（西から）

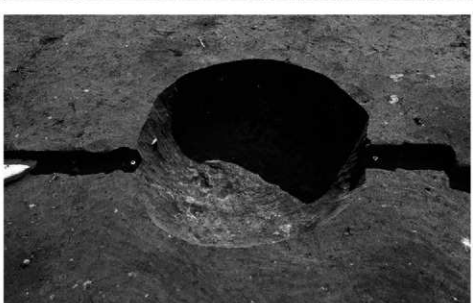
6 号竪穴建物完掘状況
（東から）

8 号竪穴建物遺物出土
及び完掘状況（北東から）

9 号竪穴建物完掘状況
（南から）

1 号土坑完掘状況
（北西から）

3 号土坑完掘状況
（西から）

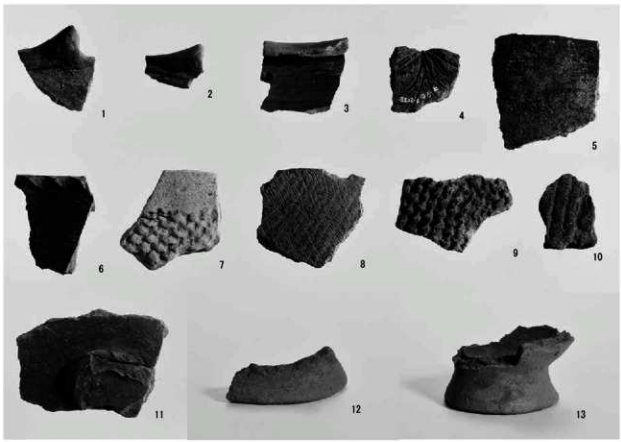


4 号土坑完掘状況
（北から）

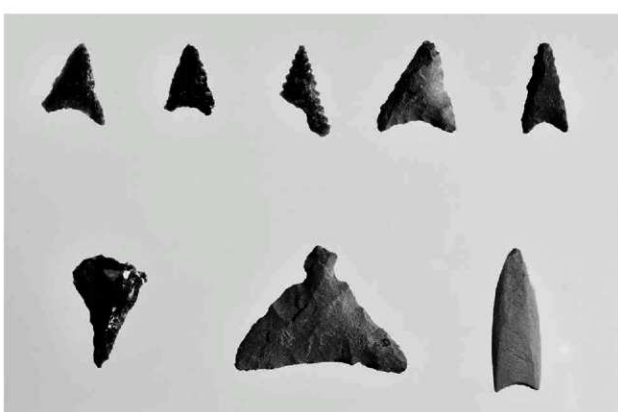
5 号土坑完掘状況
（北から）

1 号不明遺構完掘状況
（北から）

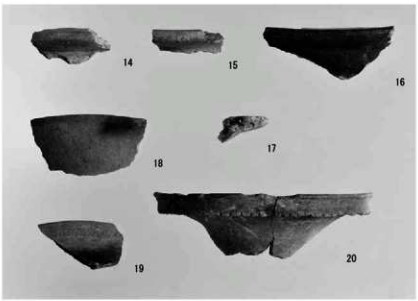
旧 SX01 遺物出土状況
（北東より）



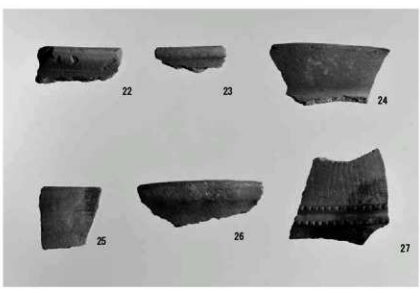
縄文時代出土遺物（1 ～ 13）

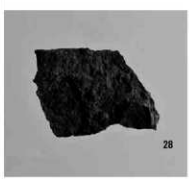


縄文時代出土石器（写真のみ）



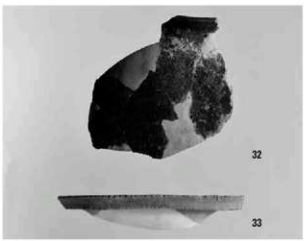
1 号竪穴建物出土遺物（14 ～ 21）

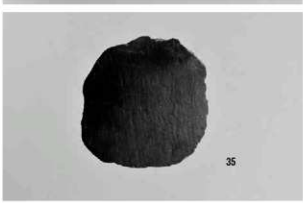




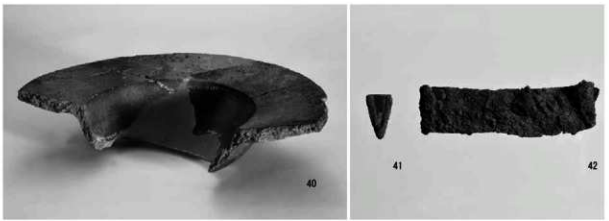
2 号竪穴建物出土遺物（22 ～ 28）

3 号竪穴建物出土遺物（29 ～ 30）

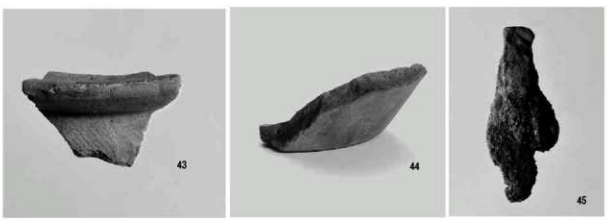




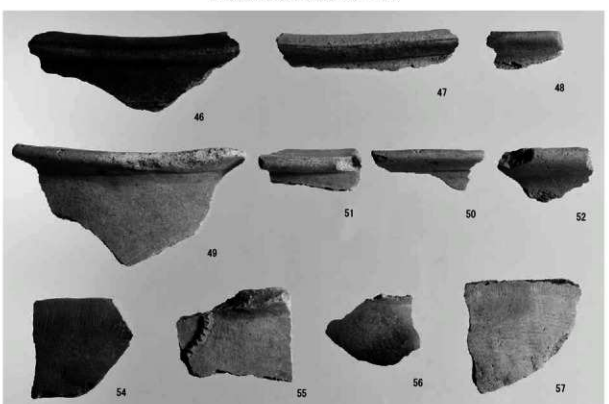
3 号竪穴建物出土遺物（31 ～ 39）



3 号竪穴建物出土遺物（40 ～ 42）

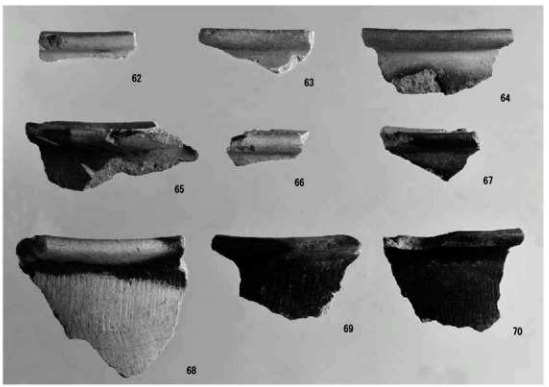


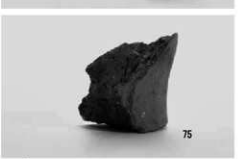
4 号竪穴建物出土遺物（43 ～ 45）



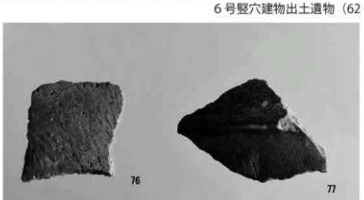
5 号竪穴建物出土遺物（46 ～ 52,54 ～ 57）

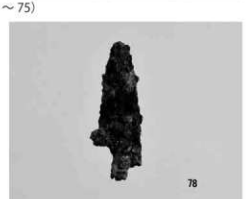
5 号竪穴建物出土遺物（53,58 ～ 61）



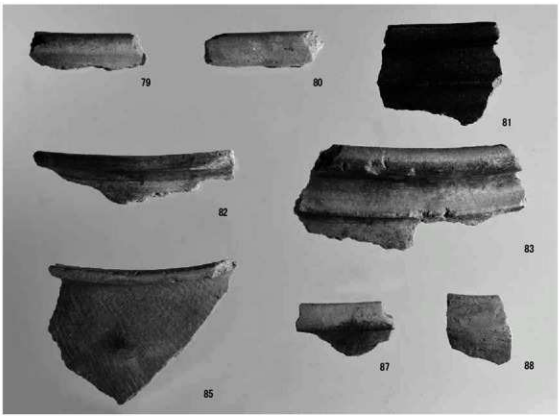


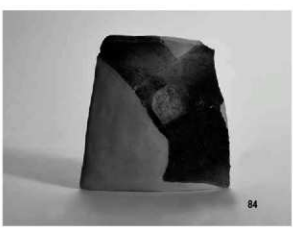
6 号竪穴建物出土遺物（62 ～ 75）



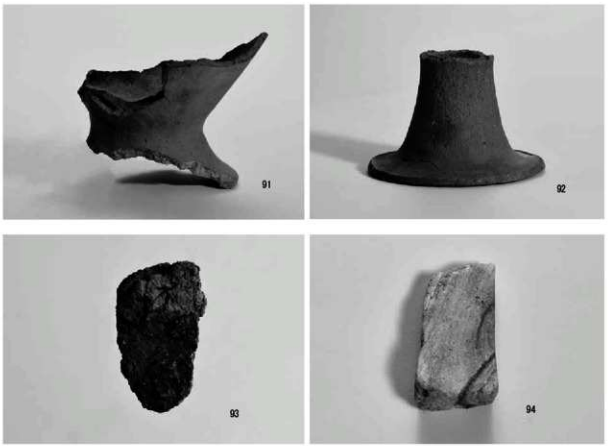


7 号竪穴建物出土遺物（76 ～ 78）



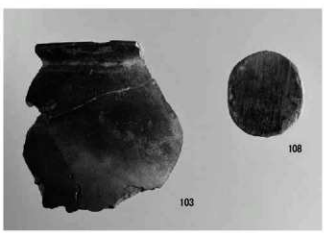


8 号竪穴建物出土遺物（79 ～ 90）

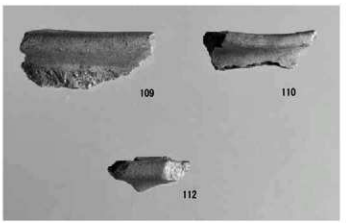


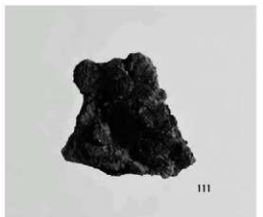
8 号竪穴建物出土遺物（91 ～ 93）

9 号竪穴建物出土遺物（94 ～ 98,101）



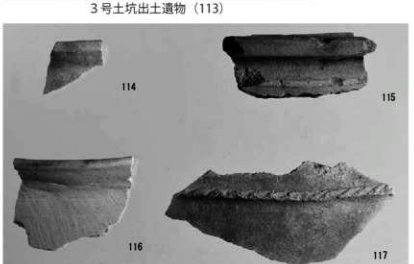
9 号竪穴建物出土遺物（99,100,102 ～ 108）



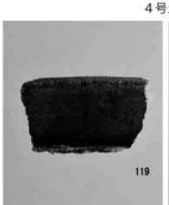


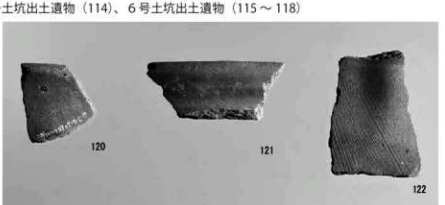
1 号土坑出土遺物（109 ～ 111）、2 号土坑出土遺物（112）

3 号土坑出土遺物（113）

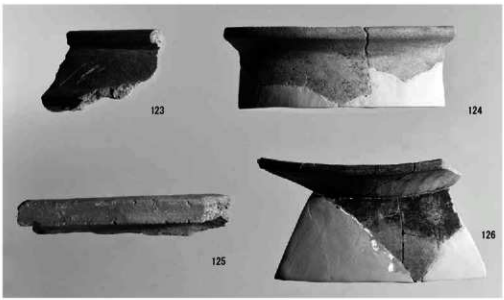


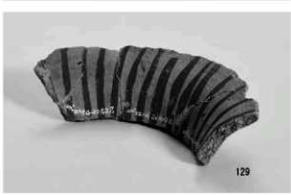
4 号土坑出土遺物（114）、6 号土坑出土遺物（115 ～ 118）

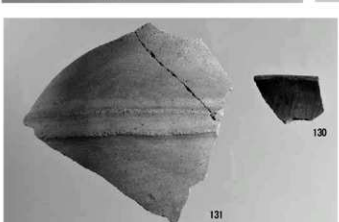




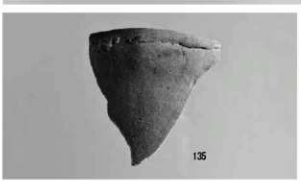
1 号円形周溝遺構出土遺物（119）1 号不明遺構出土遺物（120 ～ 122）

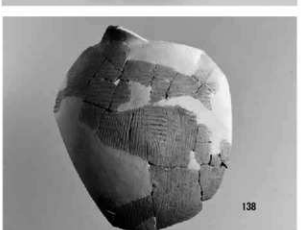


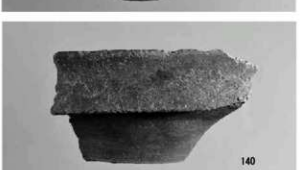




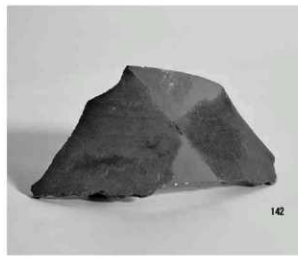
溝状遺構出土遺物（123 ～ 132）

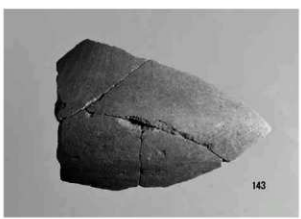


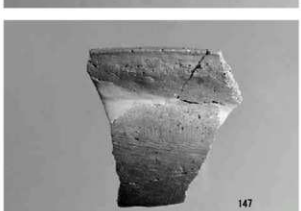




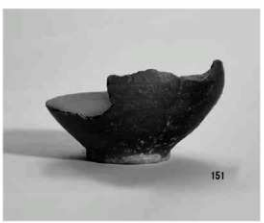
包含層（旧 SX01）出土遺物（1）（133 ～ 140）

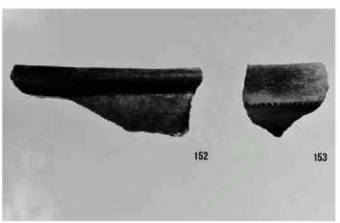






包含層（旧 SX01）出土遺物（2）（141 ～ 148）





包含層（旧 SX01）出土遺物(3)（149 ～ 151）、その他の包含層出土遺物（152、153）

その他の包含層出土遺物（154、155）

古代の出土遺物（156）

Ⅱ 竹ノ後・芭蕉遺跡群

第１章　調査の経過
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境
第３章　調査の成果
第４章　総括

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

平成２４年７月１２日に発生した熊本広域大水害復興事業に伴う調査である。今回報告する竹ノ後・芭蕉遺跡群については、平成２６年５月２７日、２８日に確認調査を実施した。６本のトレンチのうち１トレンチ、３トレンチで縄文時代の遺物の存在を確認した。この調査結果について平成２６年６月２６日付け教文第６３５号で熊本土木事務所に通知した。

その後平成２９年８月１０日付け央土災一第９４号熊本県知事名で文化財保護法94条第１項の通知が熊本市教育委員会に提出され、平成２９年８月２３日付け文振発００１４１９号で熊本市教育長から熊本県教育長あてに進達された。工事内容と確認調査の結果を照らし合わせた結果、遺跡への影響は避けられず発掘調査が必要と判断した。「発掘調査」の指示を平成２９年９月５日付け教文第１３１４号で熊本市教育長、熊本県知事あてに通知した。それを受け、平成２９年９月２５日付け央土災一第１２１号で発掘調査の依頼通知が提出された。

第２節　調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

（１）　発掘調査の組織（平成２９年度）

調査責任者　岡村郷司（文化課長）
　　村﨑孝宏（課長補佐）
調査総括　岡本真也（主幹兼文化財調査第２係長）
調査事務局　左座　守（主幹兼総務文化係長）、稲本尚子・津田光生（参事）、竹馬牧子（主事）
調査担当　後藤克弘（参事）、尾崎潔久（文化財保護主事）
調査作業員　笠秀子、白石美智子、高本勝美、辰島正徳、塚本勇、三島多恵子、森田幸雄、森本紀代子

（２）　整理の組織（平成３０年度）

整理責任者　岡村郷司（文化課長）
　　村﨑孝宏（課長補佐）
整理総括　長谷部善一（主幹兼文化財調査班長）
整理事務局　一寶直也（主幹兼経理班長）、津田光生・松本哲郎（参事）、佐藤賢一（主任主事）、竹馬牧子（主事）
整理担当　古城史雄（参事）、中川治・島浦萌（臨時整理補助員）
整理指導及び助言（敬称略）　山崎純男

第３節　発掘作業の経過

調査期間は平成２９年１０月５日（木）から平成２９年１１月９日（木）までであった。

１０月５日　表土剥ぎを上流側から開始する。埋甕と思われる遺構を検出。甕棺の可能性もあるので、土器棺とする。

１０月６日　表土剥ぎ２日目。遺構確認面としている黄褐色土は、削平され場所により深さが違い、突然深くなったり、浅くなったりして段差ができた個所もあり表土剥ぎに苦心する。

１０月１０日　表土剥ぎ３日目。竪穴建物と思われる遺構が確認できた。一方包含層が飛ばされているためか遺物は、ほとんど出土しない。下流側になるにつれ、樹根が密集し、土はかなり乱れている。本日で表土剥ぎを完了する。

１０月１１日　調査初日。調査事務所、器材倉庫、トイレの設営を行った後、作業員８名を入れ調査を開始する。

１０月１２日　遺構検出のための清掃作業を上流側より開始する。メッシュ杭がないため、工事用遣り方杭を目印に遺構の配置をメモする。砂で埋まった土坑を検出。ＳＸ０１とする。

１０月１３日　遺構検出の清掃作業を続ける。溝を検出するが、埋土は濁っており、表面に近現代の磁器小片も含まれる。試掘坑の痕跡を検出。

１０月１８日　１６・１７日は雨のため中止したので本日は少々の小雨でも作業を行った。以前の重機の爪痕などが残り遺構の検出が難しい。

１０月２０日　これまでメッシュ杭設置等の委託業者が決まらず、グリッド設置が出来なかったが、本日から４級基準点測量及びメッシュ杭設置作業が開始される。遺構検出のための清掃作業すべて終了。土坑等を確認したが表土剥ぎ時に確認した土器棺、竪穴建物及びＳＸ０１としたもの以外は現代のものであった。検出した遺構の掘り下げを開始する。

１０月２３日　この日から検出した遺構の実測や写真撮影にとりかかる。並行してグリッド単位で掘り下げを行う。また川側に設定した土層観察用トレンチ及び試掘坑トレンチを利用し基本土層を確認する。

１０月２４日　メッシュ杭設置が完了し、基準高が判明。

１０月２５日　本日より図化作業を本格的に始める。

１０月２７日　竪穴建物の柱穴がはっきりしないので、硬化面を剥いで再度精査する。

１０月３１日　縄文時代の遺物が出土する場所は限定的であったので､そのグリッドを集中的に掘り下げる。

１１月２日　遺構の実測や写真撮影が終了させる。

１１月７日　グリッドを掘り下げても遺物が出土しなくなる。念のため更に 10cm程掘り下げを行う。

１１月９日　調査最終日。前日雨で作業を中止したため、一部のグリッドの掘り下げ作業が完結していないので、全員で掘り下げを行う。その後土嚢と杭を撤去し、遺物・器材の搬出を行いすべての作業を完了させる。

第４節　整理作業の経過

包含層が作成されているためか、出土遺物は少なく、ミカンコンテナ２箱分である。遺物の選定は、遺構から出土した遺物で図化に耐えうるものを抽出した。その他縄文時代前期の遺物が一定量出土しているので、土器の部位が特定できるもので図化に耐えうるものを中心に選定している。４月に遺構の実測図の再検討を行い５月から製図を開始し、６月中には原稿も含め整理作業をほぼ完了させた。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

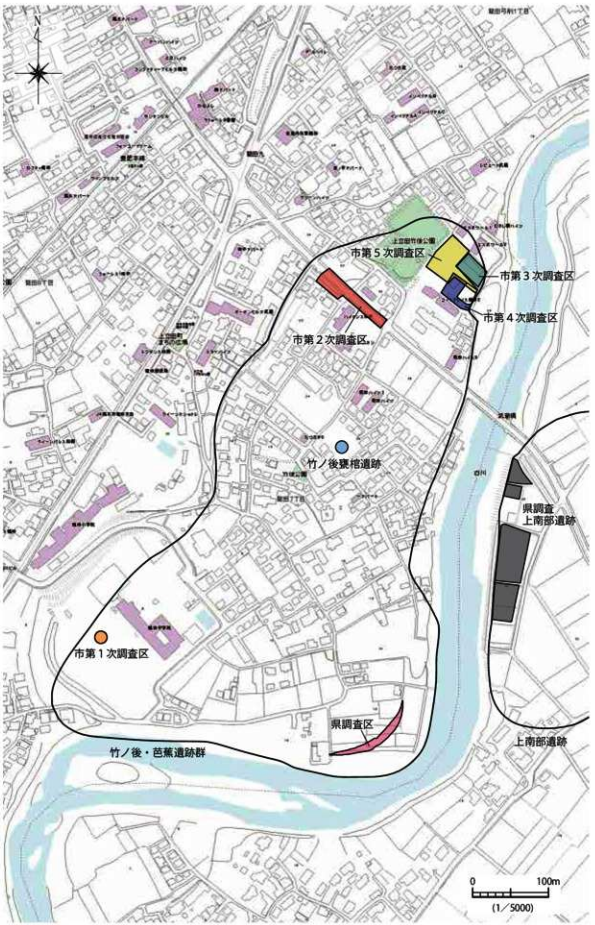
熊本平野は東部に阿蘇外輪山から続く託麻台地と呼ばれる洪積台地が広がる。竹ノ後・芭蕉遺跡群が位置するのは、それが白川により開析され河岸段丘となった所である。

白川は西に向かって蛇行を繰り返し有明海へ注ぐが、中流域付近で大きく南に向きを変え、その後小刻みに蛇行を繰り返す。白川が蛇行し張り出した個所に縄文時代・弥生時代を中心とした遺跡が数多く存在する。竹ノ後・芭蕉遺跡群もこの中流域右岸の河岸段丘上に位置し、白川に沿って延びた７００ｍ程の範囲が該当する。

竹ノ後・芭蕉遺跡群周辺の遺跡として、同じ右岸の上流には、土師器が出土した片彦瀬遺跡（地名表では縄文時代の遺跡）が、隣接して吉ノ平遺跡（縄文～中世）が、下流には石棺が検出された牧鶴遺跡群（弥生～古墳）があるが、いずれも本格的な調査は行われておらず、遺跡の詳細な性格はわかっていない。対岸には上南部遺跡が位置する。上南部遺跡では縄文時代後期から晩期前半頃の竪穴建物とともに多量の土偶が出土している。また県が調査した白川の隣接地では弥生時代中期の竪穴建物跡と甕棺墓などが検出されている。白川中流域を全体的にみると、縄文時代中期までの資料はそれ程多くないものの、縄文時代後期から晩期前半になると遺跡数が増えてくる。ところが晩期後半から弥生時代前期にかけての資料は急激に少なくなる。その後弥生時代中期になると遺跡数が多くなり後期に引き続く。しかしこれが古墳時代前期になるとまた資料が少なくなってしまう傾向がある。古墳時代中期以降になると小規模ながら遺跡も存在しているが、白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い調査した個所では、新南部遺跡群１０次調査、吉原遺跡で、竪穴建物がそれぞれ７軒検出されている。時期は古墳時代後期から終末期と考えられている。今回の調査でも古墳時代終末期の可能性のある竪穴建物が１軒検出されている。

今回調査を行なった竹ノ後・芭蕉遺跡群は竹ノ後遺跡、竹ノ後甕棺遺跡、芭蕉遺跡により構成される（第１図）。熊本市北部地区文化財調査報告書や新熊本市史史料編第１巻考古資料では、縄文時代の遺跡として竹ノ後遺跡が報告され、昭和３７年に熊本大学がトレンチ調査を行ったことが紹介されている。縄文後晩期の土器や土偶が多量に出土している。また昭和３２年には別な個所から甕棺が発見されておりこの地点について熊本新市史史料編第１巻考古資料では「竹ノ後甕棺遺跡」として紹介されている。

これまで熊本市により５回の調査が行われている。熊本市の第１次調査は遺跡の南西側、現在の熊本市立龍田中学校内であるが、検出された遺構は時期不明の集石と竪穴状遺構のみである。２次から５次の調査は遺跡の北東側にあたる。ここで検出された遺構は、竪穴建物や埋甕など縄文時代後晩期の遺構・遺物が主体でその他古墳時代の竪穴建物が検出されている。遺物も縄文時代後晩期の土器が主体であるが弥生時代中期・後期、古墳時代中期や古代の土師器・須恵器も出土している。なお昭和３７年に熊本大学がトレンチ調査を行った個所も遺跡の北東側である。今回の調査区は遺跡の南端にあたり、南に流れる白川が大きく向きを西に変える個所であり、熊本市の２次から５次の調査区とは６００ｍ程離れている。白川に近接し熊本市の調査地点と比べると標高も１０ｍ程低くなっており、土層や主体となる遺構や遺物もかなり異なっている。



第１図　竹ノ後・芭蕉遺跡群調査区位置図（S=1/5000）

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

各調査区内に１辺１０ｍの正方形のグリッドを平面直角座標系に合わせて設定した。グリッドの中央から見て北東側杭のＸ軸Ｙ軸の数値を、Ｘ座標の百の位と十の位、つづいてＹ座標の百の位と十の位を並べて表示しグリッド名とした。更に一つのグリッドを５ｍ単位に４分割して北西部をａ区、北東部をｂ区、南西部をｃ区、南東部をｄ区と呼称している。調査は重機により表土を剥ぎ、次いで人力により清掃作業、遺構検出、遺構掘削を行い、調査を進めた。並行して遺構配置図や土層断面図の作成、写真撮影を行った。

第２節　層序（第２図）

川と反対側の壁面は護岸の法面になる個所であり、垂直に掘り下げることが出来なかったので川側壁に土層観察用のトレンチを設定し土層図を作成した。調査個所は、もとは畑地で、地表面から４０㎝程は耕作土である。その下４０㎝～５０㎝は客土（２層）である。この地点の客土は単層だが、場所により数回にわたり土が盛られている。この客土の下位に肥料用のビニール袋などが混じる。３層は明黄褐色で白川に隣接地で一般的に見られる層で、遺構検出面である。現在４０㎝程の厚さがある。全域にわたりかなりの削平が行われている。以下４層、５層も黄褐色をベースとする砂質土であるが、３層に比べ４層のほうが暗く、５層は赤みがかる。いずれの層にも砂がブロック状に固まった個所が認められるが、５層により顕著である。無遺物層である。６層はオリーブ褐色で完全な砂層である。

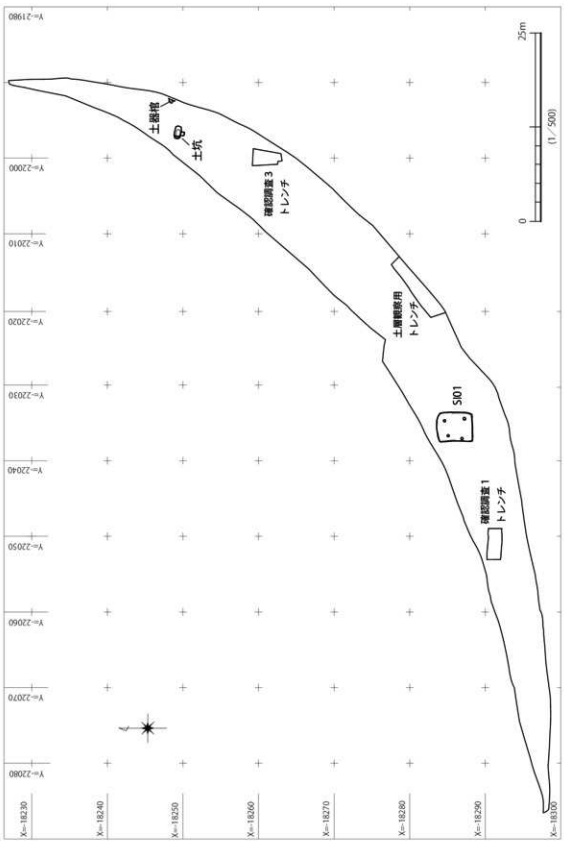
第３節　調査の成果

検出した遺構は、弥生時代の土器棺１基、古墳時代の竪穴建物１軒、近世から近代にかけての性格不明の土坑である。遺物は遺構に伴うもの以外に縄文時代前期の土器が出土している。

（１）縄文時代の遺物（第４・５図　１～１６）

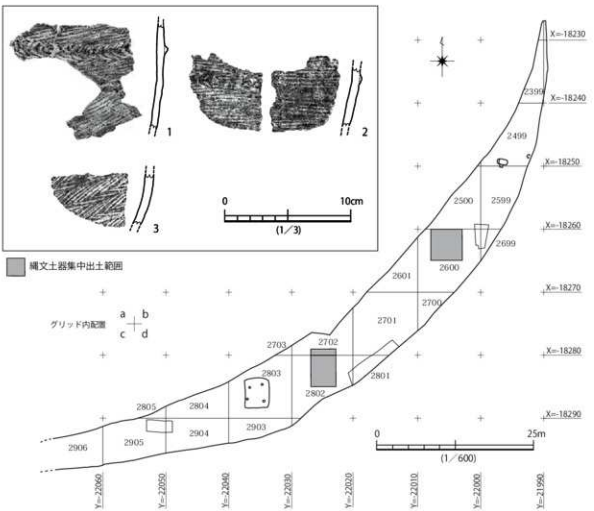
縄文時代前期の土器が出土している。グリッド単位で掘り下げを行ったが、掘り下げても全く出土しないグリッドもあり、遺物は第４図の網掛け部に集中する。とは言え出土量は、２８０２グリッドで１３号ビニール袋が４袋、２６００グリッドで１３号ビニール袋２袋、２７００グリッドで１３号袋１袋程度である。土器が出土し始めるのは３層を３㎝程掘り下げてからである。しかし深度１０㎝を超すと出土しなくなる。竪穴建物等住居の可能性も考えたが平面での土色の違いはなく、土の硬さの違いでも区分出来ず、存在しないと結論づけた。

第２図　土層観察用トレンチ南側壁土層図（S=1/80）

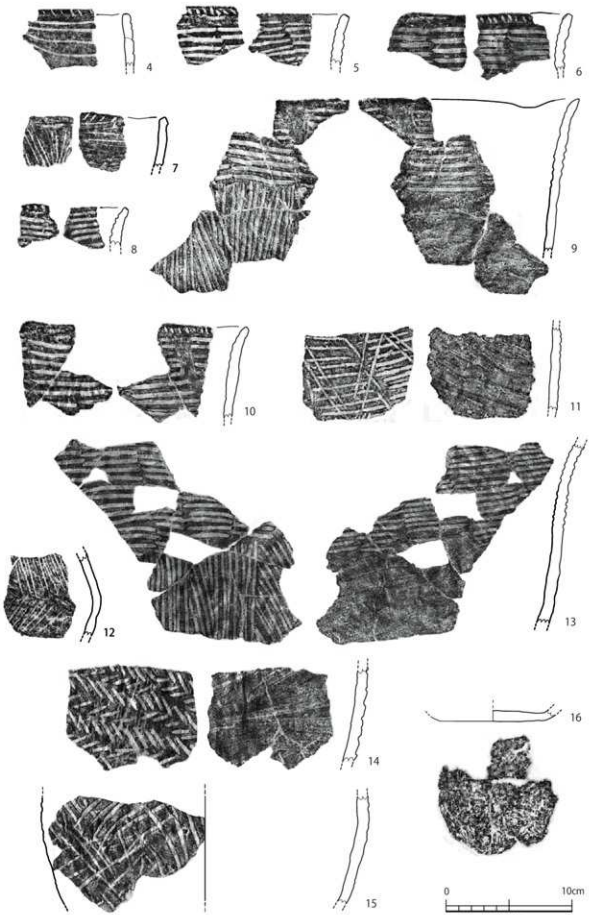


第 3 図　竹ノ後・芭蕉遺跡群遺構配置図 (S=1/500)

１～３は轟式土器で、調査区東側の２５００、２６００、２７００グリッドから出土している。１は、外面に条痕を施し突帯を貼り付ける。突帯には上下方向から刻目を付ける。内面にも浅い条痕が施される。２も内外面に条痕を施し、外面に平べったい突帯を貼り付けているが、中央部分が剥離している。突帯上下方向から刻目を付ける。１・２共に胎土に滑石を含む。３は外面に綾杉状の条痕を施す。４は、外面に沈線を施し、口唇部に刻目を付ける。野口式に相当すると思われる。出土地点は基本土層確認のため掘り下げたトレンチ西壁からである。５～１６は曽畑式土器である。１２は２６００グリッド、１１が試掘坑３トレンチで、それ以外は２８０２グリッドからの出土である。５～１１は口縁部片で、７と９は波状になると思われる。７の口縁部は外に傾き、他は外反する。いずれも内外面に文様が見られ、９を除くと口唇部に刻目が施される。文様構成は７の外面のみが縦に放射線状に沈線を施す。内面は横方向の沈線である。その他は内外面ともに横位の平行沈線文を施す。９の外面は横位の平行沈線文の下に縦位の沈線で文様帯を構成する。内面は横位の平行沈線文で以下は無文となる。１１～１５は胴部片である。１１は横位の水平沈線の上から斜め方向の沈線を施す。１２は屈曲し逆「く」の字状を呈する。斜め方向の沈線が施される。天地は不明であるが黒斑のある部位を下にした。１３は上位に横位の水平沈線を内外面に施し、外面はその下に縦方向の沈線を施す、内面は無文となる。１４は横位に綾杉文を施している。１５は斜め方向に沈線を施すが不規則である。１６は底部片で立ち上がり部分に沈線がわずかに認められる。



第４図　竹ノ後・芭蕉遺跡群出土遺物分布図（S=1/600）及び出土遺物実測図（1）



第５図　竹ノ後・芭蕉遺跡群出土遺物実測図(2)

（２）弥生時代の遺構と遺物

土器棺（第６図）

弥生時代の遺構は、土器棺１基である。調査区の上流側、２４９９グリッドのｄ区に位置する。川側の壁（東壁）に接し、一部は壁の中に入り込む。清掃すると二重に土器が配置されていた。土器の保存状態は悪く土を取り除こうとすると土器の表面も剥がれてしまう状況であった。土器棺は、下棺のみが残存する。二重になっており、内側の土器は底部から胴部上半部までの部分である。外側の土器は、取り上げる時点で細片になってしまい、形を再現することが出来なかったが、胴部部分と思われるが、部分的にしか残っていない。なお掘方の径は５５㎝前後である。検出平面では土器棺の主軸を判断することができなかったので、壁に対して垂直及び平行にセクションをとり実測や断ち割りを行った（ａ－ａ'、ｂ－ｂ'）。その後土器片を取り上げると底部は設定したセクションよりずれた位置にあり、そこで新たにセクションを設定した（ｃ－ｃ'）。すでに多くの土器片を取り上げてしまっていたが、幾つかの個所でレベルをとっていたので、それを参考に復元したものがｃ－ｃ'断面の破線部分である。内側の土器は掘方に沿っていることから考えると、内側の土器の上位にあたる位置から外側の土器が連結していたと想定される。なお土器内部の土は水洗したが副葬品等は確認出来なかった。

図化できたのは内側の土器片（１７）だけである。１７は、底部から胴部上半までの部位である。壺で底部が突出する。外器面にハケメが観察できるが多くはナデにより消されている。

（３）古墳時代の遺構と遺物

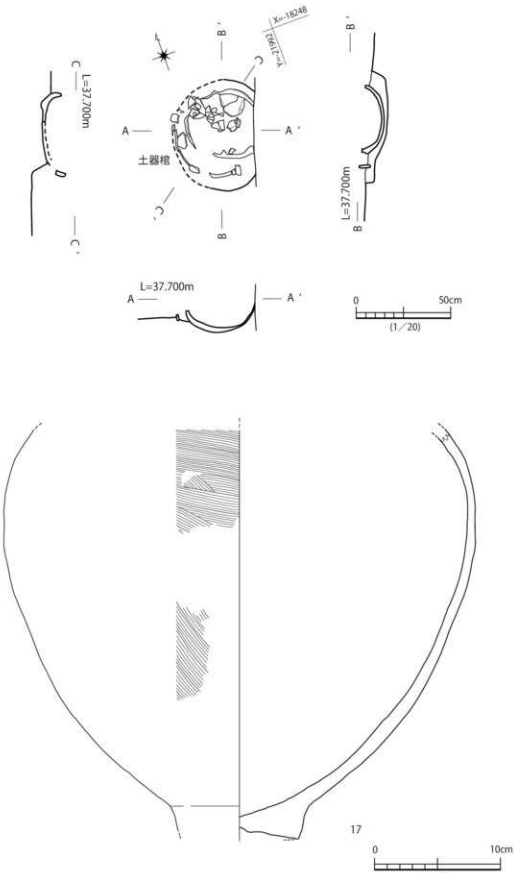
竪穴建物と出土遺物（第７図）

竪穴建物１軒を検出した。２８０３グリッド内に位置する。長軸を南北にとり、グリッド線とほぼ一致する。南北の長さ４．７６ｍ、東西３．７９ｍで長方形を呈す。焼土が北端中央にあることから、カマド付の竪穴建物と判断した。削平を受け深さは５㎝程度であるが硬化面が確認できた。カマドとしたが粘土も残存せずかろうじて床と思われる掘り込みが確認できただけである。その他南西部に焼土が認められたが土に載っているだけであった。柱は４本柱と想定しているが、並びが不自然である。そのため床面を更に掘り下げて確認に努めたが他に柱痕跡は確認出来なかったので、柱位置が歪ではあるがこの４つを柱痕跡とした。削平のため出土遺物は須恵器の坏１点（１８）のみである。遺構清掃時や掘り下げ時に検出した破片で同一個体である。坏身で短い立ち上がりを有す。

（４）近世以降の遺構と遺物

不明土坑（第８図）

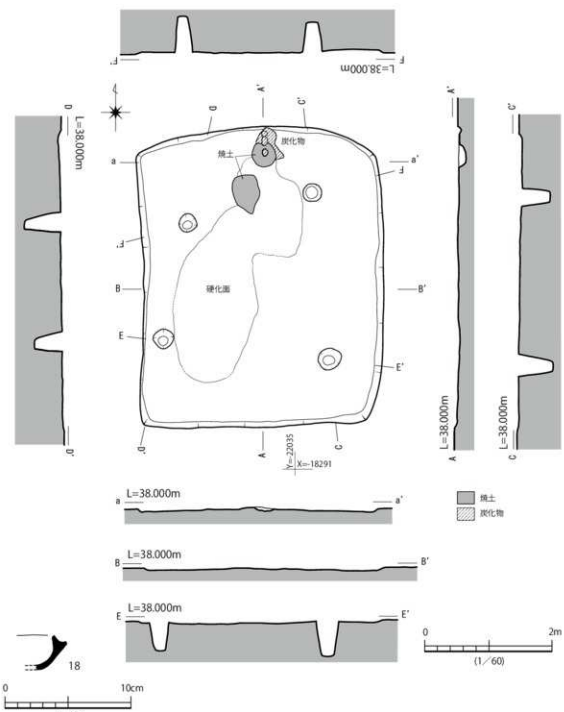
２４１９グリッドｃ区に位置する土坑で、ＳＫ０１とした現代の土坑も含め３つの土坑が重複している。遺物が出土し、全形のわかるＳＫ０２を中心に記述する。ＳＫ０２は、ＳＫ０１により破壊され、ＳＫ０３を破壊している。主軸はほぼ東西で、長さ１．６４ｍ、幅０．８６ｍ、深さは最大で０．５ｍ程である。埋土は灰色の砂で５㎝程掘り下げると石が埋まっていた。中央の１石は４５㎝×３５㎝程の巨石で、他の石は、２０㎝前後のものが主で、小さいものは拳大である。石の配列には規則性は認められない。その隙間に遺物があり、砂で埋まっている状態であった。また床面は硬化しておらず土色の変化で底と判断した。遺構の性格はいずれの土坑も不明である。遺物の出土したＳＫ０２は、遺物を意識的に埋めたようにも考えられず、洪水により砂と一緒に石や遺物が流れ込んだ可能性を考えるが、それでは何故このような土坑が埋め戻されもせず存在していたのか答えることが出来ない。



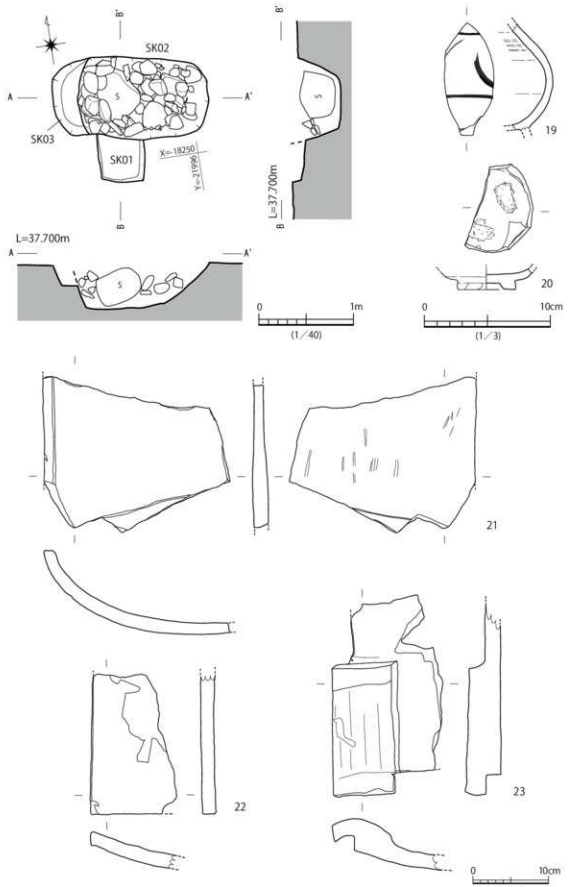
第６図　竹ノ後・芭蕉遺跡群土器棺遺構及び出土遺物実測図

ＳＫ０２の出土遺物（第８図１９～２３）

１９・２０は磁器で、１９は肥前系の徳利、２０は龍泉窯系の青磁で内面に重ね焼きの目跡が残る。２１は不明遺物である。瓦の焼きが甘く赤っぽくなったようなものである。内外面に一条の沈線が確認できる。２２は平瓦、２３は目板桟瓦である。



第７図　竹ノ後・芭蕉遺跡群竪穴建物遺構及び出土遺物実測図



第８図　竹ノ後・芭蕉遺跡群不明土坑遺構及び出土遺物実測図

第４章　総括

今回調査した竹ノ後・芭蕉遺跡群について再度整理してみると、その概要は次のとおりである。遺跡の立地や周辺の環境としては、白川中流域右岸で川が屈曲する個所に位置し、対岸には縄文時代後・晩期の一大集落である上南部遺跡はあるが、同じ右岸の隣接する遺跡は未調査で概要が良くわかっていない状況である。調査成果としては、縄文時代前期の遺物が出土したことの他、弥生時代の土器棺、古墳時代終末期の竪穴建物、近世以降の土坑の検出がある。遺物は少量で、遺構も各時期１基のみではあるが、これまで熊本市により行われてきた調査の成果に新たな知見を加えることが出来た。以下調査成果について詳しく記述し総括とする。

今回の調査区は全体的に削平がひどく、表土剥ぎや清掃時に出土した遺物はごく少数であり、検出した遺構である土器棺も大半は削られ、竪穴建物も床面から５㎝程が残存している状況であった。また２層とした客土は場所により色調が大きく異なり何度かの大きな改変があったことを物語っている。このような状況では各時代の遺跡の広がりは明らかにできない。

縄文時代に関しては、竹ノ後・芭蕉遺跡群ではこれまで後晩期しか知られていなかったが、今回の調査区で前期の遺物が確認された。曽畑式土器はこれまでも竜田陣内遺跡など白川中流域では比較的多く知られており、その時期も初期のものは少なく中期から後期にかけてのものが多いことが指摘されている。今回の調査でも同様であったが、１点だけではあるが野口式土器の出土は注目される。これまで知られていた遺跡は白川中流域とはいえ、ここまで河川に隣接していない。今回の調査区は、出土点数は多くなくキャンプ地的なものだったことが想定される。

弥生時代も土器棺１基だけである。土器の径から考えると小児用の可能性が高い。小児用の埋葬は、近隣の吉原遺跡や上南部遺跡では居住域の中に設けられる傾向がある。竹ノ後・芭蕉遺跡群でも同様であれば隣接して竪穴建物跡があった可能性も考えられる。

古墳時代の遺構も竪穴建物１軒だけであるが、単独で存在することも考えにくいので既に削平されてしまった竪穴建物跡が数軒は存在したものと考えられる。

その他不明遺構とした土坑はその性格を明らかに出来ない。時期的には近世以降と考えられる。

竹ノ後・芭蕉遺跡群としてみた場合、遺跡の北側では熊本大学の昭和３７年の調査を皮切りに計５回の調査が行われている。縄文時代後・晩期が主体で竪穴建物や埋設土器などが検出されている。その他弥生時代から古代の遺物も検出されている。遺構は古墳時代の竪穴建物等も検出されている。また遺跡の中央部では昭和３２年に甕棺墓が検出されている。一方南側での調査例はこれまで遺跡の南西側で熊本市の第１次調査のみで、遺構も時期不明の集石と竪穴状遺構の検出のみで、遺跡の性格はわかっていない。そういう意味では、今回の遺跡は削平がひどく、遺構や遺物の検出は少数ではあったが、今回の調査区の北側には縄文時代前期や弥生時代、古墳時代終末期に人々の営みがあったことが裏付けられた意義は大きい。今回の調査区は、河川に隣接し、これまでの調査地と比べ標高も１０ｍ程低く、遺跡の縁辺部にあたる。おそらくこの北側の後背地に各時代の中心となる場所があったと思われる。

【参考文献】

乙益重隆・東光彦　１９７１「竹ノ後甕棺遺跡」『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会

尾崎潔久　２０１７『上南部遺跡』熊本県文化財調査報告第３２６集　熊本県教育委員会

尾崎潔久　２０１６『吉原遺跡』熊本県文化財調査報告第３２０集　熊本県教育委員会

尾崎潔久　２０１８『小池遺跡・秋永遺跡』熊本県文化財調査報告第３３０集　熊本県教育委員会

富田紘一　１９９６「竹ノ後遺跡」『新熊本市史』史料編第１巻　考古資料　新熊本市史編纂委員会

佐藤仲二　１９９６「竹ノ後甕棺遺跡」『新熊本市史』史料編第１巻　考古資料　新熊本市史編纂委員会

福津暢洋　１９９６「片彦瀬遺跡」『新熊本市史』史料編第１巻　考古資料　新熊本市史編纂委員会

松本健郎　１９９６「中牧鏡石棺」『新熊本市史』史料編第１巻　考古資料　新熊本市史編纂委員会

平井浩一・丸山伸治　１９８８『竜田陣内遺跡』熊本県文化財調査報告第９８集　熊本県教育委員会

大城康雄　１９９９「竹ノ後・芭蕉遺跡群第１次調査区」『熊本市埋蔵文化財年報』第２号　熊本市教育委員会

金田一精　２００３「竹ノ後・芭蕉遺跡群第２次調査区」『熊本市埋蔵文化財年報』第５号　熊本市教育委員会

美濃口雅朗・藤島志孝　２０１４「竹ノ後・芭蕉遺跡群第３次調査」『熊本市埋蔵文化財年報』第１６号　熊本市教育委員会

岩谷史記　２０１４「竹ノ後・芭蕉遺跡群第４次調査」『熊本市埋蔵文化財年報』第１６号　熊本市教育委員会

藤島志孝　２０１５「竹ノ後・芭蕉遺跡群　第５次調査区」『熊本市埋蔵文化財年報』第１７号　熊本市教育委員会

岩谷史記　２０１５「竹ノ後・芭蕉遺跡群』　熊本市の文化財第４１集　熊本市教育委員会

堂込秀人　２００８「曽畑式土器」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション

表1　土器類観察表

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) ※（ ）は復元値 口径	底径	器高	調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	焼成	備考	図版番号
4	1	2600 a 4 層	縄文土器	深鉢	—	—	8.3	貝殻条痕、貼付突帯	貝殻条痕、ナデ	褐 7.5YR4/6	にぶい赤褐 5YR4/4	石英、長石、滑石	良好	轟式土器。	3
	2	2700 a 4 層	縄文土器	鉢	—	—	4.8	貝殻条痕、一部突帯	貝殻条痕	オリーブ黒 5Y3/2	黒褐 2.5Y3/1	石英、長石、雲母、滑石	良	轟式土器。一部突帯が外れている。	
	3	2500 c 4 層	縄文土器	鉢	—	—	4.2	綾杉状沈線	ナデ	黒褐 2.5Y3/1、明黄褐 2.5Y7/6	黒褐 2.5Y3/1	石英、角閃石	良	轟式土器。	
5	4	壁面下 4 層	縄文土器	鉢	—	—	4.3	ナデ、横方向沈線	ナデ	にぶい黄 2.5Y6/4、暗灰黄 2.5Y4/2	明黄褐 2.5Y6/6、褐灰 10YR4/1	石英、長石、雲母	良好	野口式土器。口唇部に斜めに入った刻目。	
	5	2802 4 層	縄文土器	鉢	—	—	3.9	ナデ、横方向沈線	横方向沈線	橙 7.5YR6/6、明黄褐 10YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英、長石	良好	曽根式土器。口唇部に刻目。杭 19・20 間より出土。	
	6	2802 b 4 層	縄文土器	鉢	—	—	4.4	ナデ、横方向沈線	横方向沈線	灰黄褐 10YR4/2	浅黄 2.5Y7/4	石英、長石	良好	曽根式土器。口唇部に凹点文。	
	7	2802 4 層	縄文土器	鉢	—	—	3.8	ナデ、縦方向沈線	ナデ、横方向沈線	にぶい黄 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	長石	良好	曽根式土器。口唇部に刻目。杭 19・20 間より出土。	
	8	2802 b 4 層	縄文土器	鉢	—	—	3.1	ナデ、横方向沈線	ナデ、横方向沈線	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR6/6	石英、長石	良好	曽根式土器。口唇部に刻目。	
	9	2802 b 4 層	縄文土器	深鉢	—	—	12.2	縦・横方向沈線	横方向沈線	明黄褐 10YR6/6	黄褐 10YR5/6	長石	良好	曽根式土器。波状口縁か？口唇部に沈線。	
	10	2802 b 4 層	縄文土器	深鉢	—	—	7.3	ナデ、横方向沈線	ナデ、横方向沈線	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR6/6	石英、長石、輝石、雲母	良好	曽根式土器。口唇端部に刻目。	
	11	試掘坑トレンチ 3	縄文土器	鉢	—	—	6.6	ナデ、横方向沈線の上に斜め方向沈線	条痕	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR6/6	石英、長石	良好	曽根式土器。	
	12	2600 a 4 層	縄文土器	鉢	—	—	6.4	ナデ、斜縄	ナデ	明黄褐 10YR7/6	黄灰 2.5Y4/1	石英、長石、角閃石	良好	曽根式土器。内面及び外面一部に黒斑あり。	
	13	2702 c/d 4 層・2802 4 層・2802 a/b 4 層	縄文土器	深鉢	—	—	14.2	横方向（上部）・縦方向（下部）沈線	横方向沈線	褐 7.5YR4/4	明黄褐 10YR6/6	石英、長石	良好	曽根式土器。グリッドの杭 18・19・20 間からも出土。	
	14	2702 d 4 層	縄文土器	鉢	—	—	7.5	綾杉状沈線	強いナデ	橙 7.5YR6/8	明黄褐 10YR6/6	石英、長石	良好	曽根式土器。歪みあり。	
	15	2702 d 4 層・2802 b 4 層	縄文土器	深鉢	—	—	8.6	斜め方向沈線	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英、長石	良好	曽根式土器。底部のみ。	
	16	2802 4 層・2802 a 2 層 /4 層	縄文土器	鉢	—	(8.6)	1.0	ナデ、一部沈線	ナデ	黄褐 10YR5/6	明黄褐 10YR7/6	石英、長石、角閃石	良好	杭 19・20 間より出土。	
6	17	2499 d	弥生土器	土器棺	—	—	32.0	ハケメ後ナデ	ナデ	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR6/6	石英、長石、角閃石、雲母	良	やや上げ底か。調整は内外面ともに磨滅している。	

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) ※（ ）は復元値			調整・文様		色調		胎土	焼成	備考	図版番号
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
7	18	SI01 清掃	須恵器	坏	—	—	2.7	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3	石英、長石	良好		3
8	19	SK02 P5	磁器	徳利	—	—	8.5	施釉		灰白 10Y7/1	灰白 5Y7/1		良好	肥前系波佐見焼。染付。	4
	20	SK02 P5	磁器	椀	—	(4.6)	1.7	施釉、（高台）削り出し	施釉、重ね焼き跡	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1		良好	緑泉窯系青磁。一部施釉なし。	

表2　瓦観察表

挿図番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			調整・文様		色調		胎土	焼成	備考	図版番号
					全長	全幅	厚み	外面	内面	外面	内面				
8	21	SK02 P2・6・7・8	不明	不明	24.5	18.7	1.9	ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/8	橙 7.5YR6/6	石英、長石、角閃石、雲母、砂粒	良	内外面に一条の沈線。	4
	22	SK02 99	瓦	平瓦	18.4	11.8	1.8	ナデ、ケズリ後ナデ	ナデ	オリーブ 7.5Y3/2	灰オリーブ 7.5Y6/2、灰 7.5Y5/1	石英、長石、雲母	良		
	23	SK02 P10・11・12	瓦	目板桟瓦	25.3	14.6	2.1～4.2	ナデ	ナデ	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y5/1	長石	良		

トレンチ土層断面（北から）

土器棺検出状況（北から）

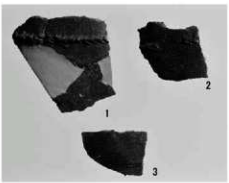
土器棺出土状況（南東から）

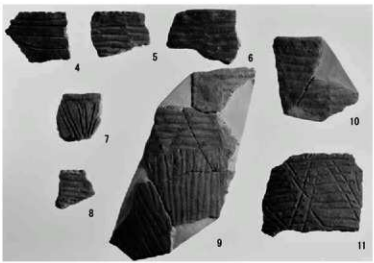
図版 2

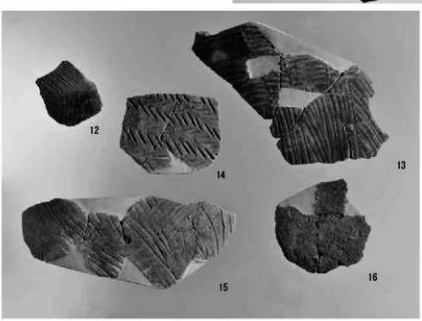
SI01 竪穴建物完掘状況（東から）

SK02 土坑検出状況（東から）

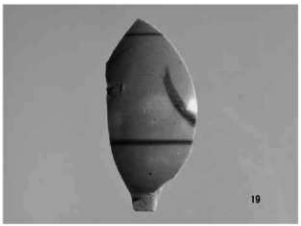
SK02 土坑検出状況（北から）

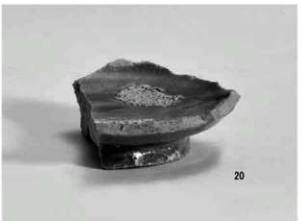


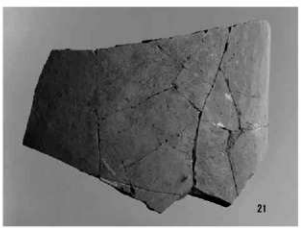




竹ノ後・芭蕉遺跡群出土遺物（1 ～ 18）







竹ノ後・芭蕉遺跡群出土遺物（19 ～ 23）

Ⅲ 熊本広域大水害復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査について

第１章　施工箇所内の文化財の概要と予備調査について
第２章　文化財部局の取組
第３章　未調査の埋蔵文化財個所の対応について
第４章　総括

第１章　施工箇所内の文化財の概要と予備調査について

第１節　総括報告の目的

今回の調査を総括する目的は、次の４つである。① 今後隣接地で行われる予備調査の参考となるよう土層を提示する（第１章）。② 過去に同様な被害を受けた他県の発掘調査迅速化の取組が大変参考になったことから、熊本県教育委員会が行った発掘調査迅速化の取組についても記載することとした（第２章）。③ 工事立会結果の報告（第３章）。④ 未調査個所を提示し、将来的な開発事業に備える（第３章）。

第２節　熊本広域大水害に伴う災害復旧工事個所について（第１図、表１）

平成 24 年７月 12 日に発生した熊本広域大水害は、阿蘇外輪山麓や白川水系を中心とした河川流域で甚大な被害をもたらした。その結果河川の拡幅や河床掘削など様々な復旧事業が期間を限って行われることになった。事業は、浸水被害防止のための河川工事と山地の砂防事業が主となる。

浸水被害防止のための工事は、河川拡幅、河床掘削、流路の変更、遊水池の設置、輪中堤などの工事が行われ、白川水系河川を中心に、大野川水系の玉来川、菊池川水系の矢護川で施工されている。白川下流の熊本市工区（第２・６～２０図、表１　Ⅰ－１～１６）では河川拡幅を主とした工事が行われ、龍田陣内４丁目地内（第９図、表１　Ⅰ－５）では大規模な流路の変更が行われた。上流の菊池郡菊陽町から菊池郡大津町までの菊池工区（第３図、表１　Ⅱ－１～５）は河床掘削や護岸工が主体で、更に上流の阿蘇工区（第４図）では他に遊水池（Ⅲ－１・２）や輪中堤（Ⅲ－３～６）の工事が実施された。当初輪中堤は１４カ所で計画されていたが、最終的には３カ所で実施され、残りの個所は道路や宅地の嵩上げに変更になっている。

一方砂防事業（第４図、表１①～⑬）は、阿蘇地域を中心とした地域で実施され、東側の外輪山斜面に集中している。

第３節　予備調査実施個所について

河川事業で２８カ所、砂防事業で１３カ所が遺跡に該当または隣接していた。施工区に文化財を含む或いは隣接する個所は表１のとおりである。

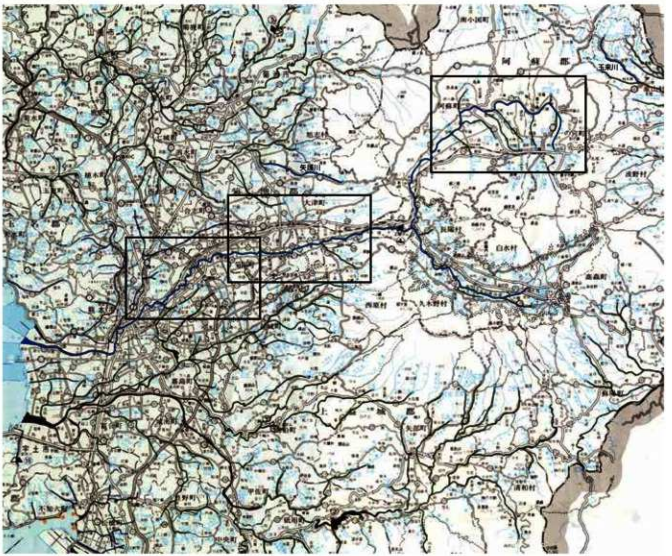
河川事業は、熊本市工区の遺跡のない１カ所（熊本市北区龍田陣内４丁目地内）も隣接した個所には竜田陣内遺跡群が存在し、工事内容も大規模な流路変更であることからすべてで試掘・確認調査が必要と判断した。その上流の菊池工区では、河床の掘削が主で護岸工も既存の復旧や１m内の拡幅にとどまっており、遺跡への影響は軽微と判断し、比較的規模の大きい河道の拡幅が実施される菊池郡菊陽町曲手（第２１図）、菊池郡大津町外牧（第２２図）の２カ所のみを確認調査が必要と判断した。その他この地域は江戸期に水田開発のため、堰や井手などの遺構が残存するので、この遺構についても工事の影響を受けないか注意をはらったが、幸いにも影響は軽微であった。

更に上流の阿蘇郡南阿蘇村河陰地内の河川工事（第１図、表１　Ⅲ－７）は、祇園遺跡と接する個所があったが、護岸修復工事が主で拡幅も狭小であり確認調査は実施していない。試掘・確認調査を行った事業は、阿蘇市西小園の宮原川の付替え事業（第２５図、表１　Ⅲ－６）、大規模な掘削を伴う遊水池（第２３・２４図、表１　Ⅲ－１・２）、輪中堤である。輪中堤の主な工事は堤防等の嵩上げであり、大規模な掘削を伴わないため、阿蘇市黒流地内の調整池で掘削される個所（第２７図、表１　Ⅲ－４）や阿蘇市狩尾の樋門設置等により大規模に掘削される個所（第２６図、表１　Ⅲ－３）で試掘・確認調査を行った。

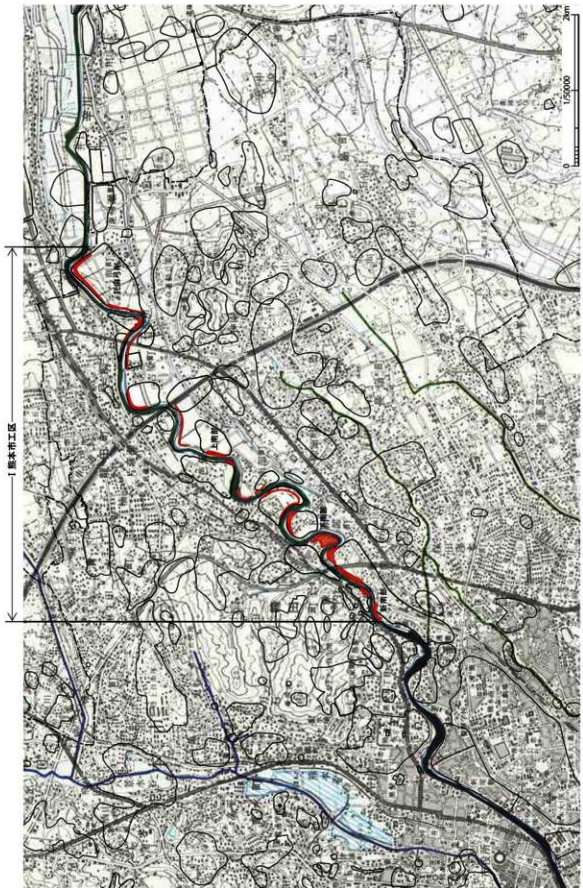
その他、菊池川水系の矢護川（大津町）は、護岸工事が主で、１カ所で遺跡にかかっていたが、掘削箇所は既に造成された範囲内におさまるため確認調査は不要とした。また大野川水系玉来川（産山村）も護岸の

修復が主で、掘削幅も狭小で遺跡もかかっていないため、試掘調査は行っていない。最終的に試掘・確認調査を実施した工事個所は、熊本市工区で１６カ所、菊池工区で２カ所、阿蘇工区で５カ所である。

砂防関係では１３カ所が遺跡に該当または隣接していた。渓流地で、いくつかには既存の砂防堰堤が設置されていた。遺跡の範囲内ではあっても谷部で遺構が存在した可能性は低い。実際に現地に行ってみると崩落し、遺跡は既に消滅していると考えられる個所や崩落土に埋まり調査が不可能なところばかりであった。工事は、土砂の撤去と砂防堰堤の新設と水路工である。堰堤本体や流路工より工事用や管理用道路が危惧され、近田遺跡（第２９図、表１⑦野中川３）で確認調査を行なった。また砂防災害関連事業ではあるが河道拡幅が実施される個所（第２８図、表１①宮川）で試掘調査を実施した。その他、表１⑨の北坂梨川工区には、坂梨家祖先墓があり、改葬される際に、墓の基数確認及び写真撮影などの記録を行った。

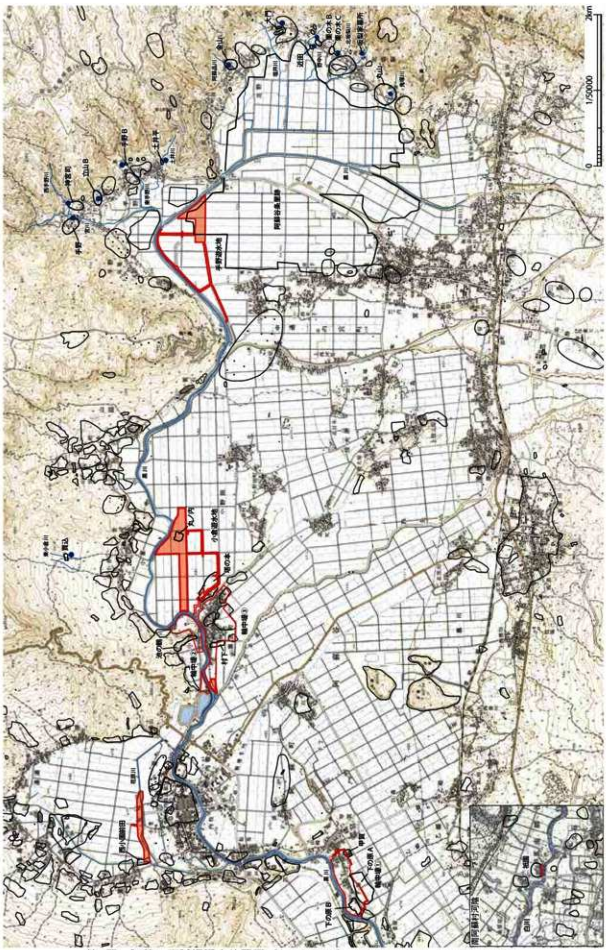


第1図　白川全体位置図（S=1/350,000）



第2図　熊本市工区試掘調査位置図（S=1/50000）（赤：河川施工個所）

第3図　菊池工区試掘調査位置図（S=1/50000）（赤：河川施工個所）



第4図　阿蘇工区試掘調査位置図（S=1/50000）（赤：河川施工個所，青：砂防施工個所）

表１　熊本広域大水害に伴う災害復旧工事個所一覧

河川工事

番号	工事施工箇所	工事内容	遺跡名	試掘・確認調査の有無	予備調査後の措置	備　考
Ⅰ	熊本市区					
1	熊本市中央区黒髪７丁目地内	河道拡幅他	亀田口遺跡	○	工事立会	
2	熊本市東区新南部１丁目地内	河道拡幅他	新南部遺跡群	○	調査（11 次）	熊本県文化財調査報告　第３２０集
3	熊本市東区新南部５丁目地内	河道拡幅他	新南部遺跡群	○	調査（10 次）	熊本県文化財調査報告　第３２０集
4	熊本市東区下南部５丁目地内	河道拡幅他	新南部遺跡群	○	調査（12 次）	熊本県文化財調査報告　第３２９集
5	熊本市北区龍田陣内４丁目地内	流路変更	亀田陣内遺跡群近隣	○	着工可	
6	熊本市東区下南部２丁目地内	河道拡幅他	下南部遺跡	○	調査	熊本県文化財調査報告　第３２５集
7	熊本市北区龍田１丁目地内	河道拡幅他	牧鶴遺跡群	○	工事立会	
8	熊本市東区上南部１丁目地内	河道拡幅他	王田遺跡群	○	慎重工事	
9	熊本市北区龍田７丁目地内	河道拡幅他	竹ノ後・芭蕉遺跡群	○	調査	今回報告
10	熊本市東区上南部１丁目地内	河道拡幅他	上南部遺跡	○	調査	熊本県文化財調査報告　第３２６集
11	熊本市東区上南部４丁目地内	河道拡幅他	北上遺跡群	○	慎重工事	
12	熊本市東区吉原町地内	河道拡幅他	吉原遺跡	○	調査	熊本県文化財調査報告　第３２０集
13	熊本市東区中江町地内	河道拡幅他	中江遺跡	○	調査	熊本県文化財調査報告　第３２１集
14	熊本市北区龍田弓削町	河道拡幅他	弓削前畑遺跡	○	調査	今回報告
15	熊本市北区龍田町弓削地内	河道拡幅他	法王鶴遺跡	○	慎重工事	
16	熊本市東区弓削町地内	河道拡幅他	託麻弓削遺跡群	○	調査	熊本県文化財調査報告　第３２１・３３１集
Ⅱ	菊池工区					
1	菊陽町辛川	護岸工他	下鶴遺跡		慎重工事	
2	菊陽町津久礼	護岸工他	妙見遺跡		慎重工事	
3	菊陽町曲手	河道拡幅他	西鶴遺跡・居屋敷遺跡	○	調査	河川災害復旧等関連緊急事業
4	菊陽町久保田	護岸工	役給遺跡		慎重工事	
5	大津町外牧	河道拡幅他	内牧Ｂ遺跡	○	慎重工事	
Ⅲ	阿蘇工区					
1	阿蘇市小倉	遊水池	丸ノ内遺跡・塔の本遺跡	○	慎重工事	
2	阿蘇市手野	遊水池	阿蘇谷条里跡	○	慎重工事	
3	阿蘇市狩尾	輪中堤	下の原Ａ遺跡・Ｂ遺跡、甲賀遺跡	○	慎重工事	
4	阿蘇市黒流町	輪中堤	村下遺跡	○	慎重工事	遺跡外の調整池を試掘
5	阿蘇市小池	輪中堤	池の鶴遺跡隣接		着工可	
6	阿蘇市西小園	河川付替	西小園前田遺跡	○	慎重工事	
7	南阿蘇村河陽	護岸嵩上等	祇園遺跡		慎重工事	
Ⅳ	その他工区					
1	矢護川（菊池市旭志）	護岸工他	四郎丸遺跡		慎重工事	
2	玉来川（産山村）	護岸工他	該当なし		着工可	

砂防事業

番号	事業名（渓流名）	遺跡名	試掘・確認調査の有無	予備調査後の措置	備　考
①	宮川	手野遺跡	○	慎重工事	手野遺跡対岸を試掘調査
②	宮川３	立山Ｂ遺跡隣接		着工可	
③	東手野川２	手野Ｂ遺跡他		慎重工事	
④	土井川	土井平遺跡		慎重工事	
⑤	阿蘇品川	流路に金山遺跡		慎重工事	
⑥	塩井川１	流路に大門遺跡		慎重工事	
⑦	野中川３	管理用道路部に近田遺跡	○	慎重工事	
⑧	北坂梨川１	流路に柿の木く遺跡		慎重工事	
⑨	北坂梨川２・３	坂梨家祖先墓		調査	改葬時に簡易調査
⑩	鬼塚川	流路に丸山遺跡		慎重工事	
⑪	西手野川３	流路に神宮司遺跡		慎重工事	
⑫	野中川	栗の木Ｂ遺跡隣接		着工可	
⑬	東小倉川	流路に貫込遺跡		慎重工事	

第４節　試掘・確認調査の実施と概要について

試掘・確認調査個所は第６～２９図のとおりである。個々の土層については、頁数の関係もあり、調査を実施した個所は報告書に掲載されている基本土層の提示にとどめ、今後近接地で予備調査を実施する際の参考となりそうな個所の土層図のみを掲載した。

第５図に一般的な堆積例として石の本遺跡の基本土層（Ⅲ層は欠如）と河川沿いの例として託麻弓削遺跡群の土層を掲載している。河川沿いの土層堆積は、何度かの氾濫により堆積した土層が主で、数メートル離れるとその様相が違うことが一般的に言われている。しかし下流の新南部遺跡群から上流の託麻弓削遺跡群までの予備調査や発掘調査の土層をみると、アカホヤの２次堆積層より上の層はそれ程大きく違わない。客土や攪乱土を除けば、表土があり、Ⅱ層が黒褐色土（中世・古代の遺物を含む）、Ⅲ層が暗褐色土（弥生時代の遺物を含む、暫移層）である。ここまでの土層堆積は、河川から離れた場所とほとんど変わらない。その下位のⅣ層は、一般的にはアカホヤ火山灰を含む再堆積土で、色調は地点で若干の違いはあるが、黄褐色から褐色である。河川沿いもⅣ層の色調は黄褐色が基本であるが、砂質である。また肉眼観察ではあるが、ガラス質を含んでいないようである。この層で遺構を確認する場合が多く、弥生時代もしくは縄文時代前期から晩期の遺物を含む。このⅣ層で通常堆積との違いがあらわれ、この下位の層からは違いが顕著となってきて、数メートル離れるだけで堆積状況が違う場合もある。

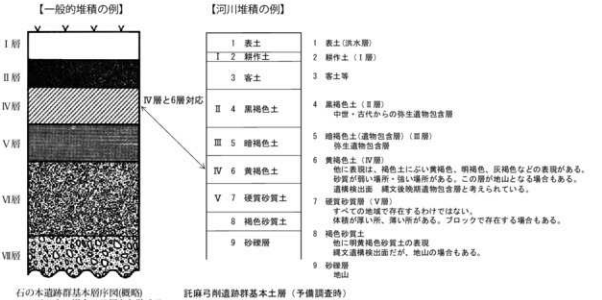
一般的な土層堆積では、Ⅴ層は黒褐色粘質土で通称クロニガと呼ばれ（縄文時代早期の遺物を含む）、Ⅵ層は暗褐色土で通称シロニガと呼ばれる。一方河川沿いの堆積は様々で、黄褐色から暫移的ににぶい黄褐色、灰黄褐色、褐灰色に色調が変化し、土の性質も砂質土から完全な砂になる場合や、中途で礫層になる場合などがある。層の中途に非常に硬くなった砂の層が見られることも多い。これを硬質砂層と呼んでいたが、厚さが１m以上あり、一つの層をなす場合があるかと思えば、１m程の長さで厚さも２０㎝程度でブロック状に含まれる場合など様々である。硬質砂層は、何らかの作用で固まったものだろうが、原因はよくわかっていない。

河川沿いのⅤ層以下はほとんどが無遺物層であるが、託麻弓削遺跡群５区では、ここでⅣ層とした黄褐色土の下に５０㎝程の砂層（ブロック状に硬質砂層あり）を剥いだ後に縄文時代後期の遺物や土坑を検出している（坂井田　２０１８）。やや下流にはなるが、熊本大学埋蔵文化財調査センターが２０１４年度に行った熊本大学黒髪南地区の調査では褐色砂質土より下位層で、１m以上の厚さの硬質砂層の下から土壙墓が検出され人骨が出土している（木下他　２０１６）。今回の熊本広域大水害に伴う調査では、弥生時代中期以降の遺構・遺物が主で、次いで縄文時代後期から晩期の遺構・遺物が多い。縄文時代中期以前となると少なくなり、竹ノ後・芭蕉遺跡群で、Ⅳ層の下位から縄文時代前期の土器が出土しているくらいである。

このことから白川に隣接した個所は、鬼界カルデラ噴火時は、完全に陸地化していない可能性があり、その後縄文時代前期頃から人々の活動の痕跡が認められ、後期になるとこの地にも集落が形成され始める。しかしその間も白川は氾濫を繰り返し、土砂堆積は場所によっては数メートルの堆積となり、その中には何らかの作用により硬くしまった砂の層も形成される。縄文時代後期後半から晩期前半にかけての遺物は多くの遺跡で確認でき、間層を挟まないことから、この時期以降、大規模な氾濫が少なくなっていくのかも知れない。しかしここに述べたことは仮説にすぎず、今後検証が必要である。洪水は、過去に何度かあったはずであるが、試掘・確認調査では表土のすぐ下にある昭和２８年の熊本大水害の痕跡と思われる砂の堆積はいくつかの地点で確認できるものの、それ以外の過去の洪水痕跡は確認できない。同じく竪穴建物等の埋土の堆積状況にも、砂の堆積など洪水の痕跡は認められない。微細な事象を見逃しているのかも知れないが、動植物遺体等の影響など、何らかの要因で残りにくいのかも知れない。

また、新南部遺跡群で甕棺墓群を検出した１１次調査区の基本土層は、河川の堆積ではなく通常のもので、アカホヤ火山灰の２次堆積を含む層が確認できる（宮本　２０１６）。白川に隣接した立地であるが、今回の水害でも浸水していない個所である。但し、そのような場所を意図して墓域を選定したかどうかは、慎重に判断する必要がある。例えば、託麻弓削遺跡群の今回の調査地の後背地には甕棺墓群が存在しているが、この個所は今回も、また昭和２８年６月２６日の熊本大水害の際も被害を受けているからである。

一方阿蘇地域については、土層の理解が不十分である。阿蘇谷の西側では遺跡の発掘調査も以前から行われているが、東側では古墳は多く分布しているものの集落遺跡の調査は皆無である。今回の試掘・確認調査の多くは、表土の下は粘質土で、更に下層では草と思われる植物遺体が混じり、水が湧きだしてくる状態である。川の近くと言うこともあるのかも知れないが以前は湿地帯だったことが推察される。現在のような水田としての利用は建徳３年（１３７２）の「阿蘇社領宮地居取田検見馬上帳」には、栗生里という地名があり、これが今回の手野遊水付近にあたるようである（日野　１９７７）。しかし今回の確認調査では、遺物も皆無で時期も不明であった。



Ⅰ層（表土）耕作土。

Ⅱ層（黒褐色土）クロボク土。
中・近世の遺物を含む。

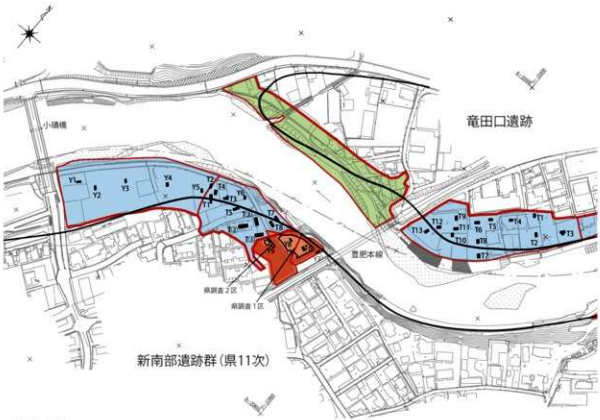
Ⅳ層（黄褐色土）アカホヤ火山灰を含む土。二次堆積土。
遺構確認面。

Ⅴ層（黒褐色粘質土）粘性に富んだ締まりのある土。
縄文早期の文化層を含む。

Ⅵ層（暗褐色土）粘性のある締まりのある土。
姶良Tn火山灰層を含む層が確認。

Ⅶ層（赤色粘質土）Ⅴ層よりさらに締まりのある粘質土。

第5図　土層堆積例



【図版凡例】
- 掘削予定範囲
- 調査箇所
- 確認調査済ケ所
- 工事立会済ケ所
- 未調査ケ所
- 発掘調査範囲

【竜田口】

基本土層図

1：表土
2：客土
3：明褐色砂質土層
4：黄色砂層
5：砂質土層　ややしまる
6：砂質土層　よくしまる

No.１トレンチ

15cm	1
20cm	2
41cm	3
14cm	4
55cm	5
68cm	6

600×200

【新南部（県11次）】

NoY2 トレンチ

180cm	客土
53cm	明茶色砂
13cm	黒茶砂質層
44cm	茶褐色砂質土
10cm	黒茶砂質層

No1 トレンチ

60cm	客土（砂・砂礫・バラス）
40cm	黒褐色砂質土
30cm	暗褐色土
60cm	茶色砂質土（礫混じり）
40cm	褐色粘質土
30cm	白褐色土（ニガシロ?）

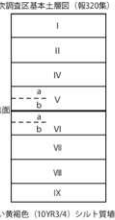
NoY7トレンチ

40cm	客土　耕作土
25cm	茶白色層
55cm	黒褐色土
49cm	茶褐色土
41cm	茶褐色土

No6トレンチ

60cm	客土（耕作土）
20cm	黒褐色土
20cm	明褐色土（アカホヤ?）
60cm	黒褐色土
20cm	白褐色土（ニガ）
30cm以上	ニガシロ?

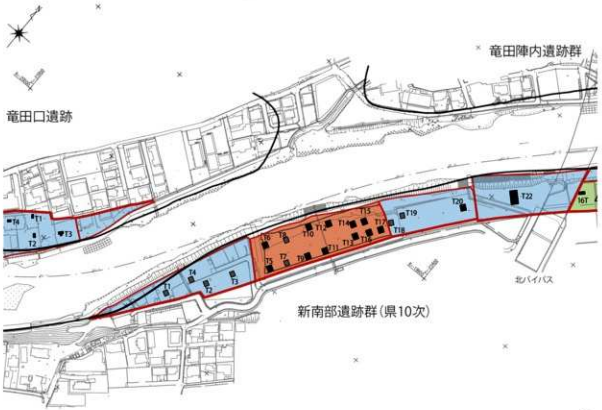
新南部11次調査区基本土層図（報320集）

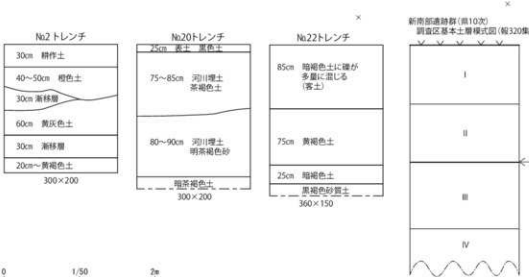


Ⅰ：にぶい黄褐色（10YR3/4）シルト質埴壌土
現代造成土
Ⅱ：黒褐色（10YR2/2）シルト質埴壌土
近世～近代期包含層
Ⅳ：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）河川堆積層
（遺物伴わない）
Ⅴa：黒褐色（10YR2/2）シルト質埴壌土
Ⅴb：黒褐色（10YR2/3）シルト質埴壌土
Ⅴ層とⅥ層の漸移層
Ⅵa：暗褐色（10YR3/3）シルト質埴壌土
いわゆるアカホヤ２次堆積層
Ⅵb：暗褐色（10YR3/3）シルト質埴壌土
縄文早期および晩期遺物包含層
Ⅶ：黒褐色（10YR2/3）シルト質埴壌土
無遺物層
Ⅷ：褐色（10YR4/4）礫埴壌土
無遺物層
Ⅸ：オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質埴壌土
無遺物層

0　1/50　2m

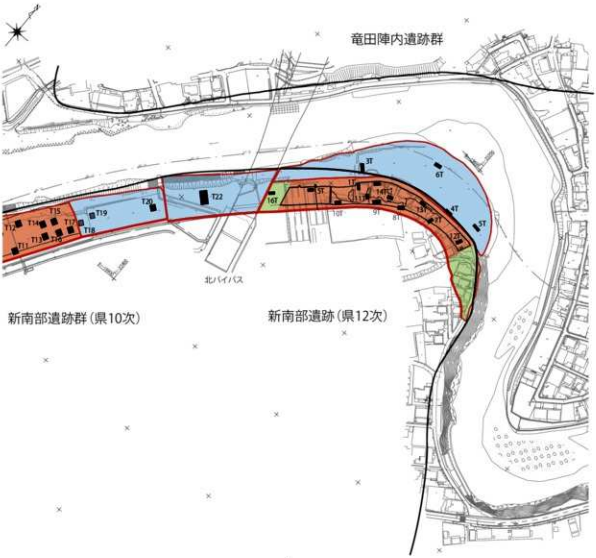
第6図　竜田口遺跡・新南部遺跡群（県11次）トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）

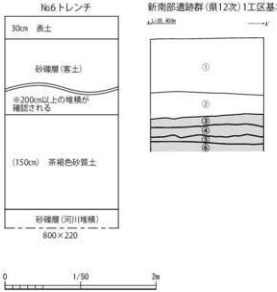




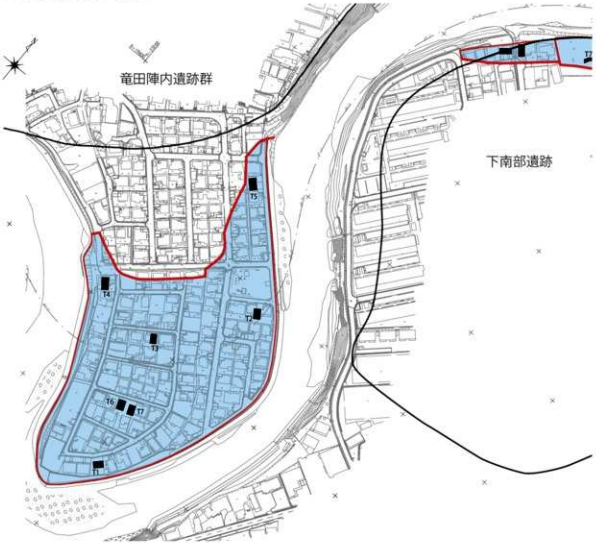
I 層　褐灰色砂質土（7.5YR4/1）白川の洪水層。しまりは非常に弱い。地点によって20cm～100cmを測る。
II 層　暗褐土（10YR3/3）旧耕作土。砂質土であるがしまりは強い。地点によって20cm～50cmを測る。
III 層　暗褐砂質土（10YR3/4）土色は II に近いが、土質は粒子が細かくサラサラした砂質土である。
主に弥生時代の遺物が含まれる。地点によっては20cm～30cmを測る。
IV 層　黄褐色土（10YR5/6）粘質が弱く乾燥するサラサラした土質である。
この層には縄文時代の遺物が含まれる。

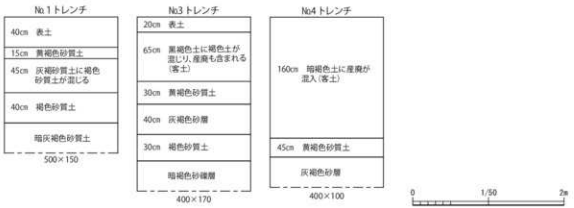
第7図　新南部遺跡群（県10次）トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）



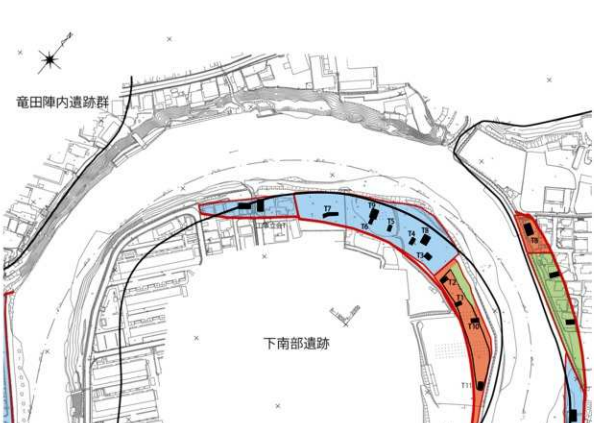


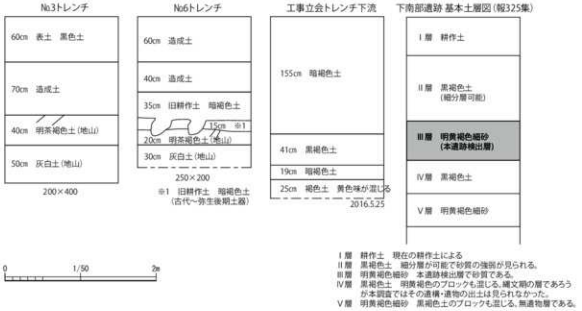
第8図　新南部遺跡群（県12次）トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）



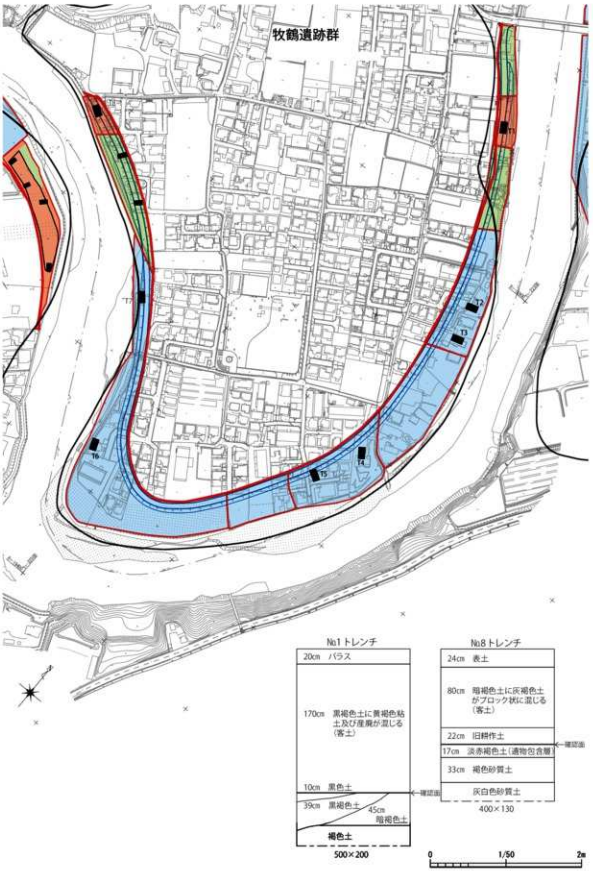


第9図　竜田陣内遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）

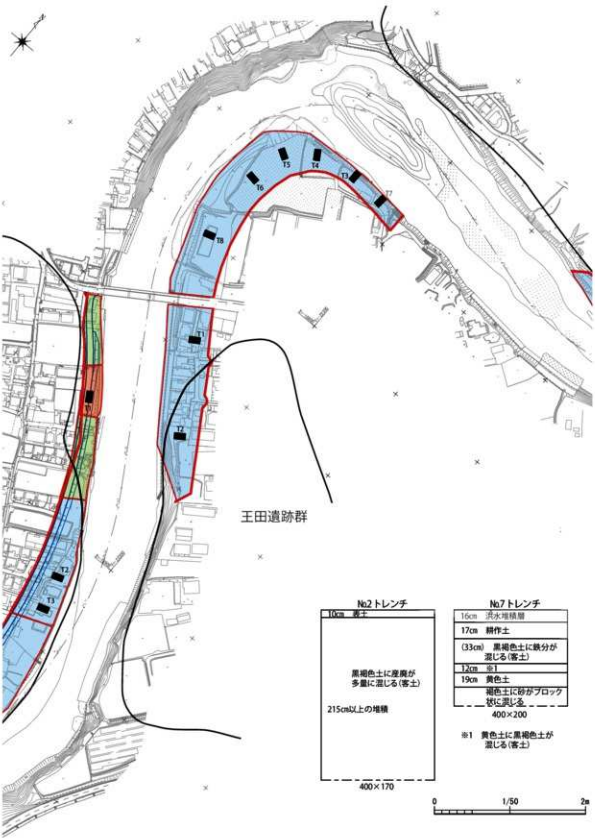




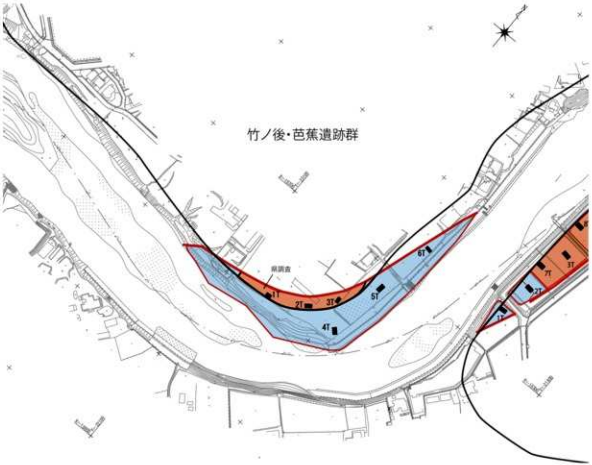
第10図　下南部遺跡 トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）

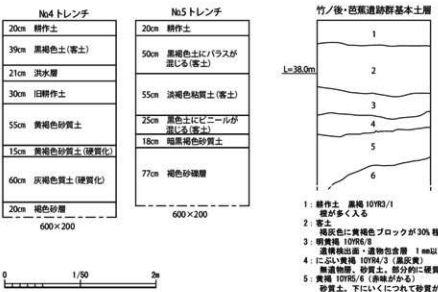


第11図　牧鶴遺跡群 トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）

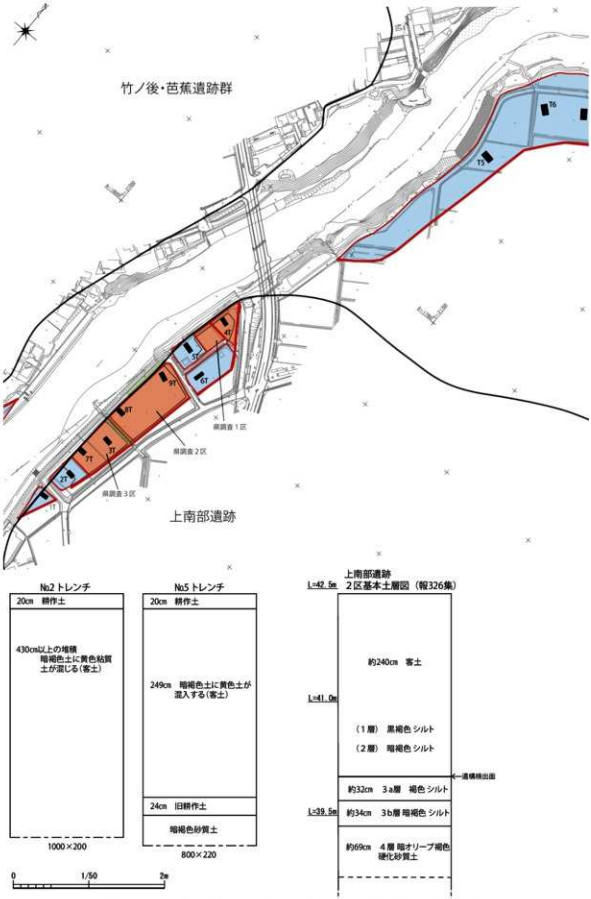


第12図　王田遺跡群 トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）

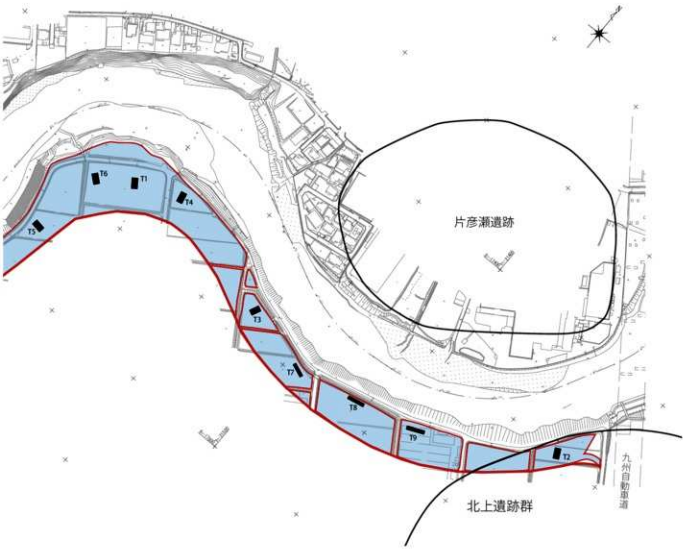




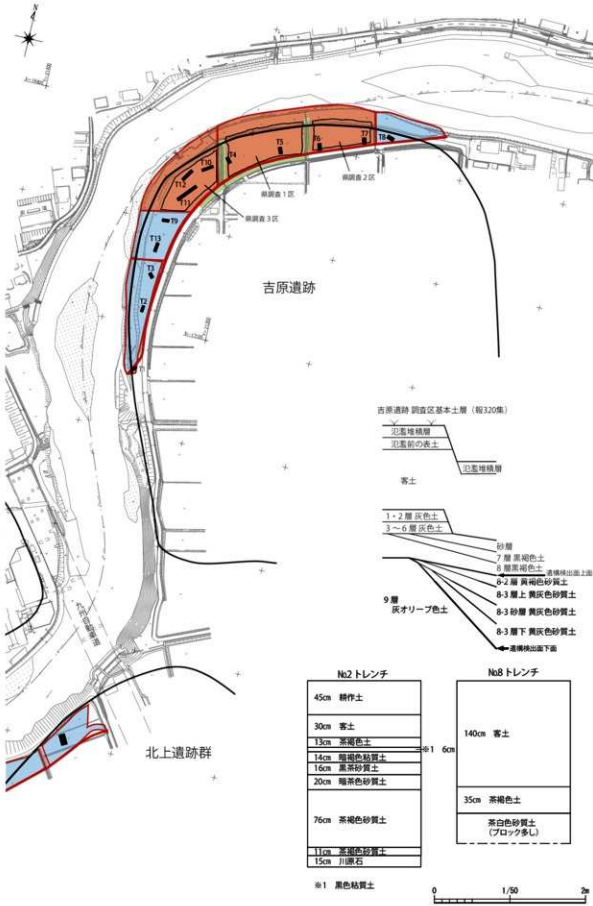
第13図　竹ノ後・芭蕉遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）



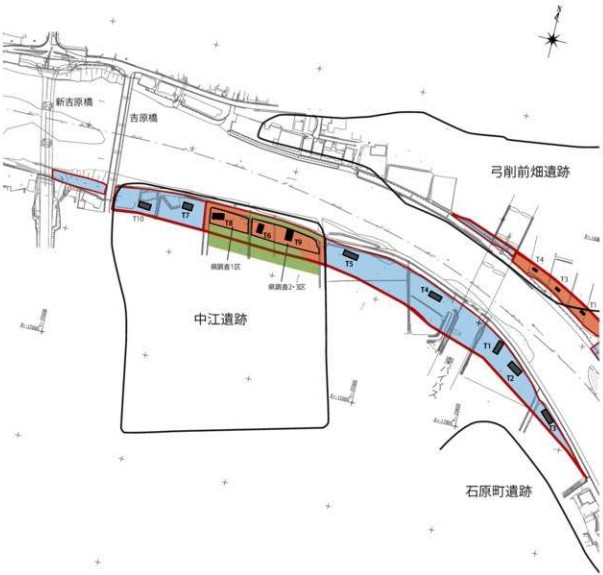
第14図　上南部遺跡 トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）



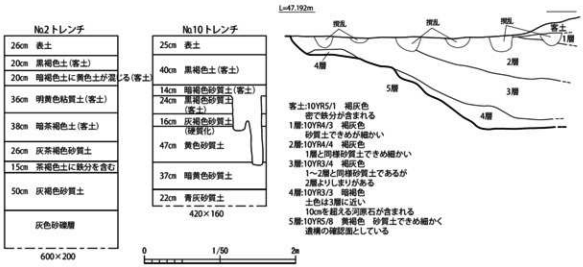
第15図　北上遺跡群 トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）



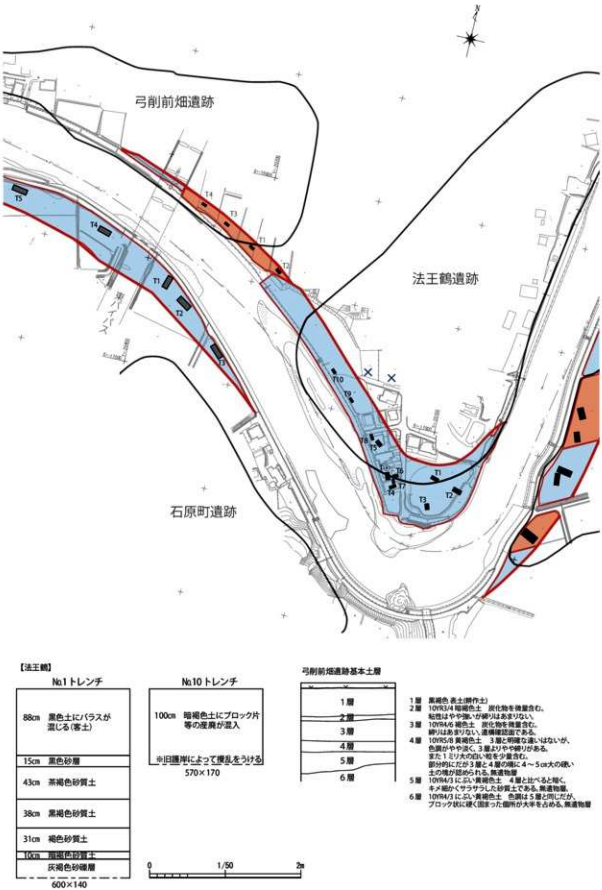
第16図　吉原遺跡トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）



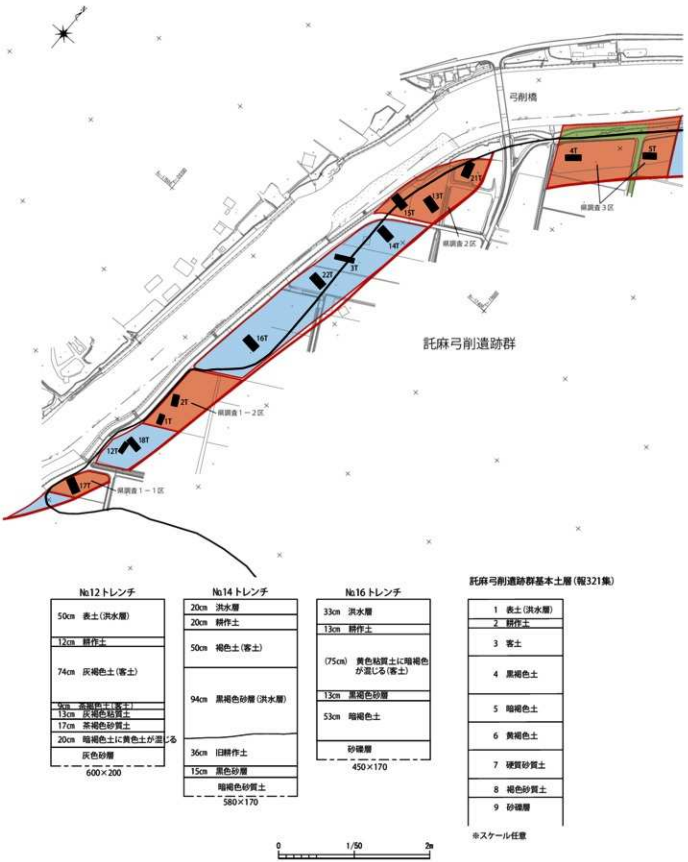
中江遺跡1区土層断面図（報321集）



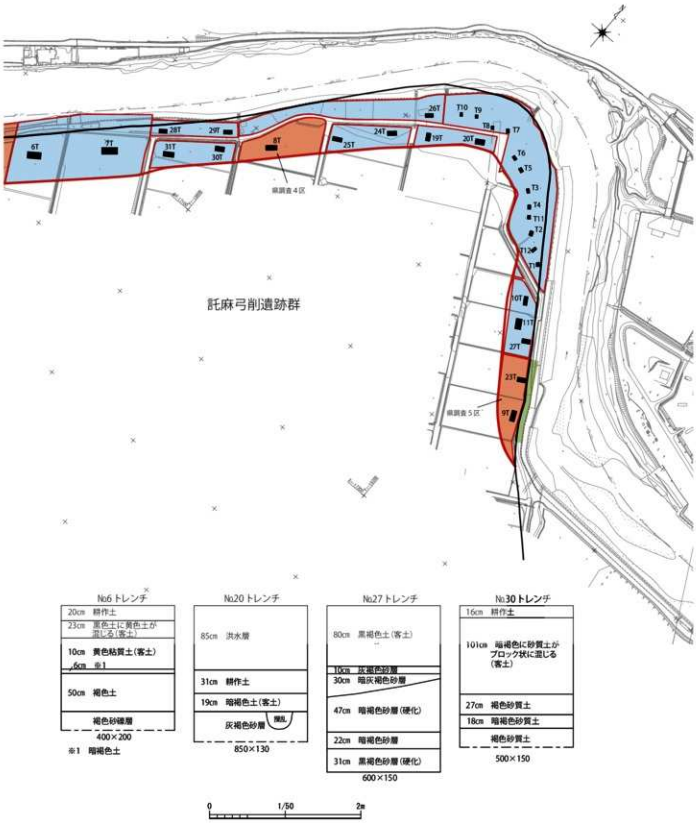
第17図　中江遺跡トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）



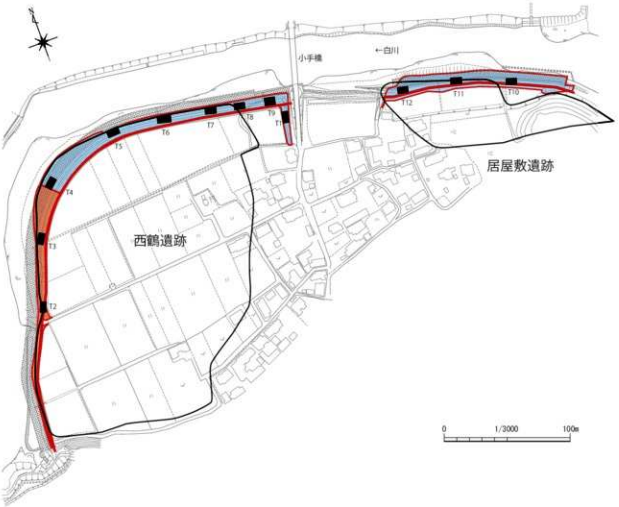
第18図　弓削前畑遺跡・法王鶴遺跡 トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図（S=1/50）



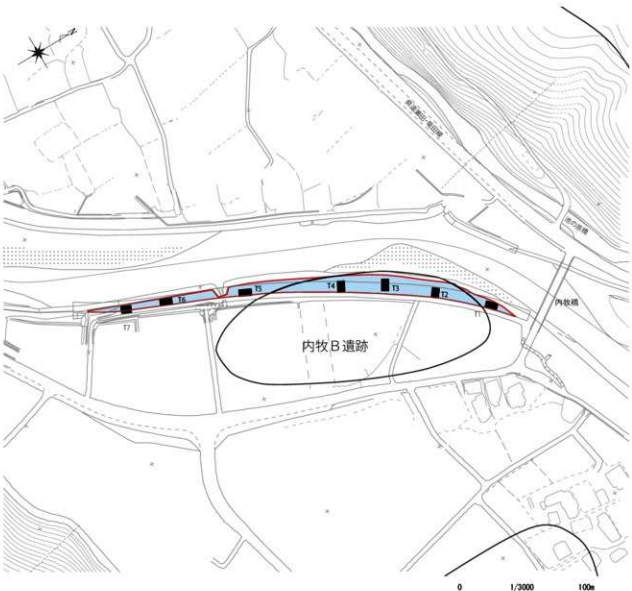
第19図　託麻弓削遺跡群 トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図 1（S=1/50）

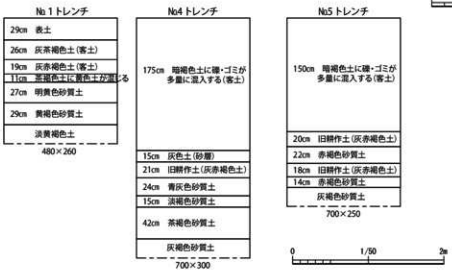


第20図　託麻弓削遺跡群トレンチ位置図（縮尺任意）・土層断面図２（S=1/50）

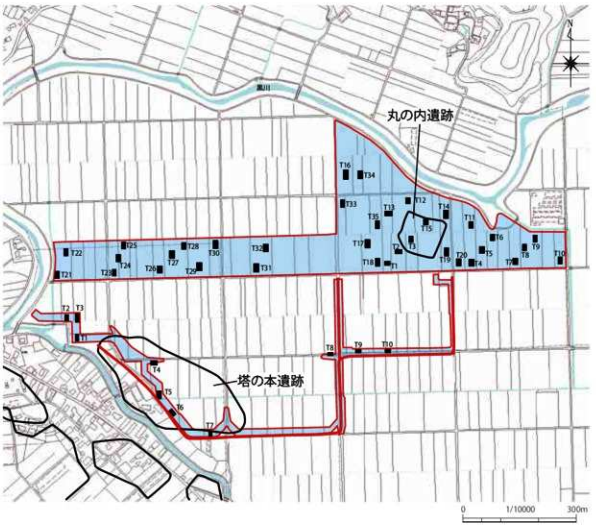


第21図　西鶴遺跡・居屋敷遺跡 トレンチ位置図（S=1/3000）・土層断面図（S=1/50）





第22図　内牧Ｂ遺跡 トレンチ位置図（S=1/3000）・土層断面図（S=1/50）



【塔の本】

№2 トレンチ

25cm	耕作土
29cm	灰褐色粘質土（客土）
31cm	灰暗褐色粘質土（客土）
44cm	黒色土に褐色砂質土のブロックが混じる（客土）
13cm	灰黒褐色粘質土（旧耕作土）
51cm	灰褐色粘質土
	黒色粘質土に赤色土の鉄分が含まれる

500×100

№9 トレンチ

15cm	耕作土
40cm	暗褐色土にパラスが混じる（客土）
45cm	赤褐色土と灰褐色土の互層堆積
	黒色粘質土にアシ等の植物が混じる

400×150

【丸の内】

№1 トレンチ

29cm	耕作土
31cm	茶褐色土（客土）
35cm	黒色土
45cm	黒色土に白色土が互層堆積する
	黒色砂質土（硬質）

200×180

№8 トレンチ

64cm	洪水堆積層
30cm	耕作土
45cm	灰褐色土（砂と粘土が互層堆積）
64cm	黒色土
	褐色土（硬質）

440×240

№22 トレンチ

31cm	耕作土
51cm	暗褐色土（客土）
22cm	暗褐色粘質土
40cm	黒褐色砂質土
	黄褐色粘土

270×190

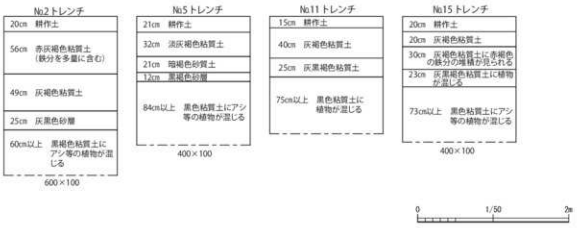
№32 トレンチ

14cm	洪水堆積層
26cm	耕作土
14cm	茶褐色土（客土）
18cm	明褐色粘質土
25cm	黒褐色土
10cm	淀置褐色土
	灰黄褐色土

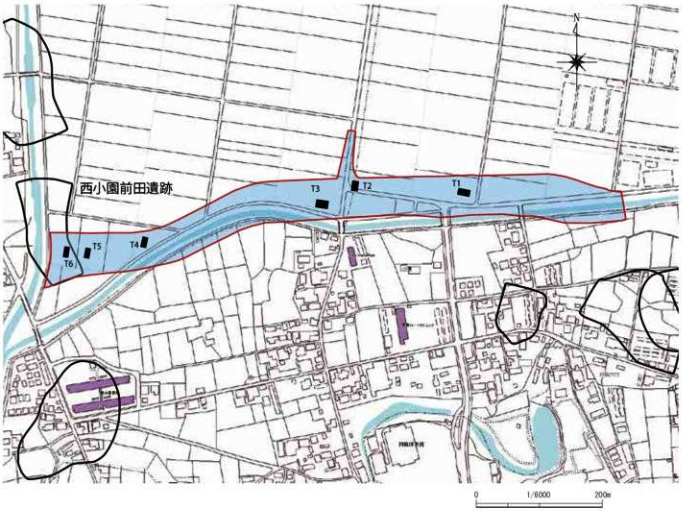
330×150

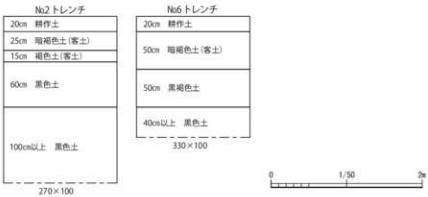
0　1/50　2m

第23図　塔の本遺跡・丸ノ内遺跡 トレンチ位置図（S=1/10000）・土層断面図（S=1/50）

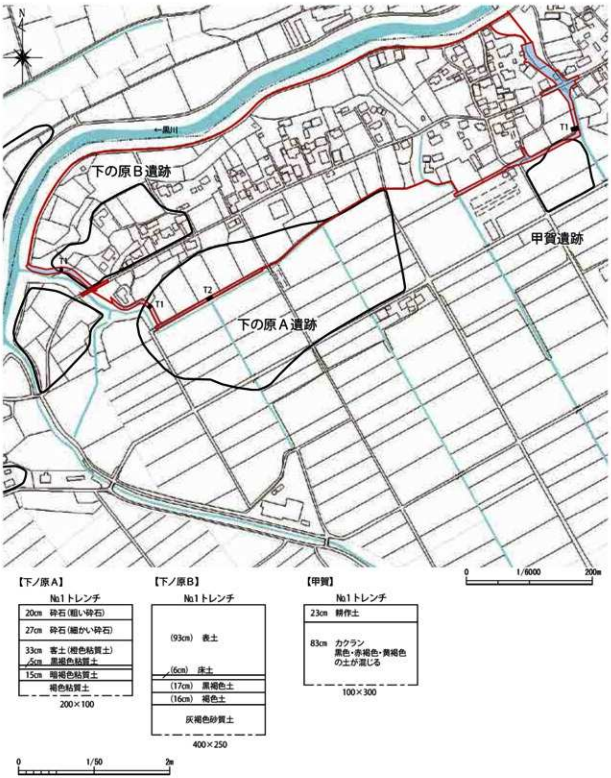


第24図　阿蘇谷条里跡（手野遊水地）トレンチ位置図（S=1/12000）・土層断面図（S=1/50）

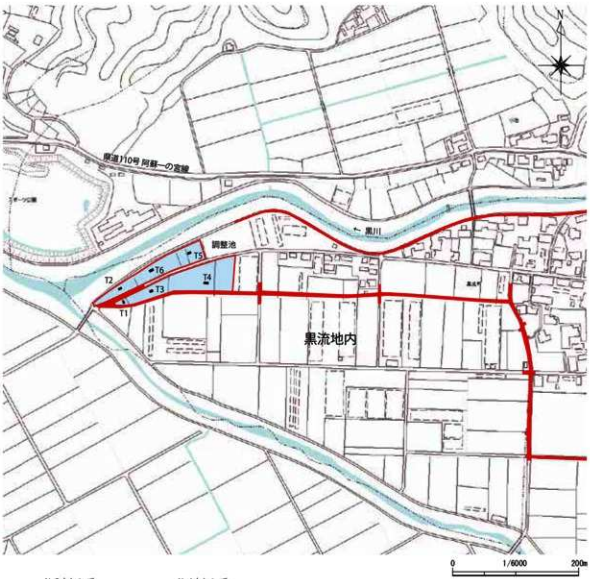




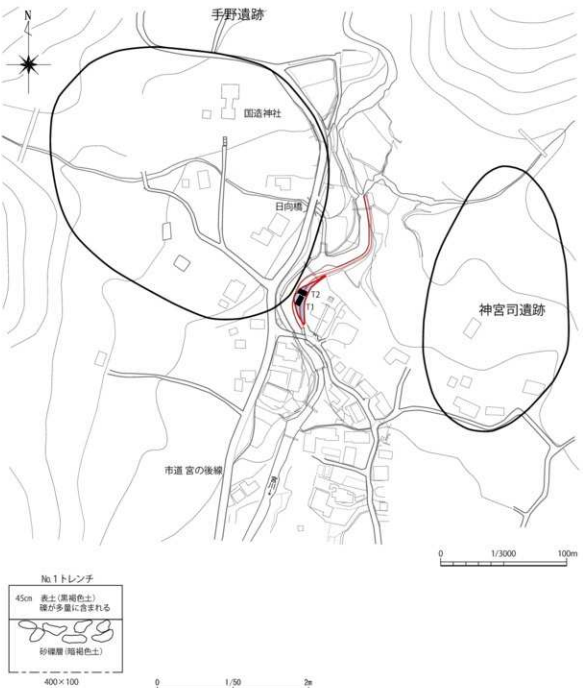
第25図　西小園前田遺跡トレンチ位置図（S=1/6000）・土層断面図（S=1/50）



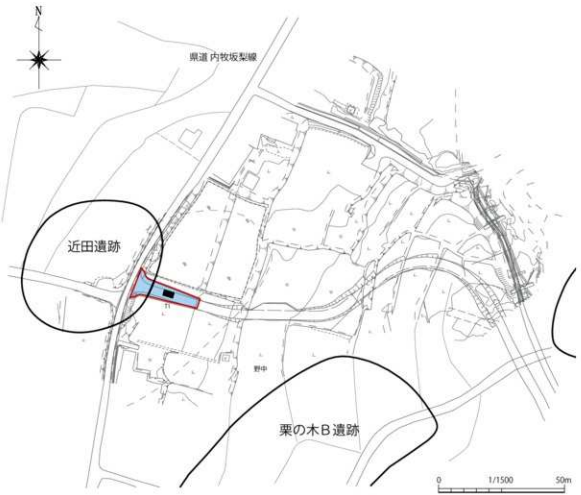
第26図　下の原Ａ・Ｂ遺跡・甲賀遺跡（輪中提）トレンチ位置図（S=1/6000）・土層断面図（S=1/50）

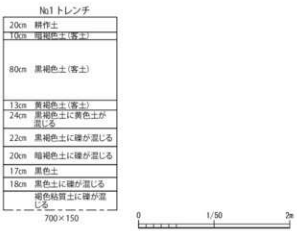


第27図　輪中堤③黒流地内トレンチ位置図(S=1/6000)・土層断面図(S=1/50)



第28図　手野遺跡トレンチ位置図（S=1/3000）・土層断面図（S=1/50）





第29図　近田遺跡トレンチ位置図（S=1/1500）・土層断面図（S=1/50）

第２章　文化財部局の取組

第１節　発掘調査迅速化の取組

多数の遺跡が施工区内に含まれるが、いずれの事業も住民の生命・財産を守る重要な施策として行われるものであり、その遂行は可能な限り優先させる必要がある。一方で事業により影響を受ける文化財の保護を図ることも必要なことであり、災害復興事業の遂行と文化財保護を両立させるため、以下のような発掘調査迅速化の取組を行った。

まず平成２４年度に、熊本県職員に対し熊本広域大水害に伴う埋蔵文化財発掘調査に従事する職員の公募を行った。次に、熊本広域大水害復興事業に限定して、埋蔵文化財の調査基準を設定した（熊本広域大水害に伴う埋蔵文化財調査基準）。基準を定めるにあたっては、埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等の通知（平成１０年９月２９日付け庁保記第７５号）、九州地区埋蔵文化財発掘調査基準（平成１８年９月）を参考に策定した。大きな柱は、「迅速化のため民間調査組織の導入の方針を定めたこと」「調査基準の変更」「調査検討協議会の設置」の３本である。民間調査組織の導入は、発掘調査に積極的に導入する方針を決定し、民間調査機関を熊本県教育委員会の調査体制に組み込むことを明文化し、「発掘調査への民間調査関係組織導入にあたっての方針」を定めた。調査基準の変更は、従来掘削が埋蔵文化財に直接及ばない場合であっても、恒久的な工作物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれる場合は発掘調査をすることとしていたが、掘削が埋蔵文化財に直接及ばない場合は調査の対象としないこととした。調査検討協議会は、考古学、建築史学、歴史学、土木遺産の６名の専門家を持って構成し、調査中に起こった問題を迅速に解決するため、検出した遺構を第三者機関として適切に評価してもらうなど、様々な場面で指導助言を得ることを目的として設置した。

その他、熊本県土木部担当者との連携を密にとることを心がけた。特に熊本県央広域本部土木部では、文化財に関しての担当者を決め、窓口を一本化してもらった。これにより用地買収の進捗状況などの情報をいち早く入手することで迅速な試掘・確認調査が可能となり、発掘調査個所の優先順位や工程を決定する際に大いに役に立った。また試掘・確認調査を複数の調査員で行うこと、その結果を基に発掘調査を実施するか否かを決定するため判定会議を実施した。そして地元住民や事業者に対して信頼を得ることが出来るよう、可能な限り発掘調査現地説明会を実施することとした。

具体事例としての民間調査の導入は、４級基準点測量及びメッシュ杭設置や遺構実測を民間業者に委託することはこれまでも行ってきたところだが、これに加え２６年度調査の託麻弓削遺跡群３区、２７年度調査の下南部遺跡、２８年度調査の新南部遺跡群１２次においては調査を民間業者に委託している。託麻弓削遺跡群３区は１区・２区の調査担当者が、下南部遺跡や新南部遺跡群２次では職員が１名常駐し、調査管理にあたった。また調査基準の変更は、当初想定していたのは遊水池であったが、遺構・遺物が検出されなかったため、該当したのは、河川の堤防や輪中堤だけであった。

一方、調査検討協議会の委員は以下の方々である（順不同、敬称略、協議会当時の肩書）。

甲元眞之（考古学：熊本大学文学部附属永青文庫研究センター）
北野隆（日本建築史：熊本大学文学部附属永青文庫研究センター）
松本寿三郎（日本歴史：熊本大学文学部名誉教授）
山尾敏孝（土木遺産：熊本大学大学院自然科学研究科教授）
小畑弘己（考古学：熊本大学文学部教授）
稲葉継陽（日本歴史：熊本大学文学部教授）

委員の方には予備調査時は、白川流域に存在する江戸期の水田開発のための灌漑施設等の遺構について、絵図等文献史料のご教示や土木工学の見地から指導助言を頂いた。調査中も標石を有する甕棺墓群、縄文時代後期の人骨の検出に関連して貴重な指導助言を頂いた。特に標石を有する甕棺群については、その意義づけを明らかにしてもらうことで保存することができた。協議会として全員参加の会議は当初に数回行っただけであるが、その後も随所で適切な指導助言を頂いた。

また地元住民の方の理解を得る取組としては、発掘調査の成果について可能な限り現場説明会を行った。併せて１年間の調査成果を例年、年度末に行っている「熊本県発掘調査速報会」においてもその成果を発表している。

その結果、熊本広域大水害復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、大きな遅れもなくほぼ予定通りに調査を終了することができた。迅速化の取組以外の大きな要因としては、膨大な面積を削平する遊水池２カ所において埋蔵文化財が発見されなかったことがある。また白川の河川改修については、今回の水害が発生する以前から計画があり、一部は用地買収が完了していたので、水害発生時の平成２４年には、買収により県有地となっていた個所について試掘・確認調査を実施し、文化財が確認された３カ所について翌年の平成２５年に発掘調査を実施できたことも幸いであった。

第２節　調査の経過

平成２４年１２月１３日から試掘・確認調査を開始し、平成３０年５月１４日に行った阿蘇市狩尾地内の輪中堤工事に伴う試掘調査ですべての予備調査が終了した。結果的には、埋蔵文化財発掘調査は平成２９年度１２月から２月にかけて行った弓削前畑遺跡の調査を最後に終了することができた。発掘調査個所は新南部遺跡群で３カ所、下南部遺跡１カ所、上南部遺跡１カ所、吉原遺跡１カ所、中江遺跡１カ所、託麻弓削遺跡群５カ所、竹ノ後・芭蕉遺跡群１カ所、弓削前畑遺跡１カ所の計１４カ所であった。

試掘・確認調査及び発掘調査の時期を年度別に整理すると以下のようになる。

【平成２４年度】（　）は、試掘・確認調査実施日

災害前から県有地になっている熊本市工区個所の確認調査を１２月から１月にかけて実施する。対象となったのは、熊本市工区の竜田口遺跡（１２月１３～１７日）、新南部遺跡群１０次（１２月１３～１７日）・１１次（１２月１３～１４日）及び下南部遺跡（１月１７～１８日）、吉原遺跡（１月１７日）である。この結果、竜田口遺跡を除き遺構・遺物が確認され、まとまった調査面積が確保できる新南部遺跡群１０次・１１次、吉原遺跡で２５年度に発掘調査を実施する予定となる。

【平成２５年度】

菊池郡菊陽町から大津町までの菊池工区内及び阿蘇工区の確認調査を４月から５月にかけて実施する。対象遺跡は、菊陽町西鍋遺跡・居屋敷遺跡（４月２～４日）、大津町内牧Ｂ遺跡（５月１３・１４日）、阿蘇市丸ノ内遺跡（小倉遊水池、４月９～１１日、５月１３・１４日）、近田遺跡（砂防、４月１６日）である。これで菊池工区についてはすべての予備調査が終了する。

７月より熊本市工区の新南部遺跡群１０次（７月２２日～３月１８日）、１１次（７月３０日～３月２４日）、吉原遺跡（７月２９日～３月１９日）の発掘調査を開始する。

一方試掘・確認調査は白川広域大水害復興事業が本格的に開始されたせいか、重機のオペレーターが不足し試掘・確認調査のための重機の手配に影響が出始め、併せて用地買収の関係もあり、思うように試掘・確認調査が進まなくなってしまった。また発掘調査も開始されたことから試掘・確認調査は基本的には１班２名で行うようにした。８月すぎまでに実施できたのは、熊本市工区の中江遺跡（８月５・６日）、託麻弓削遺跡群（８月６・７・２１・２２日）、竜田陣内遺跡群隣接地（９月９日）くらいで、本格的に実施できる

ようになったのは１２月からであった。

１２月から３月に実施した遺跡は、熊本市工区では王田遺跡群（１２月１０日、１月２２日）、牧嶋遺跡群（１２月１１・１２・２６日）、竜田陣内遺跡群隣接地（１２月１２・１９・２５日）、北上遺跡群（１２月１９・２０日）、上南部遺跡（１２月２０日、１月２２日、２月６日）、託麻弓削遺跡群（１２月２４・２５日、１月１５日）、法王鶴遺跡（１２月２５日）、下南部遺跡（１２月２６日）、中江遺跡（２月２５日）、阿蘇工区では塔の本遺跡（小倉遊水池、２月７日）、阿蘇谷条里跡（手野遊水池、２月２７日）、手野遺跡（砂防、３月１１・１２日）である。

遺構・遺物を確認したのは、菊陽町西鶴遺跡、熊本市中江遺跡、託麻弓削遺跡群で、２７年度に発掘調査を実施することになった。掘削範囲が広大な小倉遊水池の確認調査がすべて完了し調査から除外できたのは大きな成果であった。

【平成２６年度】

試掘・確認調査は、熊本市工区の上南部遺跡（５月２７日）、竹ノ後・芭蕉遺跡群（５月２７・２８日）、託麻弓削遺跡群（６月１・１２・１９日、１０月２１日）、中江遺跡（６月１１日）、北上遺跡群（６月１１日）、下南部遺跡（６月２７日）、新南部遺跡群１２次（８月２７日、３月４日）で行った。その結果上南部遺跡、竹ノ後・芭蕉遺跡群、託麻弓削遺跡群、新南部遺跡群１２次の個所で遺構・遺物を確認した。ここまでの試掘・確認調査で、熊本市工区はすべての工事予定個所に試掘・確認調査のトレンチを少なくとも１本は入れており、調査量の把握がおおまかではあるが出来るようになった。残るは用地取得や工作物の撤去が遅れているものだけとなる。

一方発掘調査は、熊本市工区の中江遺跡と託麻弓削遺跡群で行っている。なお、今年度発掘調査予定であった菊池工区の西鶴遺跡は設計が変更になったことから、掘削個所について確認調査を行ない、遺構に影響がないことを確認し終了している。中江遺跡は土地登記の関係で２回に分けて調査を行なった（９月８日～１０月７日、１月８日～２月１９日）。託麻弓削遺跡群は下流側の調査で、面積が広いため３班体制で調査を行なっている（１区７月２３日～１２月９日、２区７月１４日～１２月２４日、３区９月２日～３月３日）。また、年度末からは上流側の調査を開始した（４区３月９日～３１日、５区２月２日～２６日）。

その他２７年度調査予定の上南部遺跡は、客土が厚く遺構確認面まで４ｍ程の深さがあり、土の搬出も遠方まで運ぶため表土剥ぎに相当な時間を要することが予想されたので、２６年１２月から表土剥ぎを先行して行っている。

【平成２７年度】

２７年度の試掘・確認調査は、熊本市工区では法王鶴遺跡（４月１７・２７日）、新南部遺跡群１２次の個所（１０月２０日）で実施している。阿蘇工区では、西小園前田遺跡（８月１８・１９日）、阿蘇市黒流地内の輪中堤③の調整池部分（８月１９日、１０月７日）、阿蘇谷条里跡（手野遊水、１２月２４日）で実施した。掘削範囲が広いため懸念していた手野遊水は、完全に調査が終わったわけではないが、ほぼ調査から除外できる目途がつく。

一方発掘調査は、託麻弓削遺跡群（４区６月１９日～１０月９日、５区４月１４日～３月３１日）、上南部遺跡（６月４日～２月２４日）、下南部遺跡（１１月１０日～２月３日）で行っている。なお、託麻弓削遺跡群５区については縄文時代の人骨が出土するなど重要な発見が相次いだため２８年度も継続して調査を実施することとなる。

【平成２８年度】

年度当初に起こった熊本地震のため、試掘・確認調査や発掘調査に遅れが生じる。竹林等工作物の伐採ができず、処分もできない状況となり、予定していた託麻弓削遺跡群の確認調査は次年度に持ち越す。試掘・

確認調査を実施できたのは、阿蘇工区の阿蘇谷条里跡（手野遊水、９月７日）だけであり、遺構・遺物は検出されなかった。

発掘調査は、昨年から継続している託麻弓削遺跡群５区（６月６日～８月３１日）、新南部遺跡群１２次（８月１８日～２月２３日）で実施した。

【平成２９年度】

本年が激甚災害事業の最終年である。試掘・確認調査は、熊本市工区の下南部遺跡（４月１３日）、託麻弓削遺跡群（５月２９・３０日）と弓削前畑遺跡（９月２７日）で行い、弓削前畑遺跡で遺構・遺物が確認された。阿蘇工区では下の原Ａ遺跡・Ｂ遺跡（輪中堤①、８月１６日）で実施し、遺構・遺物は確認されなかった。

発掘調査は、竹ノ後・芭蕉遺跡群（１０月５日～１１月９日）、弓削前畑遺跡（１２月１３日～２月１６日）の２カ所で行っている。

【平成３０年度】

最後まで残っていた阿蘇工区の甲賀遺跡隣接地（輪中堤①、５月１４日）で試掘確認調査を実施し、遺構・遺物が存在しないことを確認し、すべての調査を終了する。なお、甲賀遺跡と接触する個所は、阿蘇市教育委員会で農地の震災復興事業に伴い工事立会が行われた際にも遺構に影響がないことが確認されており、その結果から輪中堤の工事も影響がないことを確認している。

第３章　未調査の埋蔵文化財個所の対応について

第１節　工事立会とその結果について

遺跡の範囲内であるが、遺構への影響は少ないと予想される場合や、溝と思われるような遺構は確認したが、調査幅が２ｍにも満たず、安全勾配を確保すると本格的な調査が出来ない場合などは、工事立会を行っている。それ以外に、調査は実施しているが調査区内に農業用の水路が存在し、後背地の水田で利用されている場合や、白川に隣接して道路があり現在も利用されている場合は、その個所の調査を行っていない。発掘調査を実施する中で、この未調査部分にも遺構が広がる可能性があると判断した場合は、工事施工中に立会って遺構の有無を確認し、遺構を検出した場合は、実測図の作成や記録写真を撮るなどの調査を行っている。また設計で法面の傾斜角度が変わり、更に１ｍ程削平される個所になった所も同様である。

１　竜田口遺跡（第６図）

下流側は、用地幅も狭く重機の進入が困難等で確認調査が出来なかった所で、遺構への影響は少ないことから工事立会としていた個所である。平成２９年１０月３日に実施し、施工箇所は攪乱を受けていることがわかった。

２　新南部遺跡群１２次（第８図）

調査区の上流端は、用地取得が進まず確認調査が出来なかった所だが、その地点まで遺跡が広がると予想し、調査範囲に含めていた個所である。調査に入るまでに用地取得が進まなかったため、用地取得後の平成２８年１１月２８日にトレンチ調査を行っている。結果的には全域が攪乱を受けており、遺構は存在しなかった。

下流端は、国道３号（通称北バイパス）の橋梁に隣接するため調査を行っていない個所であり、施工時に立会を実施する予定であったが、施工業者と認識に相違があり調査区側の掘削が進んでしまっていた。平成２９年６月２６日に工事立会を行ったが、橋梁側は攪乱を受けており、遺構は確認出来なかった。

３　下南部遺跡（第１０図）

白川側に竪穴建物（ＳＯ０１・ＳＯ０２）が続くために、平成２９年４月２８日及び５月８日に工事立会を行った。竪穴建物の深さが１０㎝弱しかないためか、遺構らしきものは確認出来なかった。

４　牧鶴遺跡群（第１１図）

確認調査範囲の両端で、幅が狭く本格的な発掘調査が出来ない個所で、遺物があることや溝状の堆積があることから、平成２８年１０月２０日に工事立会を行ったが、遺構・遺物は確認出来なかった。

５　上南部遺跡（第１４図）

平成２７年度に調査された遺跡である。白川左岸に位置し、上流側から１区、２区、３区とされている。客土により見かけは平坦であるが、旧地形は１区から下流に向かって低くなり、２区と３区とでは50㎝程の高低差がある。調査では縄文時代の遺物や弥生時代の遺構と遺物が検出されているが、縄文時代の遺物は３区に限られる。弥生時代の遺構・遺物の多くは１区２区で検出され、主なものは竪穴建物１４軒、甕棺墓３基で弥生時代中期が主である。甕棺墓３基は２区の集落の中で検出されている（尾崎　２０１７）。

２区の白川側の道路部分については、平成２８年５月２５日に工事立会を行ったが、遺構面まで削平を受けていた。また２区と３区の間にあった水路部分について、平成３０年９月３日に工事立会を行った。中央に幅約２ｍの暗渠排水があり、その個所はすでに破壊されているが、３区側には明確な遺構はないものの、２区では調査区際まで竪穴建物が存在するので、この場所にも竪穴建物等の遺構が続く可能性があった。結果的には１３号竪穴建物の南西壁と思われる遺構の検出だけにとどまった。幅５㎝前後で帯状のプランが検出されたものの、平面では不明確なため断ち割ると床面らしきものが確認されたことから１３号竪穴建物の

南西壁と推定した。埋土から甕の口縁片を検出した。それ以外に遺構はなく、遺物も２区側で数点が出土したのみで、３区側では遺物も出土していない。上流から下流に行くにつれ遺構確認面レベルが低くなっていき、２区と３区の間で５０cm程の高低差がある。今回工事立会を行った２区と３区の間の個所は、水路工事などでより削平されているようである。

６　吉原遺跡（第１６図・３０図）

平成２５年に調査された遺跡である。白川の左岸に位置し調査区は上流側から２区、１区、３区となる。調査では古墳時代の竪穴建物７軒と弥生時代の竪穴建物３５軒及び甕棺墓４基等が検出されており、弥生時代中期を中心とした遺跡であった（尾崎　２０１６）。竪穴建物は上流側の２区に集中し、下流に行くにつれ希薄となり、３区では検出されていない。甕棺墓は居住域の中に点在し、墓域といったものは無いようである。４基の甕棺のうち３基に人骨が認められているがすべて幼児であり、或いは幼児用という性格から集落の中に設けられたものかも知れない。今回の工事立会は、平成２９年４月１４日に第１回目の立会を行い、その後４月１９日から２５日にかけて２回目の立会、５月２４日に３回目最後の立会を行っている。

１区と３区の間及び１区と２区の間の水路部分が主である。他に北側（白川側）で遺構が拡がる可能性のある個所について行った。結果的には北側及び１区と２区の水路部分は削平されており遺構の検出はなかった。１区と３区の間も攪乱がひどく、１区の６号７号竪穴建物、３区の４５号竪穴建物の拡がりが検出されると思っていたが既に削平されていた。結果的に新たに検出された遺構は、９４２２グリッド（Ｓ１０１・Ｔ１０１）に位置する甕棺墓２基のみである。遺構番号は、吉原遺跡の報告書の遺構番号を引き継いだ形で付けており、新たに検出した甕棺墓を５号甕棺墓と６号甕棺墓とした。土坑の底面レベルは、１区の１号・２号甕棺は標高４４．３m前後、３区の４号甕棺は４３．８mであるのに比べ、５号甕棺は４４．７８m、６号甕棺は約４５．０２mと浅い位置にあるため、かなりの部分が削平されてしまっていた。

５号甕棺墓（第３１図・３３図）

下棺のみが残存する。２個体の甕からなる連結甕棺である。埋納角度は３０度程である。上部を削平されているため土坑のラインは不定形である。現状で長軸約１６３cm、短軸は中央で約７０cm。深さは約４０cmである。上位の甕は比較的大型だが、削平で上半分は削平されている。底部を欠損している。下位の甕は小型で、若干削平を受けてはいるが、８割方は原形をとどめ、底部は完全に残存する。本来は二段墓坑で、上棺も含め上部が削平されたものと考えられる。連結した下棺の長さは１．１m程になる。棺内から歯を検出しているが空洞に近い状態であった。

１は、上位の甕で底部を欠損する。削平で半分を欠損するが、反転復元が可能である。口縁の断面は丸みを帯びた三角形で、口縁下に二条の突帯を巡らす。最大径は胴部上半にある。外面には細かいハケメ調整が施されている。

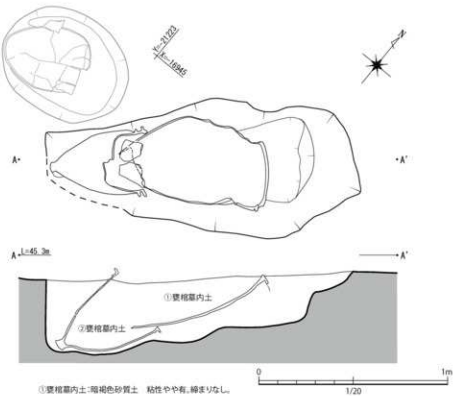
２は、下位にあった台付甕で、口縁部の一部を欠損するもののほぼ完形に近い。口縁の断面形は丸みを帯びた三角形で、内側にも張り出しが認められる。口縁下に一条の突帯を巡らす。最大径は胴部上半にあり、全体形は１に類似するが、胴部の張り出しは弱い。短く厚い脚がつく（上げ底）。外面は細かいハケメ調整が施される。また黒斑も認められる。

６号甕棺墓（第３２図・３３図）

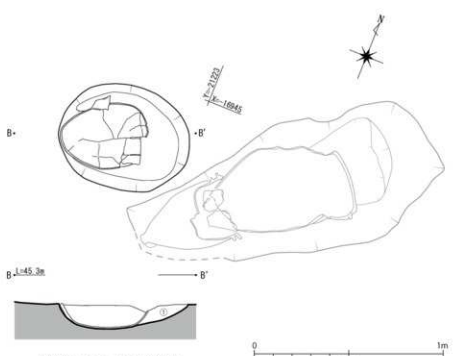
削平でかろうじて下位部分が残っていた甕棺墓である。土坑は現状では長軸約６９cm、短軸約５６cmの楕円形で、深さ約１３cmである。土器の残存状況が悪く、埋納角度もはっきりしないが、底部を基準にすると２５度程である。

３は、平底の壷で口縁部を欠損する。最大径は胴部上位にあり、そこに一条の刻目突帯を巡らす。甕棺としてはかなり小型である。

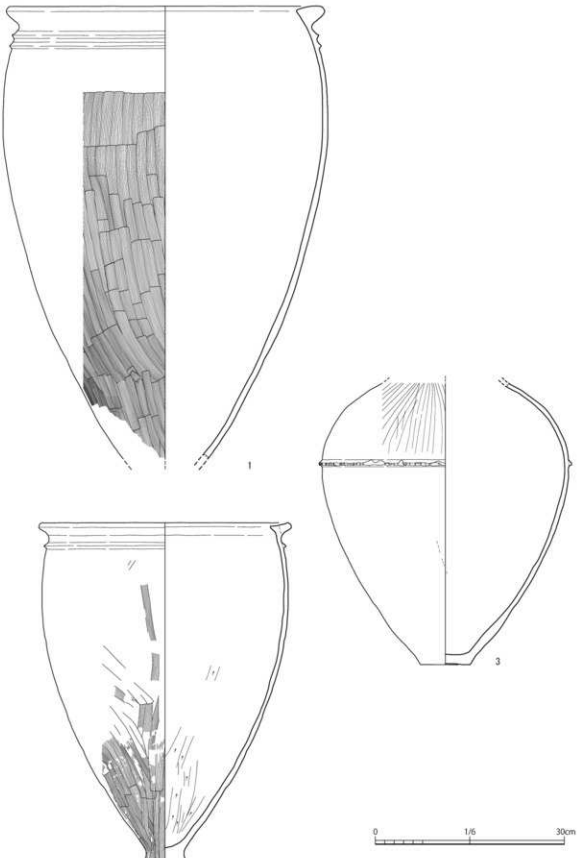
第30図　吉原遺跡遺構配置及びグリッド図(S=1/500)



第31図　吉原遺跡５号甕棺墓実測図（S=1/20）



第32図　吉原遺跡６号甕棺墓実測図（S=1/20）



第33図　吉原遺跡５号・６号甕棺墓甕棺実測図(S=1/6)

吉原遺跡の調査ではこれまで４基の甕棺墓が検出されているが、すべて二段土坑であること、土器からは今回のものと大きな時期差はないことから、この両者も上にもう一段の土坑があった可能性が高い。更に、近接していることから、同じ土坑内に掘り込まれていた可能性も有り得る。前述したが、前回の４基の甕棺のうち３基に人骨が認められているがすべて幼児であり、５号と６号甕棺ともに幼児用と思われる。

7　中江遺跡（第１７図）

設計が変更になり１m程掘削が広くなるために、平成２９年７月１２日及び２０日に工事立会を行った。２区・３区地点で遺物は出土するものの、流れ込んだもので、白川に向かって下降していく個所であったと思われる。

8　託麻弓削遺跡群（第１９・２０図）

３区に隣接する道路部分の工事立会を平成２９年１２月１３日に、５区に隣接する道路部分の立会を平成３０年２月２６日に行った。いずれも道路側まで遺構が拡がるのではないかと予想していた個所で、特に５区は土壙墓が拡がる可能性を予想していたが、いずれも道路造成時に遺構面まで削平を受けていた。

第２節　未調査個所の埋蔵文化財の今後の対応について

前述したとおり、発掘調査迅速化への取組として「熊本広域大水害に伴う埋蔵文化財調査基準」を設定し、掘削が埋蔵文化財に直接及ばない場合は調査を行っていない。該当するのは川と輪中の堤防部分である。将来的に更に大規模な河川改修等の工事が行われる場合は、工事内容にもよるが調査が必要となる。

その他、新南部遺跡群第１１次調査（第６図）で検出された標石を有する甕棺墓群については、調査検討協議会を開催し、「保存に値する遺跡」との評価を頂き、県土木部との協議の結果、平成２６年３月２４日付で、土木部河川港湾局河川課と教育庁教育総務局文化課の間で「白川水系河川激甚災害対策特別緊急事業で出土した埋蔵文化財に関する確認書」を締結し、当面は現状のまま保存されることになった。また１１次調査区南側の後背地も、当初は調査の予定であったが、１１次調査時点では用地取得が完了していないため未調査であった。結果的に前面の１１次調査区が保存されることになったため、この地点も現状のままとなっている。しかし将来更に大規模な河川改修が行われる場合は、遺跡に影響を及ぼす可能性が大きく、影響が避けられない場合は１１次調査区南側の後背地も含めて調査が必要となる。

表２　吉原遺跡土器観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土地点	法量 (cm) ※（ ）は復元値 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考	図版番号
33	1	弥生土器	甕（甕棺）	5号甕棺墓	(48.6)	—	71.9	ヨコナデ、ナデ、ハケメ	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英、長石、雲母	貼付突帯、黒斑あり。	3
	2	弥生土器	台付甕（甕棺）	5号甕棺墓	(36.8)	(6.6)	55.0	ハケメ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ケズリ、ケズリ後ナデ、ヨコナデ	明黄褐 2.5Y7/6	浅黄 2.5YR8/4	長石、石英、白色砂粒	胴部に黒斑あり。	4
	3	弥生土器	壺（甕棺）	6号甕棺墓	—	7.8	44.6	ナデ	ナデ	明黄褐 10YR6/8	明黄褐 2.5Y7/6	石英、長石	刻目突帯、外面に黒斑あり。	4

第４章　総括

第１節　試掘・確認調査や工事立会の成果と課題

１章で予備調査の概要を、２章で文化財側の取組とこれまでの調査の経過を、３章で工事立会の結果と未調査個所への今後の対応について記載した。順番は前後するが、まず予備調査や工事立会についてまとめ、最後に文化財側の取組と課題についてまとめ、総括とする。

平成２４年７月１２日に起こった熊本広域大水害復興事業に伴う試掘・確認調査は、工事面積に違いはあるものの全４１カ所で行い、平成２４年１２月１３日から開始し、平成３０年５月１４日で終了した。発掘調査は８遺跡全１４カ所で行い、平成２５年７月から開始し、平成３０年２月で完了した。調査報告書も今回の報告ですべてが完了する。

ここまで行った試掘・確認調査の土層の検討からは、通常この地域で見られるアカホヤの２次堆積層より上層は河川沿いの土層も大差ないが、このアカホヤ２次堆積層に対応すると考えている層（Ⅳ層）以下は大きく異なってくる。対応すると考える層は黄褐色を基本色とし、色調はアカホヤ２次堆積層に近いが、ガラス質を含んでいない。この相違について、今回科学的分析を行っておらず、これ以上言及できない。河川の氾濫や気候変動などが要因であるのかは、今後の検討課題である。また下層に見られ、硬質砂層と呼んでいた砂が固まった層の形成要因も検討が必要となる。

また工事立会の結果、新たに遺構が検出されたのは、吉原遺跡の甕棺だけであり、これまで刊行した報告書の内容が変わるものはない。工事立会の多くは、調査区に隣接し、遺構が検出される可能性が高い個所であった。特に遺構が工事立会個所まで続くと考えられる場合など、遺構の位置を特定しておく必要があった。ところが、現地に行くと工事により周囲の景色が変わってしまい、調査位置を特定するのが難しかった個所もある。もちろん時間をかければ座標軸の位置はわかっているので特定はできるのだが、工事の中断を最小限にするためには、位置を特定する簡易な方法を考えておく必要があることを痛感させられた。

第２節　文化財部局の取組と課題

熊本広域大水害復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、大きな遅れもなく予定通りに調査を終了することができた。迅速化の取組として、民間調査組織を導入したことが大きいが、調査検討協議会委員の方々に気軽に相談できたことも大きな要因であった。また、熊本県土木部からは現場事務所や駐車場用地の提供、排土運搬など多大な協力があったことも迅速化に寄与した。掘削面積の広い遊水池で遺構・遺物が確認されなかったと言う好運な面もあった一方で想定外のこともあった。特に平成２８年４月に起こった熊本地震の影響は大きかった。試掘・確認調査予定地の竹林の伐採は発注しても業者が決まらないまま１年が過ぎてしまい、２９年度も伐採の搬出先は県内では受け入れてもらえず、県外へ搬出することでやっと完了するような状態であった。とは言え平成２７年度までに、ある程度は試掘・確認調査が完了しており、残されている個所で遺構・遺物が確認されたとしても、調査面積はそれ程広い個所はなく、今後の業務量の見通しがついていたので、影響は最小限に抑えられた。

災害復興に伴う調査と言っても、予備調査や発掘調査の手順は通常の調査と同じであり、期限どおりに調査を終了させることは通常の調査でも当然のことである。しかし大きく違うのは、調査範囲が広大であること。被災し脆弱となった土地だと少しの雨等でも更なる被害が発生する可能性があり、より緊急性があること。既に個人の生命・財産に被害を受けられている方々がいらっしゃる。そのような中では、よりいっそう迅速な発掘調査が求められるし、地域住民や事業者の理解を得る必要がある。

予備調査では、用地買収が難航している個所は最後まで試掘・確認調査ができず、発掘調査量の把握もで

きず、人員や予算措置にも支障がでてしまい、引いては発掘調査の遅延につながる。文化財部局として試掘・確認調査が出来なくても、この個所は発掘調査になる可能性が高い等の判断がある程度出来るまでに、個々の遺跡の情報を把握しておくことは今後の課題と考える。その点、阿蘇市教育委員会が行っている遺跡地図のＧＩＳデーター化の取組（宮本　２０１７）は参考となる。これは県だけでなく、市町村を含めた取組が必要である。

また地域住民や事業者の理解を得るには、期限内に調査を終了することが第一であり、機会をみて情報を発信する取組も有効と考えられる。しかし調査精度を落とすことなく、予備調査や発掘調査をいかに迅速化するかは簡単なことでない。これまでの取組以外に考えられるのは、発掘調査に入るまでの準備期間、とりわけ事務処理の効率化、調査員の資質向上などありふれたものしか思い浮かばないが、少しでも迅速化につながる方法を日頃から検討しておく必要がある。平成２４年の熊本広域大水害、平成２８年の熊本地震と立て続けに経験した立場からは、喫緊の課題である。

【参考文献】

尾崎潔久　２０１７『上南部遺跡』熊本県文化財調査報告　第３２６集　熊本県教育委員会

木下尚子・松田光太郎・大坪志子・山野ケン陽次郎・大崎喜美子　２０１６「Ⅱ－２　黒髪南地区」『熊本大学理蔵文化財調査センター年報』２１　熊本大学埋蔵文化財調査センター

坂井田端志郎他　２０１８『託麻弓削遺跡群２』熊本県文化財調査報告　第３３１集　熊本県教育委員会

中村幸弘　１９９９『石の本遺跡１』熊本県文化財調査報告　第１７７集　熊本県教育委員会

日野尚志　１９７７「６　阿蘇谷の条理」『熊本県の条理』熊本県文化財調査報告第２５集

廣田静学・宮本大・尾崎潔久・福田匡朗　２０１６『新南部遺跡群（10次・11次）　古原遺跡』熊本県文化財調査報告　第３２０集　熊本県教育委員会

古城史雄　２０１６『託麻弓削遺跡群・中江遺跡』熊本県文化財調査報告　第３２１集　熊本県教育委員会

宮本利那　２０１７「平成２８年熊本地震による文化財被害とその復興が抱える諸問題　（５）簡易ＧＩＳを活用した埋蔵文化財情報の統合管理と大規模災害への対応について」『一般社団法人　日本考古学協会第８３回総会　研究発表要旨』一般社団法人　日本考古学協会

山下義満　２０１７「下南部遺跡群」熊本県文化財調査報告　第３２５集　熊本県教育委員会

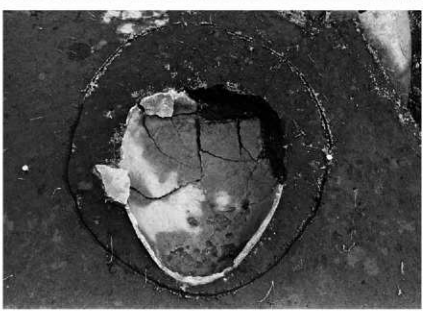
山下義満　２０１８『新南部遺跡群（12次）』熊本県文化財調査報告　第３２９集　熊本県教育委員会

5号・6号甕棺墓 検出状況
（南から）

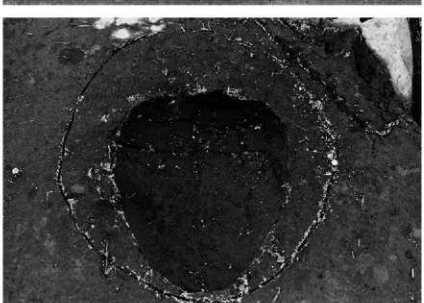
5号甕棺墓 検出状況（北東から）

5号甕棺墓 出土状況（南から）

5号甕棺墓 完掘状況（南東から）



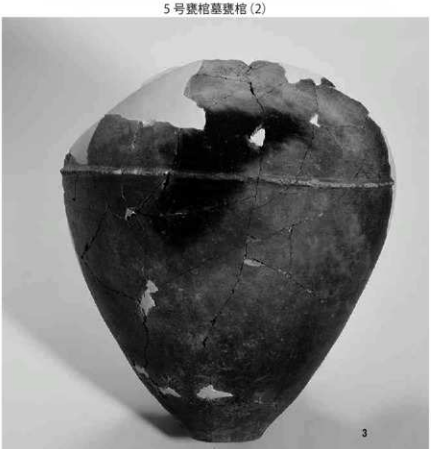
6号甕棺墓 検出状況（南から）



6号甕棺墓 完掘状況（南から）

5 号甕棺墓甕棺 (1)

5 号甕棺墓甕棺 (2)



6 号甕棺墓甕棺

報 告 書 抄 録

ふりがな	ゆげまえはたいせき　たけのしろ・ばしょういせきぐん
書　名	弓削前畑遺跡　竹ノ後・芭蕉遺跡群
副書名	白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (7)
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 334 集
編著者	古城史雄　中川治　島浦萌
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒 862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
発行年月日	2019 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ゆげまえはたいせき 弓削前畑遺跡	くまもとけん 熊本県 くまもとし 熊本市 きたく 北区	43201	374	32° 50′ 51.97886″	130° 46′ 58.49576″	20171113 ～ 20180216	1,300 ㎡	記録保存 調査

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たけのしろ・ばしょういせきぐん 竹ノ後・芭蕉遺跡群	くまもとけん 熊本県 くまもとし 熊本市 きたく 北区	43201	388	32° 50′ 05.43549″	130° 45′ 52.46783″	20171005 ～ 20171109	1,300 ㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	遺構	遺物	特記事項
弓削前畑遺跡	集落	弥生時代	竪穴建物 9 軒 土坑 6 基 円形周溝遺構 1 基	縄文土器 弥生土器 石包丁 摘鎌 ヤリガンナ 不明鉄製品	
竹ノ後・芭蕉遺跡群	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 近代	土器棺 1 基 竪穴建物 1 軒 土坑 1 基	縄文土器 弥生土器 須恵器 陶磁器 瓦	

要　約	弓削前畑遺跡の主体は弥生時代後期で、竪穴建物 9 軒を検出した。約２００m東で熊本市により調査された法王鶴遺跡と一連の遺跡である可能性が高く、舌状の地形の中、北側を溝で、東・西・南を白川によって区画された集落であったことが予想される。 一方竹ノ後・芭蕉遺跡群の調査区は削平を受け遺構がかろうじて残っていたにすぎないが、本来は弥生時代中期や古墳時代終末期頃の集落が存在していたことが窺える。

熊本県文化財調査報告第 334 集

弓削前畑遺跡
竹ノ後・芭蕉遺跡群

－白川阿川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (7) －

発行年月日　平成 31 年 3 月 31 日

編　集　熊本県教育委員会
発　行　〒862-8609　熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印　刷　ホープ印刷株式会社
製　本　〒861-8007　熊本県熊本市北区龍田弓削1丁目 4 番12号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第３３４集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：弓削前畑遺跡竹ノ後・芭蕉遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺６丁目18番１号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦２０２０年４月１０日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。
熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/